静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第105集

小　池　遺　跡

平成９年度　東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９８

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第105集

小　池　遺　跡

平成９年度　東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９８

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

東駿河湾環状道路は沼津、三島市街地の慢性的な交通渋滞を緩和する目的で建設が計画された広域道路で、沼津市岡宮～愛鷹南麓、長泉町、箱根西麓を経由して函南町の熱函道路に至る予定である。この地域は、古くから多くの埋蔵文化財の包含地としても知られており、道路建設予定地内にも多くの遺跡が存在している。これらは周知の遺跡として登録されていることにより、その実態が充分に明らかにされないまま現在に至るまで保存されている。当研究所におけるこの東駿河湾環状道路に伴う緊急調査は、今年で７年目をむかへ、調査面積も箱根西麓を中心に、約７万㎡になろうとしている。

小池遺跡は三島市徳倉に位置し、東駿河湾環状道路建設のための埋蔵文化財の事前調査によって新しく登録された遺跡である。谷に挟まれた痩せ尾根上はナラやクヌギ等の広葉樹が茂る自然林であり、その頂上付近より縄文時代中期の住居跡が４軒検出された。遺物の出土状況や炉の使用状況より、長期にわたって使用されたものではなくキャンプサイト的なものであったと考えられる。遺物は縄文時代早期から晩期にわたっており、特に早期後半の貝殻条痕文系の土器は数において当遺跡を代表するものである。また遺構外出土遺物ではあるが、晩期の安行Ⅲａ式土器が出土していることは大変興味深い。

近年、汎日本的に開発行為に伴う埋蔵文化財の緊急発掘が増加する中で、この静岡県も例外ではなく東駿河湾環状道路や第二東名を代表するような１遺跡１万㎡を越す大規模発掘が多数行われている。記録という形で保存、蓄積されていく膨大な遺跡資料が、研究、教育という分野で新たに活用され、文化財の理解と保護に役立っていくことを期待する。

最後になったが、調査ならびに本書の作成にあたっては建設省をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力をうけた。厚くお礼を申し上げる。またこの場をお借りして、現地調査・資料整理に参加した調査員・作業員の労をねぎらいたい。

平成１０年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所　長　斎　藤　　忠

例　　言

1　本書は静岡県三島市徳倉1173 - 1に所在する小池遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成７年度に実施した第１次調査（試掘調査）の結果を受け、平成９年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成９年４月から同年１０月まで現地調査を実施した。

3　小池遺跡の資料整理は、平成９年１１月から平成１０年３月まで実施した。

4　調査体制は、以下のとおりである。

平成７年度（試掘調査）

所長　斎藤　忠、副所長　池谷和三、常務理事　三村田昌昭、調査研究部長　小崎章男、

調査研究４課長　橋本敬之、調査研究員　仲家三千彦

平成９年度（本格的調査・資料整理）

所長　斎藤　忠、副所長　池谷和三、常務理事　三村田昌昭、調査研究部長　石垣英夫、

調査研究４課長　橋本敬之、

調査研究員　笹原千賀子・井上　隆（至11月）・増井啓太（至９月）

5　整理作業の迅速化をはかるため、石器の実測の一部と実測用写真の撮影を㈱シン技術コンサルに委託した。

6　調査では以下の方々、団体に御指導、御助言を賜った。厚くお礼申し上げる。（敬称略）

上杉　陽（火山灰）　三島市教育委員会　沼津市教育委員会

7　本書の作成、執筆は職員が分担しておこなった。執筆分担は目次に（　　）で示した。

8　発掘調査資料は、すべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

9　本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所がおこなった。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　調査区の方眼設定は、国家座標（平面直角座標Ⅷ系）の軸線を基準に、国家座標（−94450.00, 38710.00）＝（A，1）と設定した。

2　出土遺物は各層ごとに４桁の通し番号を付して取り上げ、石器Ｓ、土器Ｐ、礫Ｒの略号を付した。

3　土器挿図中のNO.は同一個体の場合数字の枝番としてアルファベットを用いた。

4　石器の実測は原則として第三角投影図法に拠った。

5　出土遺物の実測図の縮尺は、原則として土器1/2、石器1/1、1/２、4/5としたが、一部異なっているものもある。全挿図にスケールを付している。

6　挿図中の図面は、原則として北方向を図面の上とし、特別変更のある場合は方位により北方向を示した。縮尺は各図に示すとおりである。

7　土層、土器の色調は、新版『標準土色調』（農林水産技術会議事務局監修　1992）を使用した。

8　本文中の遺構・遺物に関する標記は以下のとおりである。

層名				遺構	
FBa	富士黒土層a	BBⅡ	第Ⅱ黒色帯	SB	住居跡
FBb	富士黒土層b	SCⅡ	第Ⅱスコリア層	SP	ピット
YL	休場層	BBⅢ	第Ⅲ黒色帯	遺物	
BB0	休場層直下黒色帯	SCⅢs1	第Ⅲスコリア帯スコリア1	⊢- - - - -⊣	タタキ面
SCⅠ	第Ⅰスコリア層	SCⅢb1	第Ⅲスコリア帯黒色帯1	⊢———⊣	スリ面
BBⅠ	第Ⅰ黒色帯	SCⅢs4	第Ⅲスコリア帯スコリア4		タタキの範囲
NL	ニセローム				スリの範囲

岩石和名	岩石英名	略号
ガラス質黒色安山岩	Glassy-Black-Andesite	GAn
黒曜石	Obsidian	Ob
ホルンフェルス	Hornfels	Hor
頁岩	Shale	Sh
圧砕岩	Mylonite	My
硬質細粒凝灰岩	Hard-Fine-Tuff	HFT
珪質細粒圧砕岩	Siliceous-Fine-Mylonite	SFM
緑色凝灰岩	Green-Tuff	GT
細粒安山岩	Fine-Grain-Andesite	FAn
硬砂岩	Hard-Sandstone	HS
砂岩	Sandstone	SS
白雲母片岩	Muscovite-Schist	MS
輝石安山岩	Pyroxene-Andesite	An
角閃岩	Amphibolite	Amp
玄武岩	Basalt	Ba
玄武岩質溶岩	Basalt-Laba	BaL
石英質砂岩	Quartz-Sandstone	QS
角閃石デイサイト	Hornblede-Dacite	HD
閃緑岩	Diorite	Di
デイサイト	Dacite	Da
石英閃緑岩	Quartz-Diorite	QD
安山岩質溶岩	Andesite-Lava	AnL

目　　次

序
例　言
凡　例

第Ⅰ章　調査の概要（井上・川口）…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の方法…… 1
　第３節　調査の経過…… 4

第Ⅱ章　遺跡の概要…… 6
　第１節　地理的環境（夏目）…… 6
　第２節　歴史的環境（夏目）…… 6
　第３節　土層堆積状況（笹原）…… 8

第Ⅲ章　縄文時代の遺構と遺物（笹原）…… 11
　第１節　遺　構…… 11
　第２節　遺　物…… 19
　　１　土　器…… 19
　　２　石　器…… 58

第Ⅳ章　調査の成果と課題（笹原）…… 79

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　国家座標と遺跡の地形 …… 2
第２図　調査の範囲 …… 3
第３図　グリッド配置図 …… 4
第４図　周辺の縄文時代の遺跡 …… 7
第５図　土層柱状図 …… 9
第６図　土層堆積状況 …… 10
第７図　遺構全体図 …… 12
第８図　1号住居跡全体図 …… 13
第９図　1号住居跡遺物出土状況図 …… 13
第10図　2号・3号住居跡全体図 …… 14
第11図　2号・3号住居跡遺物出土状況図 …… 15
第12図　4号住居跡全体図 …… 15
第13図　5号住居跡全体図 …… 16
第14図　5号住居跡遺物出土状況図 …… 17
第15図　ピット平面・断面図 …… 18
第16図　縄文時代早期土器平面分布 …… 21
第17図　Ⅰ群・Ⅱ群土器 …… 22
第18図　Ⅱ群土器 …… 23
第19図　Ⅲ群土器１ …… 24
第20図　Ⅲ群土器２ …… 25
第21図　Ⅲ群土器３ …… 26
第22図　Ⅲ群土器４ …… 27
第23図　Ⅲ群土器５ …… 28
第24図　Ⅲ群土器６ …… 29
第25図　Ⅲ群土器７ …… 30
第26図　Ⅲ群土器８ …… 31
第27図　Ⅲ群土器９ …… 32
第28図　Ⅲ群土器10 …… 33
第29図　Ⅲ群土器11 …… 34
第30図　Ⅲ群土器12 …… 35
第31図　Ⅳ群土器 …… 36
第32図　縄文時代前期土器平面分布 …… 38
第33図　Ⅴ・Ⅵ群土器 …… 39
第34図　Ⅵ群土器１ …… 40
第35図　Ⅵ群土器２ …… 41
第36図　Ⅵ群土器３ …… 42
第37図　Ⅵ・Ⅶ群土器 …… 43
第38図　縄文時代中期土器平面分布 …… 45
第39図　Ⅷ群土器１ …… 46
第40図　Ⅷ群土器２ …… 47
第41図　Ⅷ群土器３ …… 48
第42図　Ⅷ群土器４ …… 49
第43図　Ⅷ群土器５ …… 50
第44図　Ⅷ・Ⅸ群土器 …… 51
第45図　石器平面分布 …… 57
第46図　尖頭器・石鏃 …… 59
第47図　石鏃 …… 60
第48図　石匕 …… 61
第49図　石匕・楔形石器 …… 62
第50図　石斧１ …… 63
第51図　石斧２ …… 64
第52図　石斧３ …… 65
第53図　石斧４ …… 66
第54図　石斧５ …… 67
第55図　敲石１ …… 68
第56図　敲石２ …… 69
第57図　敲石３ …… 70
第58図　敲石４ …… 71
第59図　磨石・敲石・凹石１ …… 72
第60図　磨石・敲石・凹石２ …… 73
第61図　磨石・敲石１ …… 74
第62図　磨石・敲石２ …… 75
第63図　磨石・敲石３ …… 76

挿表目次

表１　工程表 …… 4
表２　土器観察表 …… 52
表３　石器観察表 …… 77

図版目次

図版１　遺跡周辺
　　１区遠景（徳倉Ｂ遺跡より）
図版２　１号住居跡
　　１号住居跡炉残存状況
図版３　２号・３号住居跡
図版４　２号・３号住居跡完掘状況
　　２号住居跡炉検出状況
　　２号住居跡炉残存状況
　　遺物出土状況
　　３号住居跡炉残存状況
図版５　４号住居跡完掘状況
　　５号住居跡完掘状況
図版６　土層堆積状況
　　完掘状況
図版７　尖頭器・石鏃
図版８　石匕・楔形石器
図版９　石斧１
図版10　石斧２
図版11　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器
図版12　Ⅲ群土器
図版13　Ⅴ・Ⅵ群土器
図版14　Ⅷ群土器１
図版15　Ⅷ群土器２
図版16　Ⅷ群土器３・Ⅸ群土器
図版17　作業風景

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

静岡県三島市は、県東部に位置し首都圏より東海道新幹線で約１時間の距離にあり、伊豆・箱根をはじめ富士山周辺における観光地の拠点として、または古くから東西を結ぶ交通の要所として発展してきた。近年では首都圏から近いということともあいまって、通勤・企業進出という側面からも急速に発達した。したがって、人口増加と共に市内を通過する車両も増加の一途をたどっており、主要幹線道路である、国道１号線・国道136号線・県道などが市街地内で接続しているため、行楽客の車両を含む休日はもとより、平日も大変混雑し、市民活動や経済活動に深刻な影響を与えつつある。このような、交通渋滞を解消し、豊かな市民生活と円滑な経済活動をめざすため、東駿河湾環状道路の建設が計画された。この東駿河湾環状道路の路線は、沼津市岡宮、国道１号線バイパスから愛鷹山南麓、箱根山西麓を通過し、函南町平井で熱函道路に接続する総延長約15kmの道路である。

さて愛鷹山南麓、箱根山西麓は、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が集中する地域であり、この東駿河湾環状道路は、この遺跡集中地域を通り建設される予定である。そのため、平成２年に三島市教育委員会により予定路線内の遺跡確認踏査がおこなわれ、周知の遺跡を含んだ31カ所が埋蔵文化財包蔵地の可能性がある地点として報告された。当研究所ではその報告を受け、平成８年に５，６地点と呼ばれている地点の試掘調査を実施した。この結果富士黒色土中より縄文土器、礫等が出土したため、地域の小字名をとって小池遺跡とし、静岡県教育委員会にその旨を報告した。本格的調査は、試掘調査によって縄文時代の遺物包含層が確認された5,130㎡に対して平成９年４月より平成９年10月までおこなった。調査は記録保存を目的とし、調査機関として当研究所が、また指導機関とて静岡県教育委員会文化課が担当した。

第２節　調査の方法

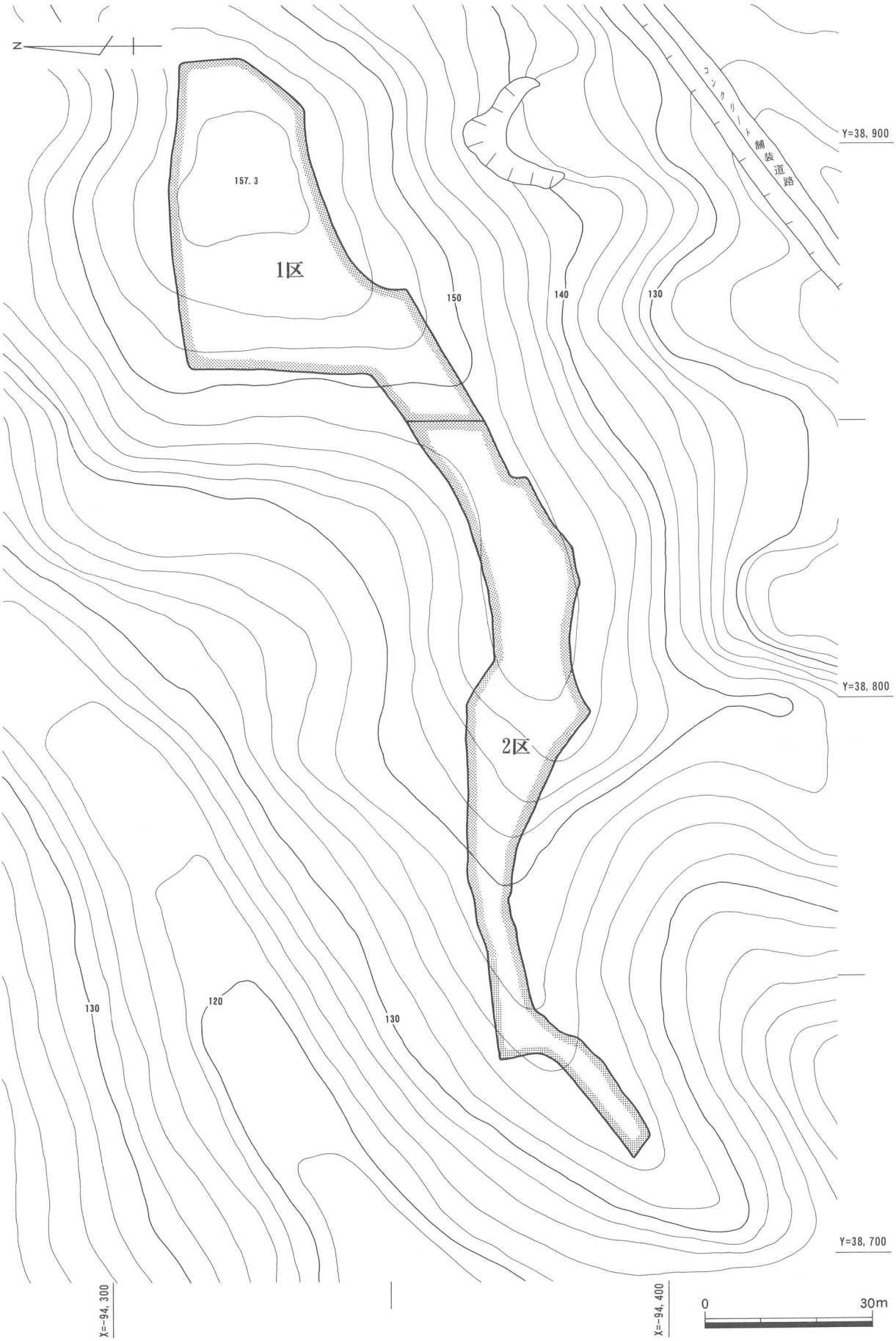
遺跡全体を把握するために、国家座標（X、Y）＝（—94450.00，38710.00）上を原点Ａ１とし、X方向にアルファベット、Y方向に数字を付し遺跡全体に10mの方眼を設定してグリッドとした（第３図）。またＡ１座標を仮に（X、Y）＝（０，０）とし、遺物の位置を示すために用いた。これらは全て地理座標に準じているため、南北方向にX軸を、東西方向にY軸をとっている。また、調査区は狭い尾根上に東西に広がっているため、地形の変換点であるＹ１６グリッドを境として仮に１区、２区と呼称した。

調査区は現状が広葉樹の森であり、試掘の結果遺物の包含層が表土下20cmに存在することが確認されていたため、遺物、遺構の残存状態が良好であると予想される山頂部、尾根頂部については人力によって樹木の根株の伐根をおこなった。また斜面地においては重機による表土除去を実施している。

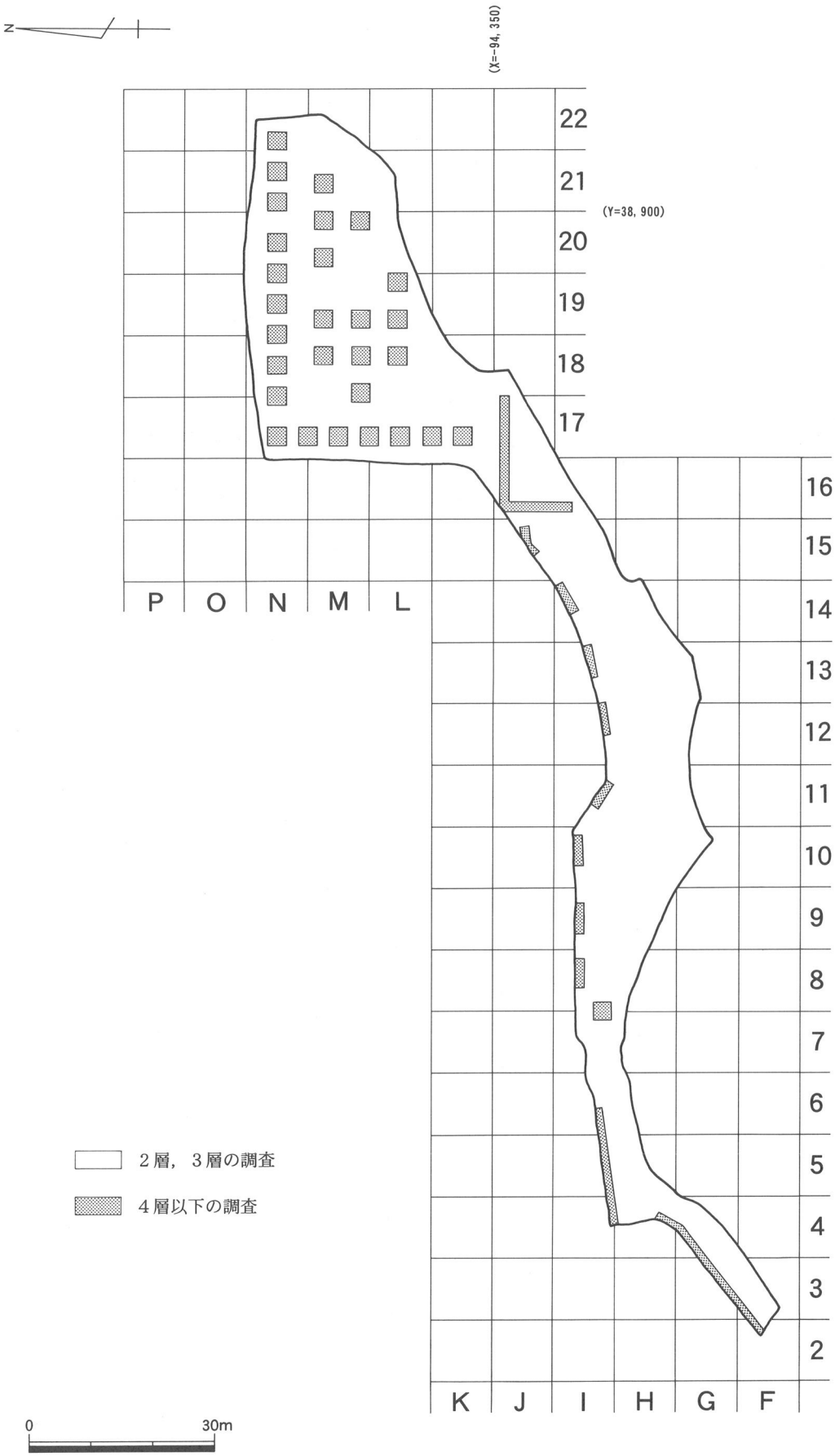
調査区全域は斜面地のため、火山灰の堆積が不明瞭である。そのため、１区においてはＬ字状の、２区では調査区に平行なトレンチを設定し、包含層・標準土層を確認したのちに精査を開始した。また４層以下では、３×３ｍのテストピットを比較的平坦な地形を選んで設定し、下層の調査をおこなった。

遺物の取り上げはトータルステーションを用い、遺物には層別に土器＝Ｐ、石器＝Ｓ、礫＝Ｒの略号と４桁の番号を付しX、Yの座標と標高（H）の記録とともにコンピューターに保管した。また遺構、セクションについては原則的に１／２０の図面によって保管している。

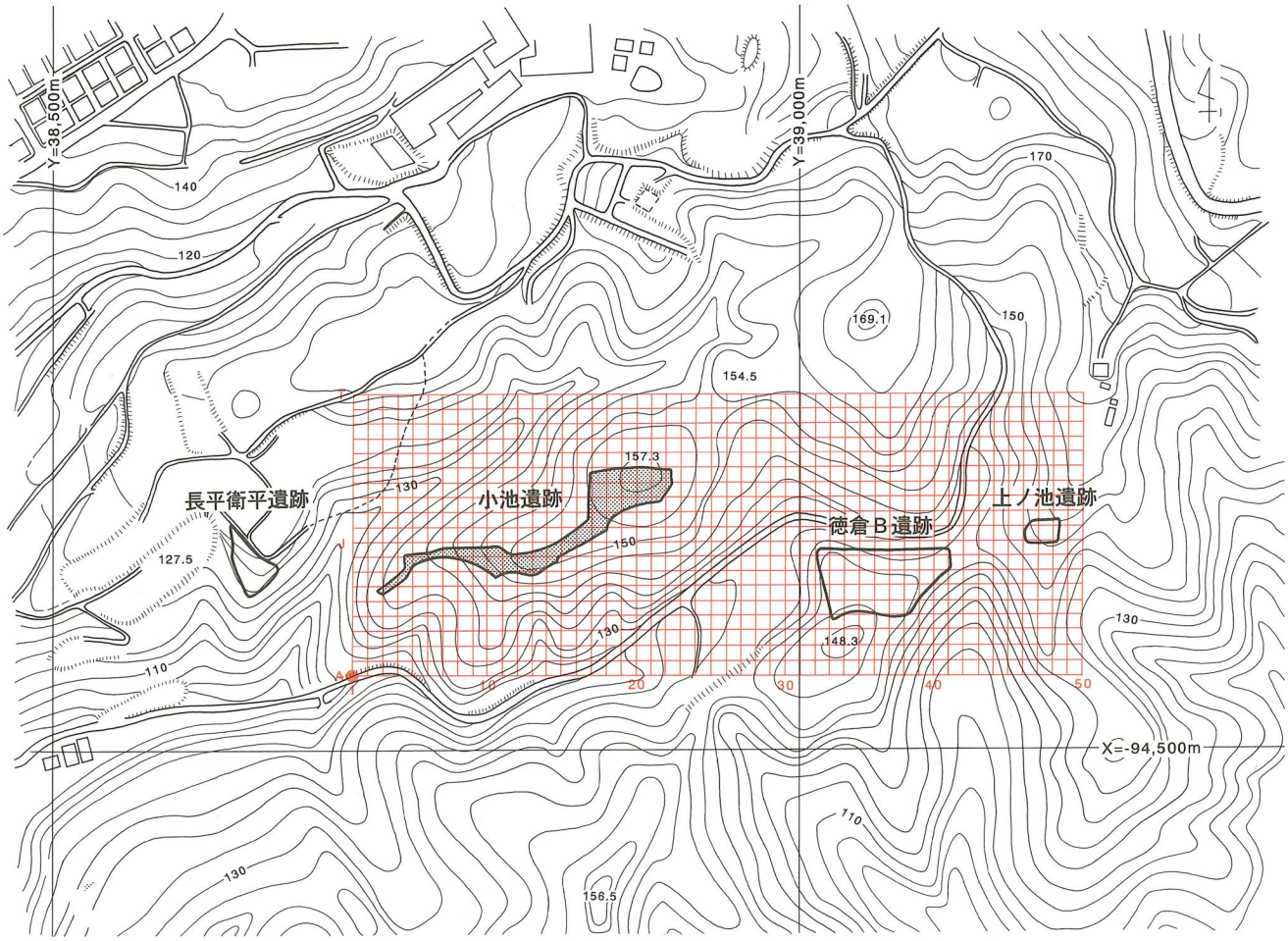
写真撮影は、中型カメラ（６×７）１台、小型カメラ（35mm）３台を使用した。



第１図　国家座標と遺跡の地形（1/1,000）



第２図　調査の範囲（1/1,000）



第３図　グリッド配置図（1/5,000）

第３節　調査の経過

試掘調査は平成８年１月に約１ヶ月間、本格的調査は平成９年４月～10月、資料整理は本格的調査に引き続き平成９年11月～平成10年３月までおこなった。

小池遺跡（５、６地点）の試掘調査は、徳倉Ｂ遺跡（７地点）、上ノ池遺跡（８地点）の確認調査とともに行われ、縄文時代の遺物、焼土等を検出したため、範囲を拡張し本調査を行うこととなった。

表１　工程表

	H9/4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H10/1月	2月	3月
現地調査	抜根		精査				深堀	撤収				
資料整理	基礎整理							報告書作成				収納

調査区の東側の丘陵地を１区、尾根沿いに西へのびる部分を２区とし、平成９年４月より表土除去を開始した。

５月に入り抜根作業も継続しながら本格的な調査を１区より開始した。縄文層を精査する一方で土層の堆積状況が不明瞭なため、調査区に約10mのトレンチを掘削し、層位を確認していった。遺物はカワゴ平パミスの直上から休場層直上にかけて集中して出土し、縄文時代早期後半の条痕文系土器から前期の諸磯ｂ式、中期の藤内式の土器を検出した。また、住居跡と焼土も確認した。

６～７月は台風等もあり天候の悪い日が多かった。１区第２層の精査が終わり、第３層の精査に入る。M19グリッドから検出された焼土を除去した下に平石及び縄文中期の勝坂式土器が敷かれており、調査したところ住居跡と判明した。ＳＢ２、ＳＢ３を完掘、精査し、７月７日に１区の全景写真を撮影した。

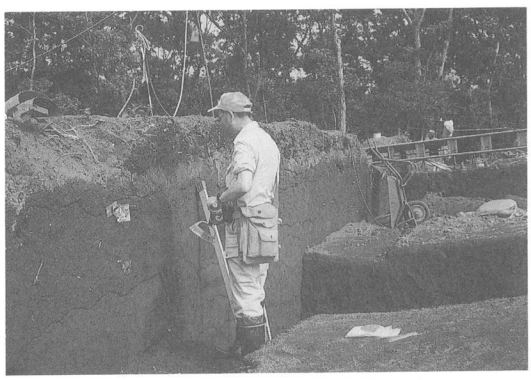
８月は１区の第３層を精査し、縄文中期を中心とする時期の土器片や黒曜石片が多数出土した。またＳＢ１には巨石を炉に伴い、４本の柱穴も検出できた。中部ローム層上面まで達する試掘坑を１基掘削し、火山灰学的見地から各層の年代や堆積の特徴を検討、８月12日に都留文科大学の上杉陽教授によるテフラの肉眼同定を行った。つづいて１－２区の境界にトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認した。２区の第２層の精査を開始する。

９月は１区第３層の精査により、遺物が多数出土し中期井戸尻式の顔面把手や、縄文時代草創期の尖頭器も発見された。また、ＳＢ５が検出され調査された。２区は第２層の精査をし、石器、土器片が出土した。第３層の精査にも着手し、その堆積状況を確認するため、調査区北端部にトレンチを断続的に８ヶ所設定し掘削したが、２区高所の平坦部分には包含層が堆積しておらず、西方の斜面には遺物が少ないことが判明した。

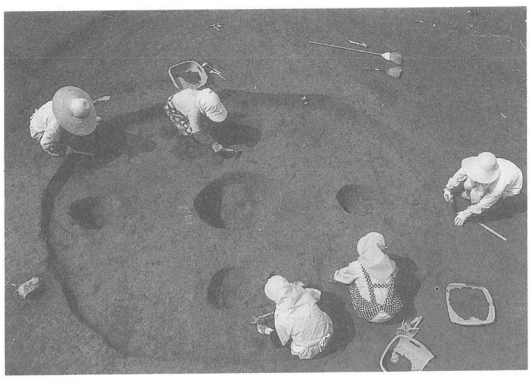
10月に入り、旧石器時代の調査のためにテストピットを設け掘削したが、検出される遺物や遺構はほとんど無かった。当初本遺跡は１年間の調査期間であったが、遺物、遺構の検出が予想以上に少なく、10月末日をもって調査を終了した。11月12日までに全ての撤収作業を終了した。

試掘作業

表土除去作業



上杉　陽教授による現地指導



住居跡検出作業

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　地理的環境

小池遺跡は箱根山西麓に放射状に広がっている尾根群の一つに位置している。遺跡の範囲が尾根の先端部分から西側の斜面にかけて広がっているため、20m近い高低差があり、高い地点では海抜155mを越える。調査の結果、遺跡の立地する尾根は中部ロームが開析を受けた後に休場層・富士黒土層・栗色土層といった火山灰による層が堆積する事により形成されたことが分かっている。この地形は縄文時代の時点でほぼ完成されており、現在に至るまでそれほど変化はしていない。小池遺跡は縄文時代の遺跡であり、上部に堆積した層の中から遺物や遺構が検出されている。当時の小池遺跡において生活を営んでいた人々は、今我々が見ることのできるものと同じ地形を活用し、同じ景色を眺めていたと思われる。

縄文時代の人達の生活の舞台となった箱根山西麓の形成は今より約40万年前から約3千年前までの間続いていた箱根火山の活動に拠るところが大きい。箱根山は新旧2つの外輪山と中央火口丘群から成る三重式火山と呼ばれるもので、それらを生み出した火山活動の中でも、箱根西麓が造られる際の最大の要因となったのは、新期外輪山が形作られた時の火山活動に伴う、新期箱根軽石流と呼ばれるものである。この活動は約13万年前より開始され、約７～５万年前の間には3度に及ぶ大規模な軽石流の噴出があり、その結果として箱根山の西側に緩やかな斜面地が形成された。その後、中央火口丘群や古富士火山後期、新富士火山の活動などによる火山灰が堆積し、それを境川・沢地川・山田川・来光川・冷川といった狩野川の支流にあたる河川が侵食していった結果、現在見られるような入り組んだ地形が形成された。

第２節　歴史的環境

箱根西麓において人類が残した最古の痕跡としてはおよそ3万年前、後期旧石器時代のものが確認されている。旧石器時代の箱根西麓は磐田原台地西縁、愛鷹山東南麓と並び静岡県下で当時の遺跡が集中している代表的な地域でもある。

今回調査の実施された小池遺跡は旧石器時代よりも新しく、縄文時代早期及び中期に属する遺物が多い遺跡である。ちょうどこの頃に当たる箱根西麓の遺跡の数は草創期と比べて飛躍的に増加しており、当時の箱根西麓の環境は縄文時代人の生活様式に適していたのか、ほとんどの尾根上に遺跡が存在しているといえるほどである。箱根西麓には約300を超える数の縄文時代の遺跡があるが、その内のほとんどが早期または中期に関わる遺跡である。また、それらのほとんどが散布地とされている。中には住居跡などの遺構が検出されている遺跡もあり、代表的な遺跡としては乾草峠遺跡や千枚原遺跡などの集落遺跡を挙げることができる。両遺跡とも小池遺跡とはそれほど離れていない位置にある。乾草峠遺跡は早期後半の遺跡であり、14基の住居跡、土坑等が見つかっている。出土している土器は早期隆帯文土器を主体とする一群と東海系と呼ばれている貝殻腹縁文や沈線文を有する土器の一群とに分けられている。

千枚原遺跡は箱根西麓でも最大級の遺跡とされ、古くから知られている遺跡である。早・前期の土器も出土しているが、中期前半から後期前半に相当する土器が主体をなしている。同遺跡からは８基の住居跡と２基の敷石住居跡とが検出されており、その内時期の明確なものは中期後半のものとされている。これら二つの遺跡のほか、反畑、徳倉片平山Ｂ、樋道、笹原後Ｆ、北山、柳沢Ｂ、柳沢Ｄ、大洞、上黒岩遺跡などからも早期から中期にかけての住居跡が発見されている。

△ 縄文時代早期　▲ 縄文時代中期　● 東駿河湾環状道路関係遺跡　(1/50,000)

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	小池	早・中期	8	下原	早期	15	樋道	早・中期
2	長平衛平	早・中期	9	押出シ	中期	16	笹原後Ｆ	早・中期
3	徳倉Ｂ	早・中期	10	桧林Ａ	早期	17	北山	中期
4	上ノ池	早期	11	反畑	中期	18	柳沢Ｂ	早・中期
5	八田原	早・中期	12	千枚原	中期	19	柳沢Ｄ	中期
6	加茂ノ洞Ｂ	早期	13	乾草峠	早期	20	大洞	中期
7	焼場	早・中期	14	徳倉片平山Ｂ	早・中期	21	上黒岩	早・中期

第４図　周辺の縄文時代の遺跡

第３節　土層堆積状況

遺跡は両側を浅い谷に挟まれた痩尾根上に位置しているため、土層の堆積状況は必ずしも良いとはいえない。第5図に模式図を示したが、これは比較的安定していたM18グリッド付近の土層堆積状況である。第６図には調査区全域に設定したトレンチ調査の結果を記載しているが、１区頂部においては下部ローム層上に上部ローム層が、２区では中部ローム層上に休場層、あるいは富士黒土層が堆積しているのが確認できる。後期旧石器時代の初め（約３万年前）と終わり頃に大きく開析を受けた結果であろう。また１区尾根の頂部では黒色帯の発達（発色）が悪く、特に富士黒土層においては、色調だけでは休場層と区別が難しい場所も存在する。以下に遺物・遺構の検出があった１～６層に関して詳述する。

なお、第５図のテフラ番号、あるいは火山性噴出物に関する記載は、都留文科大学教授、上杉　陽氏の肉眼レベルでの現地指導の結果をもとに、調査担当者が作成した。

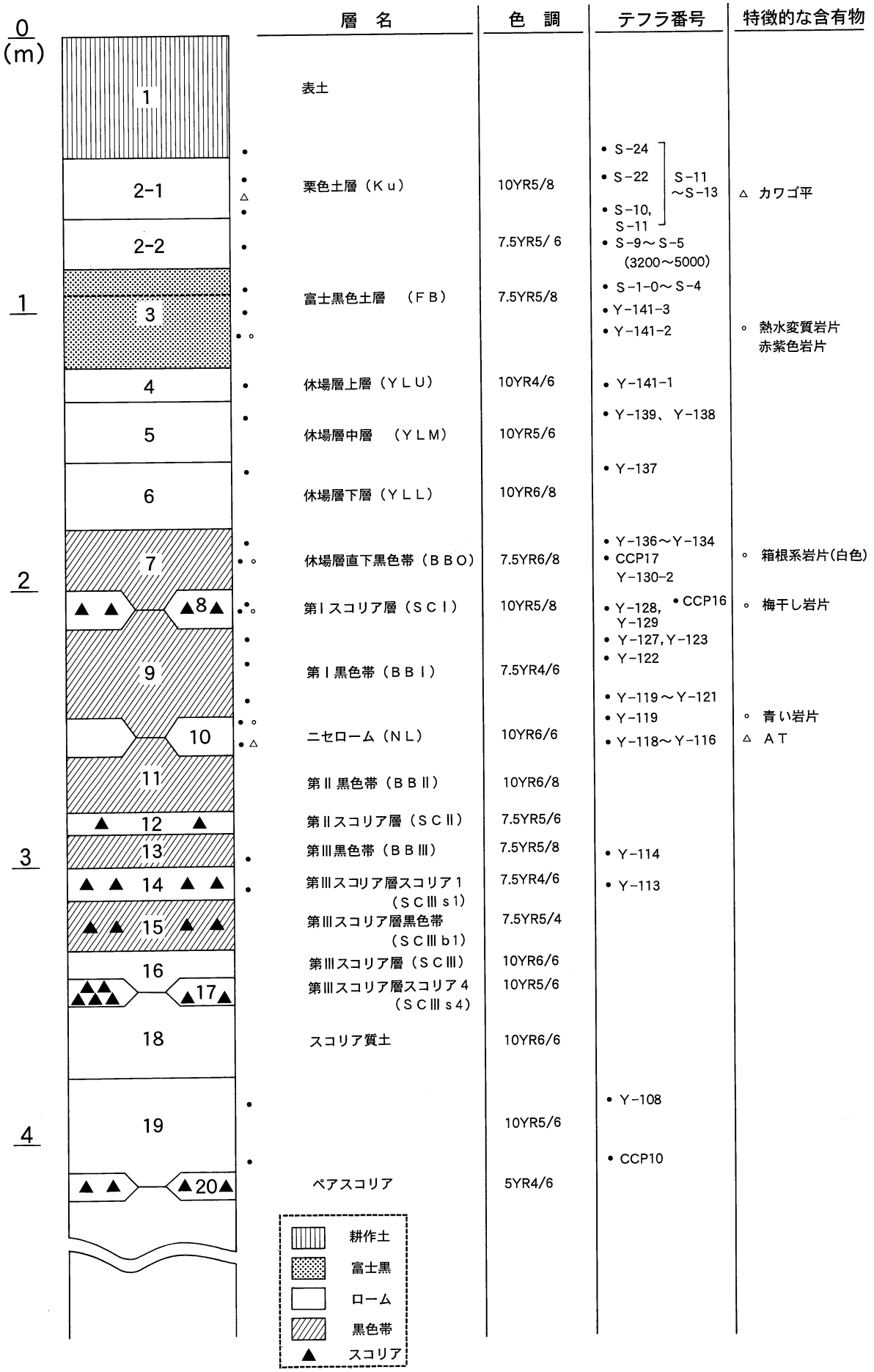
１層　　表土（腐植土）

２層　　栗色土層　　白色パミスを含む黄褐色土。粘性なし。
白色パミスが集中する部分にカワゴ平軽石が観察できる。谷部では、仙石スコリアに類似する黒色スコリアが観察され、これを多く含む層を２―２層として部分的に分層している。堆積は不安定で、３層と視覚的に分層できない部分もある。

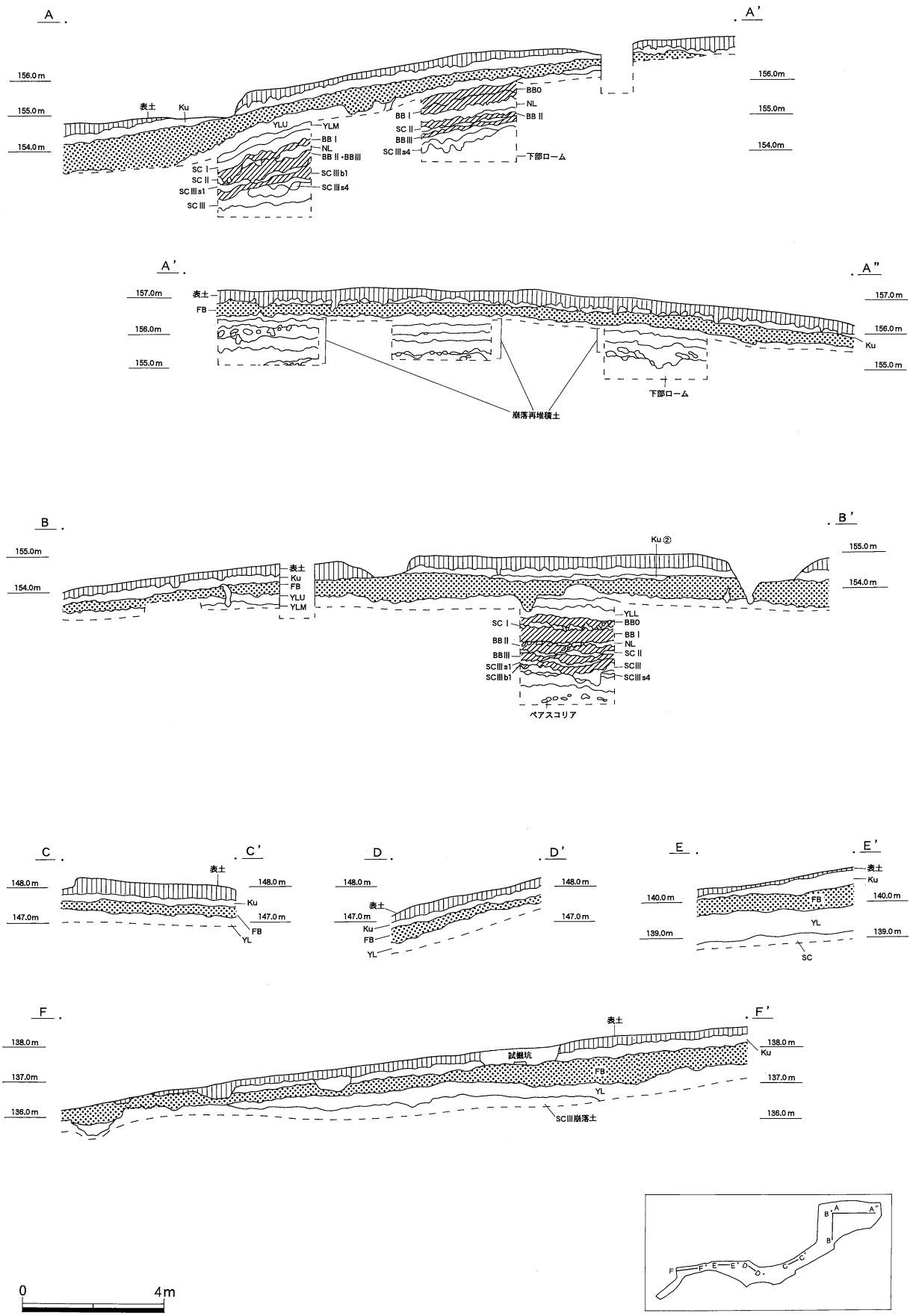
３層　　富士黒色土層　直径２～４㎜の赤色スコリアを含む、明褐色土。
通常箱根西麓では、富士黒色土をスコリアと色調によって２層に分層していたが、当遺跡では肉眼での分層は不可能であった。しかし、３層上部は２層と類似し粘性がほとんどないのに比べ、下部になるに従って粘性が増し、しまってくるのが特徴である。上杉氏の指導ではこの粘性の違いが層の境となり、これより上層が新富士火山を起源としたもので、下層が古富士火山起源の黒土帯である可能性が指摘された。

４～６層　休場層　　直径２～４㎜の赤色スコリアを含む、褐色～明黄褐色のローム質土。
層間に入る赤色スコリア層で３層に分層し、それぞれ上層、中層、下層と呼んでいたが、当遺跡ではその赤色スコリア層が観察されず、層全体に散っている様子が看取された。よってここでは赤色スコリアをほとんど含まない上層、全体的に散っている中層、直径３～５㎜のスコリアを多く含み色調がやや暗くなる下層、と分層した。

上杉氏より指導を受けた層位は、以下20層まで続くが、遺物の検出が見られなかったため、ここでは省略し、テフラ番号や含有物については第5図を参照されたい。また今回の現地指導によって、これまでこの地域で遺物の出土層位を表すために使用されてきた名称（ＹＬ、ＢＢ０等）が遺跡間で認識の食い違いが生じている可能性があること、新富士火山、古富士火山黒土層が混同されている可能性があることなどが指摘された。この点は現在各遺跡間で調整中であり、調査員個々の認識の違いを埋めるため、火山灰同定の必要性を再認識した。


0
(m)
1
2
3
4
1
2-1
2-2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
層　名
色　調
テフラ番号
特徴的な含有物
表土
栗色土層（Ｋｕ）
10YR5/8
S-24
S-22
S-10, S-11
S-11 ～S-13
△ カワゴ平
7.5YR5/ 6
S-9～S-5 (3200～5000)
富士黒色土層　（ＦＢ）
7.5YR5/8
S-1-0～S-4
Y-141-3
Y-141-2
○ 熱水変質岩片
赤紫色岩片
休場層上層（ＹＬＵ）
10YR4/6
Y-141-1
休場層中層　（ＹＬＭ）
10YR5/6
Y-139、Y-138
休場層下層（ＹＬＬ）
10YR6/8
Y-137
休場層直下黒色帯（ＢＢＯ）
7.5YR6/8
Y-136～Y-134
CCP17
Y-130-2
○ 箱根系岩片(白色)
第Ｉスコリア層（ＳＣＩ）
10YR5/8
Y-128, Y-129
CCP16
○ 梅干し岩片
第Ｉ黒色帯（ＢＢＩ）
7.5YR4/6
Y-127, Y-123
Y-122
Y-119～Y-121
ニセローム（ＮＬ）
10YR6/6
Y-119
○ 青い岩片
Y-118～Y-116
△ ＡＴ
第Ⅱ黒色帯（ＢＢⅡ）
10YR6/8
第Ⅱスコリア層（ＳＣⅡ）
7.5YR5/6
第Ⅲ黒色帯（ＢＢⅢ）
7.5YR5/8
Y-114
第Ⅲスコリア層スコリア１（ＳＣⅢｓ1）
7.5YR4/6
Y-113
第Ⅲスコリア層黒色帯（ＳＣⅢｂ1）
7.5YR5/4
第Ⅲスコリア層（ＳＣⅢ）
10YR6/6
第Ⅲスコリア層スコリア４（ＳＣⅢｓ4）
10YR5/6
スコリア質土
10YR6/6
Y-108
10YR5/6
CCP10
ペアスコリア
5YR4/6
耕作土
富士黒
ローム
黒色帯
スコリア

第５図　土層柱状図



第６図　土層堆積状況（1/160）

第Ⅲ章　縄文時代の遺構と遺物

第1節　遺　構

住居跡が５軒（SB 1～SB 5)、性格不明のピットが14基検出された。いずれも２層の３層への落ち込みとして確認されたが、表土下十数センチのため樹木の根の入り込みが著しく、残存状況は良くない。

１号住居跡

＜床・壁＞住居跡の平面形は、わずかな炭化物の広がりをもって確定している。よってこの炭化物を含んだ層が床であった可能性が高いが、硬質面は確認されなかった。柱穴はニセロームに掘り込んだ形で明確に検出された。長軸3.4m、短軸3.28m。

＜炉跡＞わずかに焼土が混入した円形の落ち込みを炉と認識している。炉石と考えられる熱で赤化した礫を検出したが燃焼面はなかった。礫のみ他の住居跡からの持ち込みの可能性がある。

＜遺物＞藤内式の浅鉢、石鏃２点が出土している。また炉からは231の土器の一部が出土している。

２号住居跡

＜床・壁＞壁は東側がSB 2と切り合っていたためか、平面形は検出できず、東側の立ち上がりは土層によってのみ確認している（第10図点線部分)。また明らかに硬質な床面も確認できず、炉の周辺に炭化物が若干面的に広がる層を確認したのみである。北側の壁には50cmほどの礫が３点検出された。長軸4.5m、短軸3.54m。

＜炉跡＞炉はSB 3の炉と重なるように検出され、拳大の礫が半円形に並べられていた。礫は全て熱により赤化している。また燃焼面を示すような硬化した焼土は認められないが、焼土混じりの覆土が存在し、この焼土の下には231の土器と平坦な礫が炉の底を覆うように出土した。

＜遺物＞231が炉中より良好な形で出土している。この土器はSB １の炉とSB ５の覆土より各１片ずつ出土しているが、そのほとんどはSB ２で出土している。

３号住居跡

＜床・壁＞壁面は2号住居跡に壊されており、その規模は不明。床面も検出されていない。

＜炉跡＞SB ２の炉に一部壊されている。炉石と思われる赤化した礫が検出されたが、炉の内側に倒れ込んでいることから、原位置は保たれていないと考えられる。燃焼面有り。

＜遺物＞新道式の224，225，226が出土している。

４号住居跡

＜床・壁＞残存状況が悪く、壁溝によってプランを確定した。よって床面も確認していない。長軸3.7m、短軸推定2.66m。

＜炉跡＞焼土混じりの覆土を検出しているが、ブロック状に焼土が混在しており上層からの攪乱をかなり受けていると考えられる。

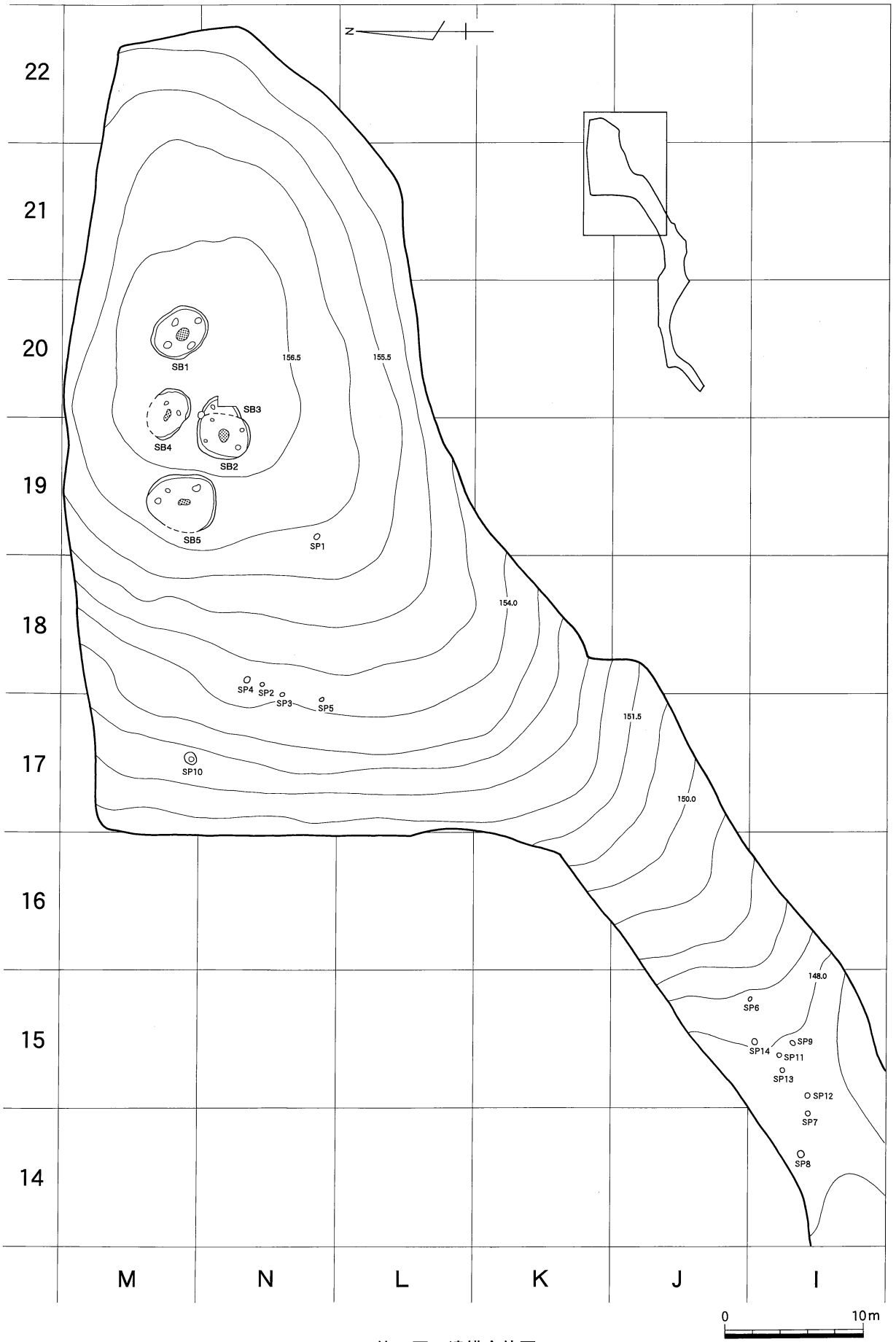
＜遺物＞出土していない。

５号住居跡

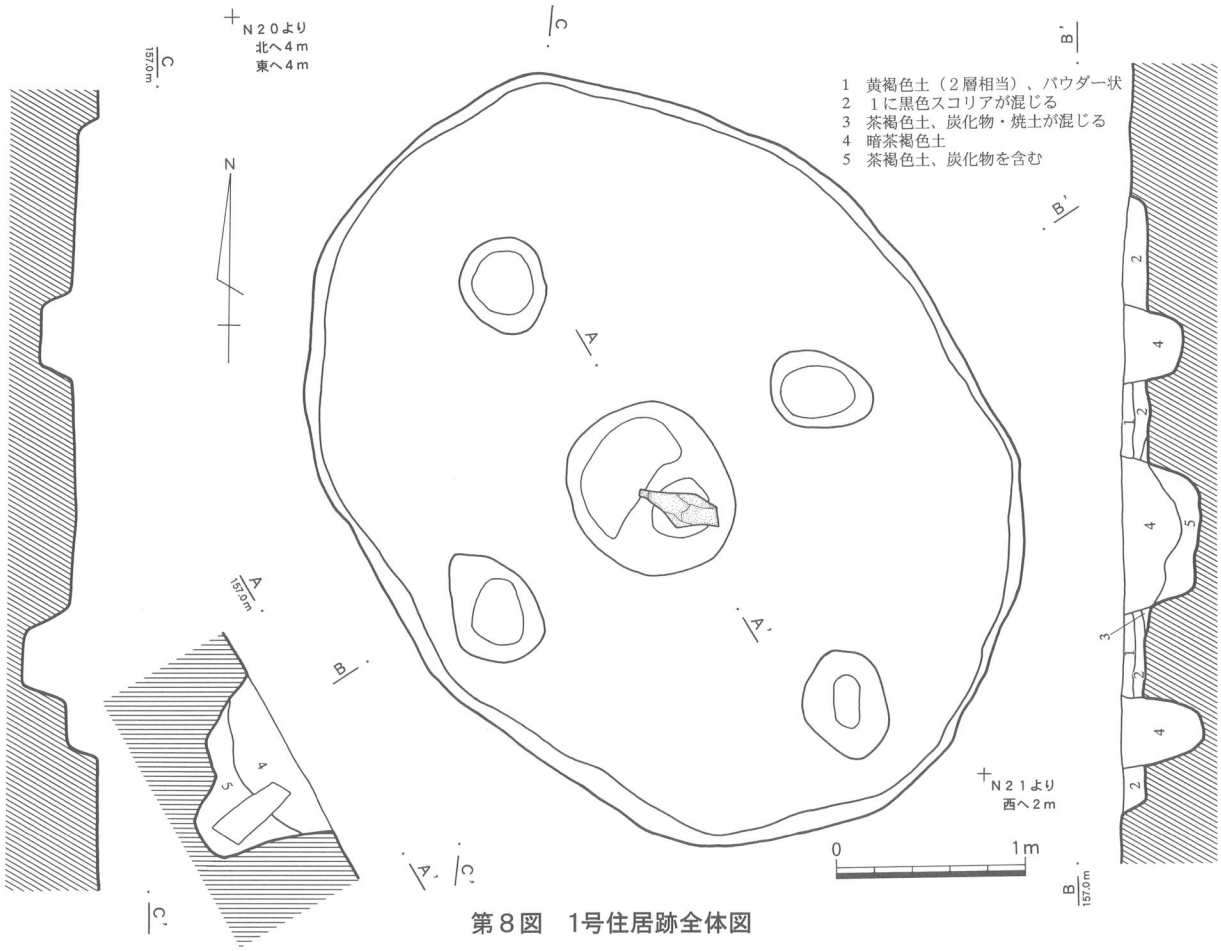
＜床・壁＞床は確認していない。壁は西側の壁が谷への落ち際のためか検出できなかった。柱穴も不明瞭である。長軸4.46m、短軸3.4m。

＜炉跡＞不定形ではあるが、下底部に燃焼面が確認できたため炉跡と認識した。覆土には焼土が混入する。炉石は抜かれたものと考えられる。

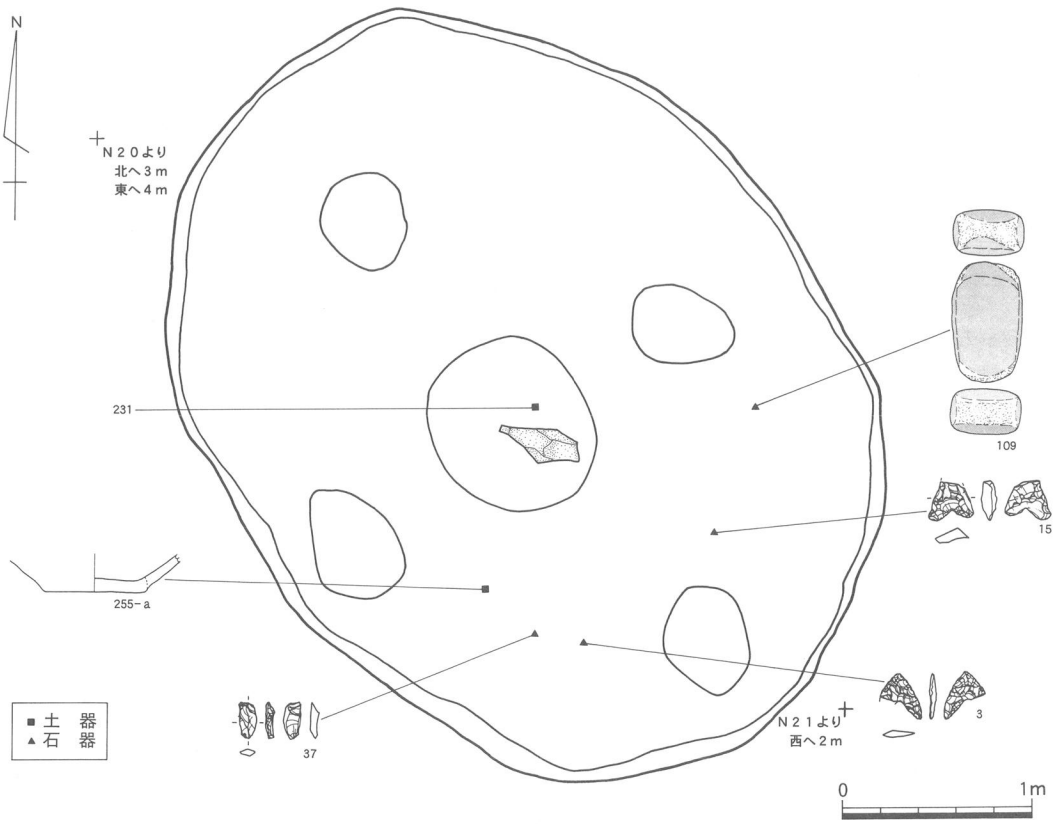
＜遺物＞覆土中より比較的大量の遺物が出土している。またこれらはSB １やSB ２出土の土器と同一個


22
21
20
19
18
17
16
15
14
M
N
L
K
J
I
N
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
SP7
SP8
SP9
SP10
SP11
SP12
SP13
SP14
156.5
155.5
154.0
151.5
150.0
148.0
0
10m

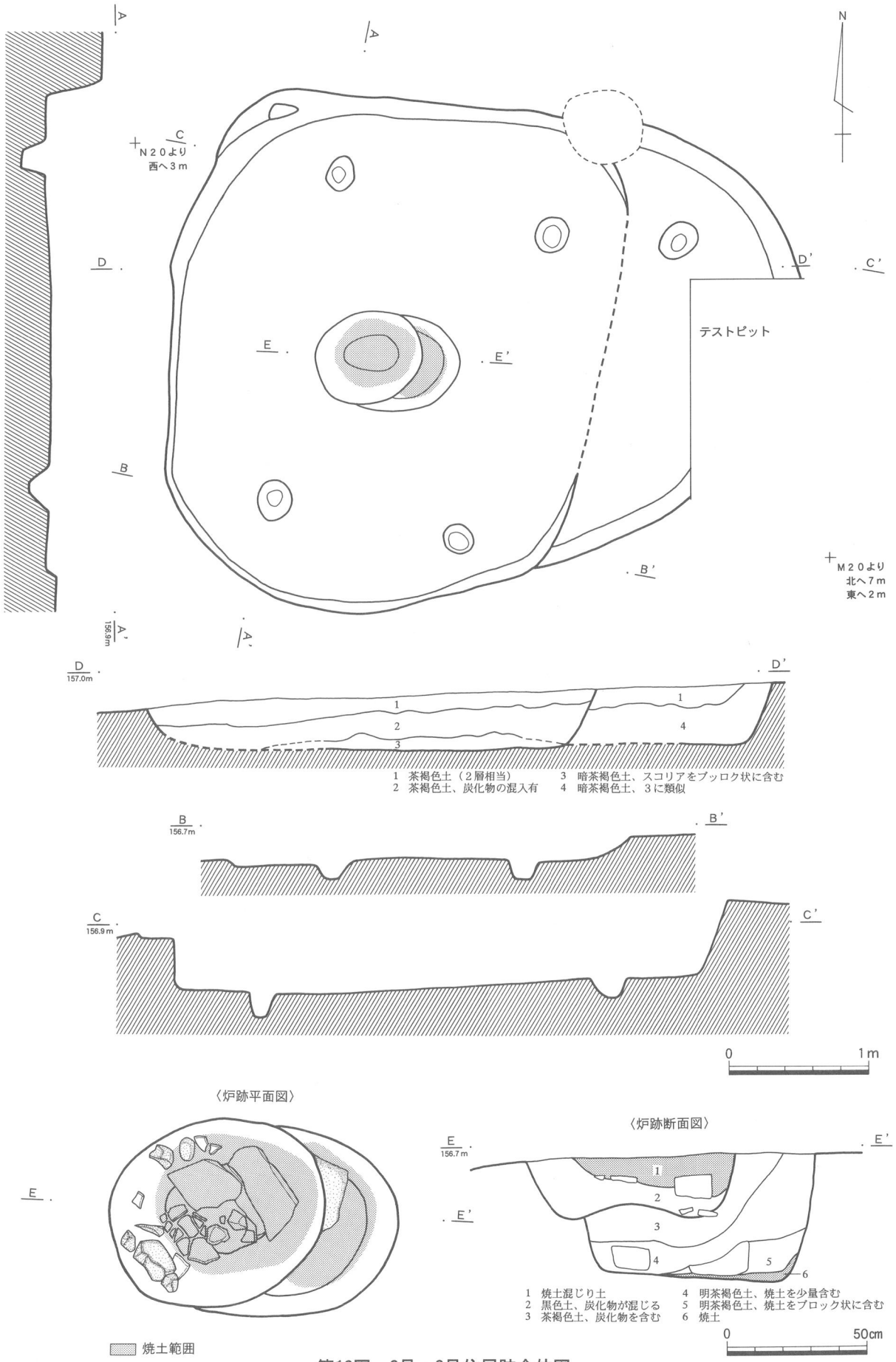
第７図　遺構全体図



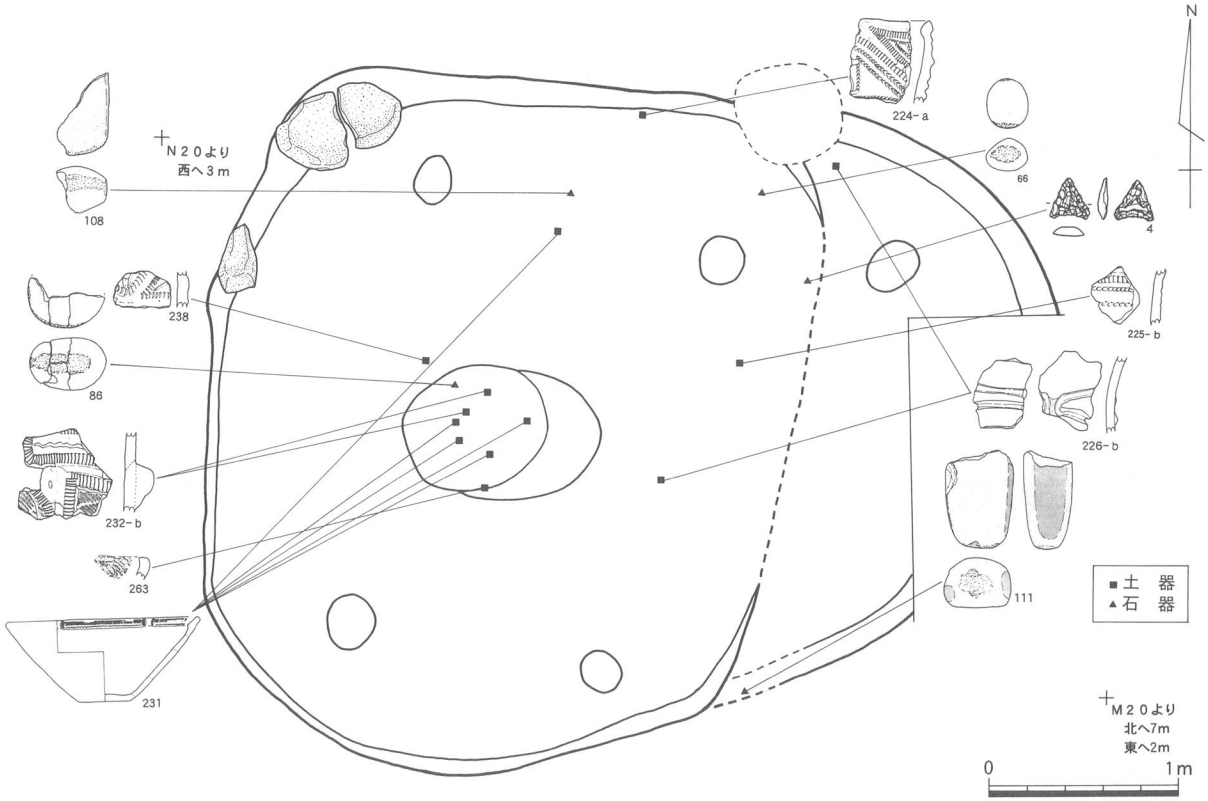
第8図　1号住居跡全体図



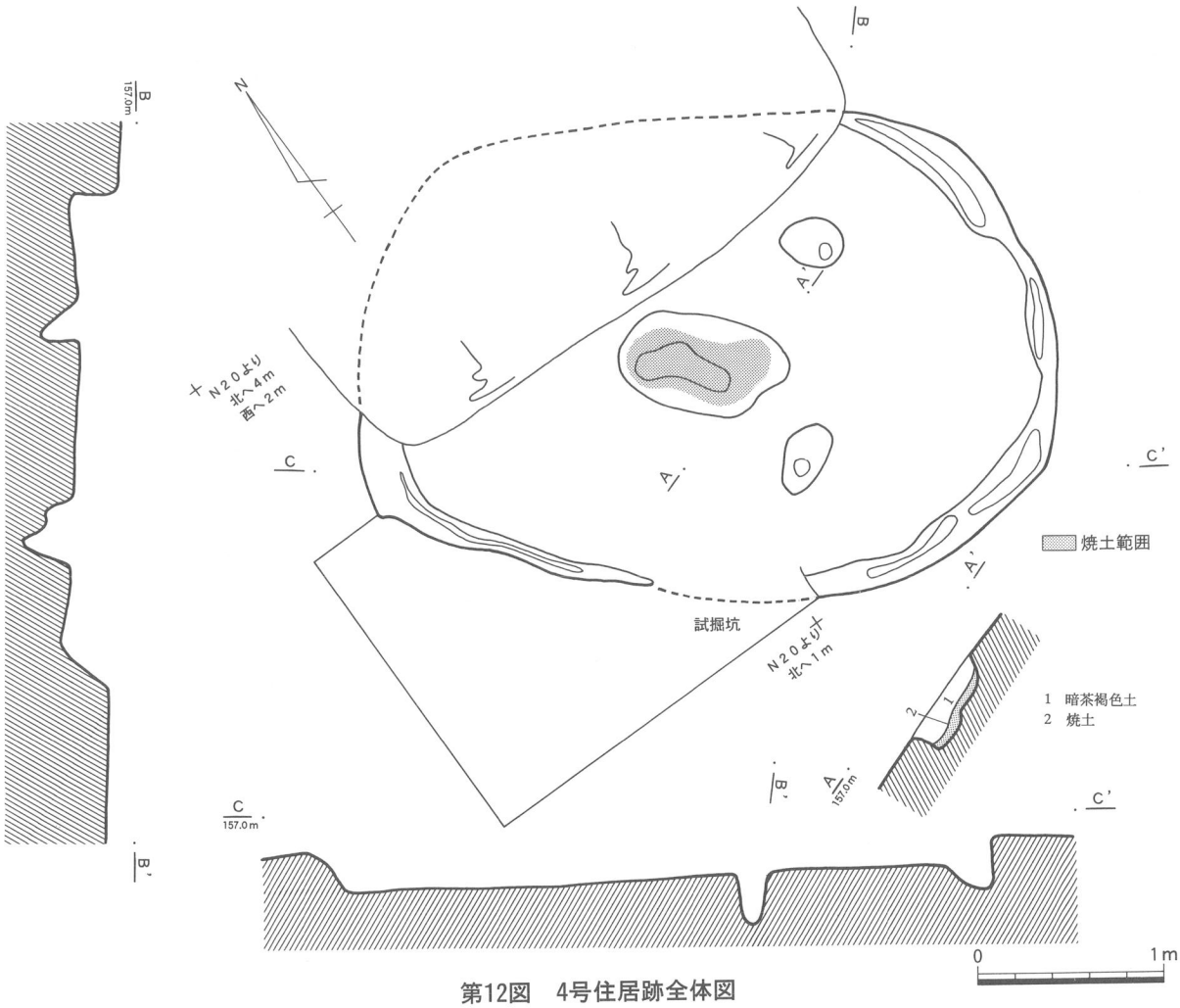
第9図　1号住居跡遺物出土状況図



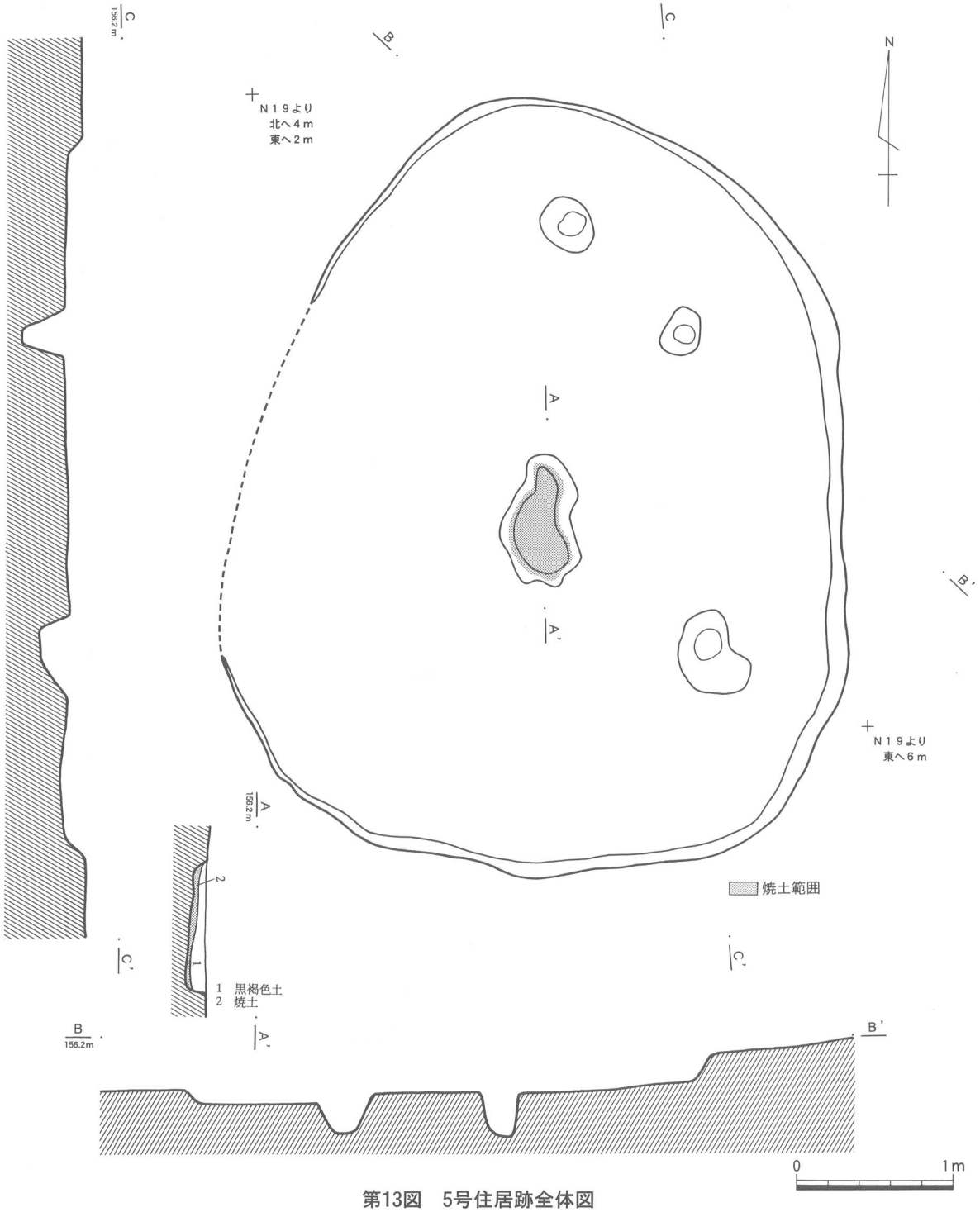
第10図　2号・3号住居跡全体図



第11図　2号・3号住居跡遺物出土状況図



第12図　4号住居跡全体図

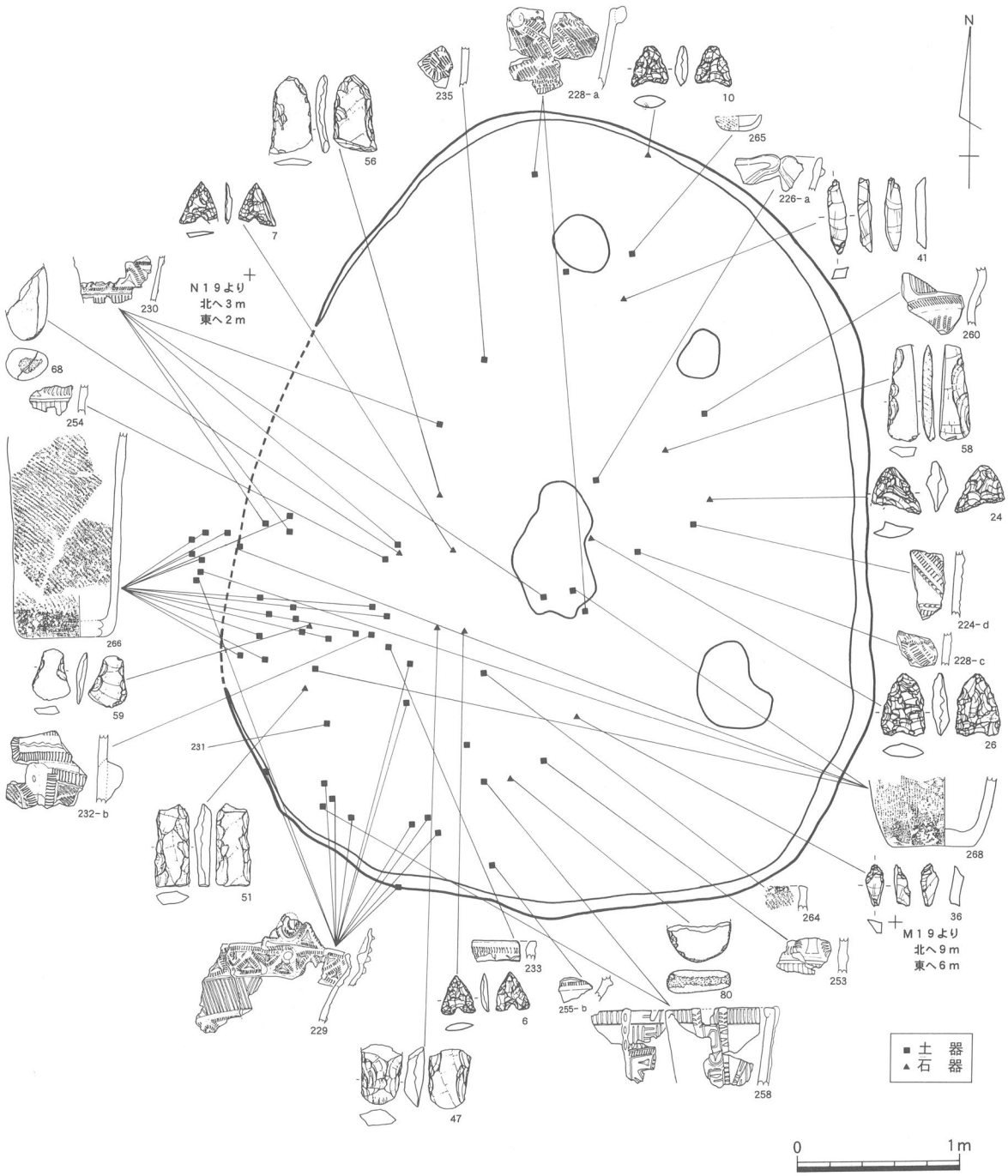


第13図　5号住居跡全体図

体であるものが多い。

5軒の住居跡は、いずれも堆積状況が不安定なため床やプランの検出が困難であった。住居跡の帰属時期だが、出土遺物よりSB 3は縄文時代中期前半新道新段階、SB 1,2,5は藤内期に存在していたものと考えられる。SB 1，2，5は同一個体の土器が出土しており、一見同時に存在していたように思われる。しかしSB 5の遺物は覆土中より出土するものが多く、比較的1ヶ所に集中していること、炉跡からは炉石が抜き取られ、燃焼面はのこるものの炉穴の形状が大きく乱れていることから、SB 1あるいはSB 2の使用時における廃棄場所であったと考えられる。

SB 4は1軒のみが壁溝を持っていることから、他の住居跡とは時期を違える可能性があるが、覆土が

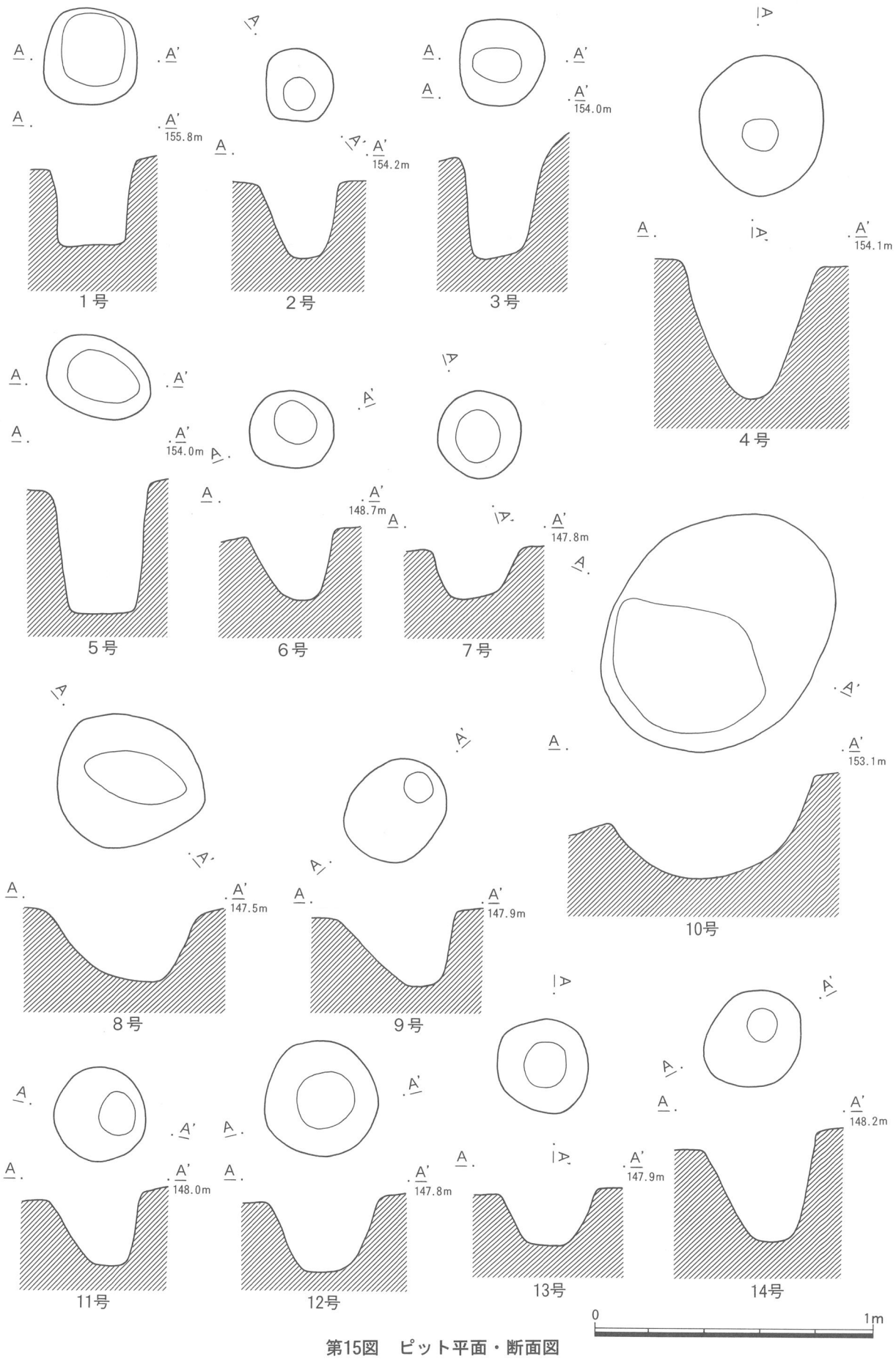


第14図　5号住居跡遺物出土状況図

ほとんどなく、遺物も出土していないことから、帰属する時期は不明である。

ピット

14基が検出された。特にI15グリッドでは前期の土器が集中して出土していたためサブトレンチを設定して慎重に精査したが、他の遺構は検出されなかった。これらのピットは時期、性格とも不明。



第15図　ピット平面・断面図

第2節　遺　　物

1土　器

縄文時代の土器は、富士黒土層を中心に約1900点が出土した。このうち636点、274個体を図化し、時期ごとに報告する。分類は以下のとおり。

縄文時代早期　Ⅰ群：押型文系、Ⅱ群：撚糸文系、Ⅲ群：条痕文系、Ⅳ群：Ⅰ群～Ⅲ群に平行する無文の土器と底部

縄文時代前期　Ⅴ群：黒浜式　Ⅵ群：諸磯式　Ⅶ群：十三菩提式

縄文時代中期　Ⅷ群　勝坂式期の土器

縄文時代晩期　Ⅸ群　安行Ⅲａ式

（1）縄文時代早期の土器

Ⅰ群　押型文系土器（1～9）

早期前半の押型文系の土器群である。Ｍ21グリッドとＮ19グリッドに比較的集中して出土する。1は山形文を横方向に帯状施文するものであり、胎土に繊維を含み色調は赤みを帯びる。2～8は同じく山形文であるが、胎土は砂質で繊維を含まず浅黄橙色で、胴部に縦方向の施文をした後、口縁部に横方向に施文するもので、口縁部裏面にも横方向に施文する。これらは同一個体の可能性があるがいずれも小破片であり、接合関係もない。9は菱形に近い粗大な楕円の押型文で、縦位の密接施文である。高山寺式と考えられる。厚手で胎土は29の撚糸文土器と類似し、繊維と白色岩片を含む。また裏面には擦痕が観察される。

Ⅱ群　撚糸文系土器（10～29）

早期前半の撚糸文系の土器群である。1区全域、特に北側に広がる。10～28はいずれも脆く、原体の撚りは観察しにくい。10はＲの撚糸文を口縁部裏面にも施文する。12、13は走行が不規則で撚りも不明である。19～28は網目状の撚糸文であり、胎土は脆弱で繊維を含む。29は厚手で胎土には3㎜ほどの白色岩片を多量に含み、通常のＲの撚糸原体を縦方向に転がした後、方向を約45度変えて転がすことで、網目状の撚糸文を作る。早期前半の終わり頃のものと考えている。これらは全て同一個体として考えているが、分布は1区全域にわたっており、Ⅲ群土器と同じような分布を示す。

Ⅲ群　条痕文系土器（30～164）

早期後半の貝殻条痕文系の土器群である。全体を、ａ類：絡状体圧痕文を有するもの、ｂ類：野島式と考えられるもの、ｃ類：刺突文、ｄ類：条痕文のみのものに分類が可能である。いずれも胎土に繊維を含む。出土状況は、ａ類は1区全域に広がる。ｂ類はＬ18グリッドに集中するが、そのほとんどが127と128であり、実際は1区全域に分布している。

＜ａ類＞（30～108）

絡状体圧痕文のみのもの（30～92）、絡状体圧痕文＋細隆線（93～105）、絡状体圧痕文＋細隆線＋沈線（106～108）に分けて掲載した。30は絡状体の原体を縦方向に引きずって無文帯を挟んだ模様帯を形成し、その上に同一原体で圧痕文を数列施したもので、口唇部は角張り外側を向いている。。31は口唇部を強いナデによって整え、その上に絡状体圧痕文を斜位に施す。口縁部から比較的密接に施文するのが特徴である。胎土は繊維を少量含むが、硬質な感じを受ける。46は口縁部から胴部上半にかけて絡状体圧

痕文を施すもので、下半部は無文となる。器表面には黒色のスス状のものが付着する。93～104は貼り付けた細隆線を絡状体で潰すように施文するもので、口縁部付近に１条の細隆線を配し、その細隆線上と下に絡状体圧痕文を施す。口唇部は強くナデられ角張っており、刻みがあるもの（93、94、98）もある。口唇部の形状は30、31などと類似する。93と94は口縁部下に貼り付けた細隆線上を絡状体で押さえ、その下に菱形を描くように絡状体圧痕文を配するもので、文様形態は双方非常によく似ている。また胴部下半部は無文帯となる。97は口縁部に張り付けによる細隆線の区画を持ち、この下部に絡状体圧痕文を施す。器形は口縁付近がやや外反する。104は2本の細隆線の間に絡状体圧痕文を施すもので、口唇部に刻みがある。105は断面三角形の細隆線を挟んで上下に絡状体圧痕文を施す。106はゆるやかな波状口縁を呈し、細隆線下の沈線は絡状体を引きずった跡のようにも見える。撚りは不明。107は口縁部に格子目状の沈線を、その下には細隆線を貼り、細隆線上と下には絡状体圧痕文を施文したものである。

＜ｂ類＞（109～130）

野島式土器と思われるものを一括した。小破片が多いため、施文方法が隆線のみによるもの（109、110）、沈線のみのもの（111～128）、隆線＋沈線のもの（129、130）に分けて載せている。117は弱い屈曲部を有する。128は縦方向の集合沈線を指によって磨り消し、矢羽状の模様を描いたもので、沈線は櫛歯状の工具によって書かれており、127と類似し分布も重なる。129は横方向の隆線を中心に矢羽状の沈線を配する。

＜ｃ類＞（131・132）

早期後半に属すると考えられる刺突文を一括した。131は２ヶ１組の刺突を口唇部に平行に配しているもので現状では３列確認でき、半截竹管を施文具に用いているものと考えられる。口唇部に刻目有り。132は胴部上半部に貝殻の腹縁部による横方向の刺突を、斜め方向に施文するもので、下半部は無文帯となる。また表面、裏面とも条痕による調整があり、胴部は丸みを帯びる。胎土は繊維を少量含み、赤味を帯びる。打越式平行か。

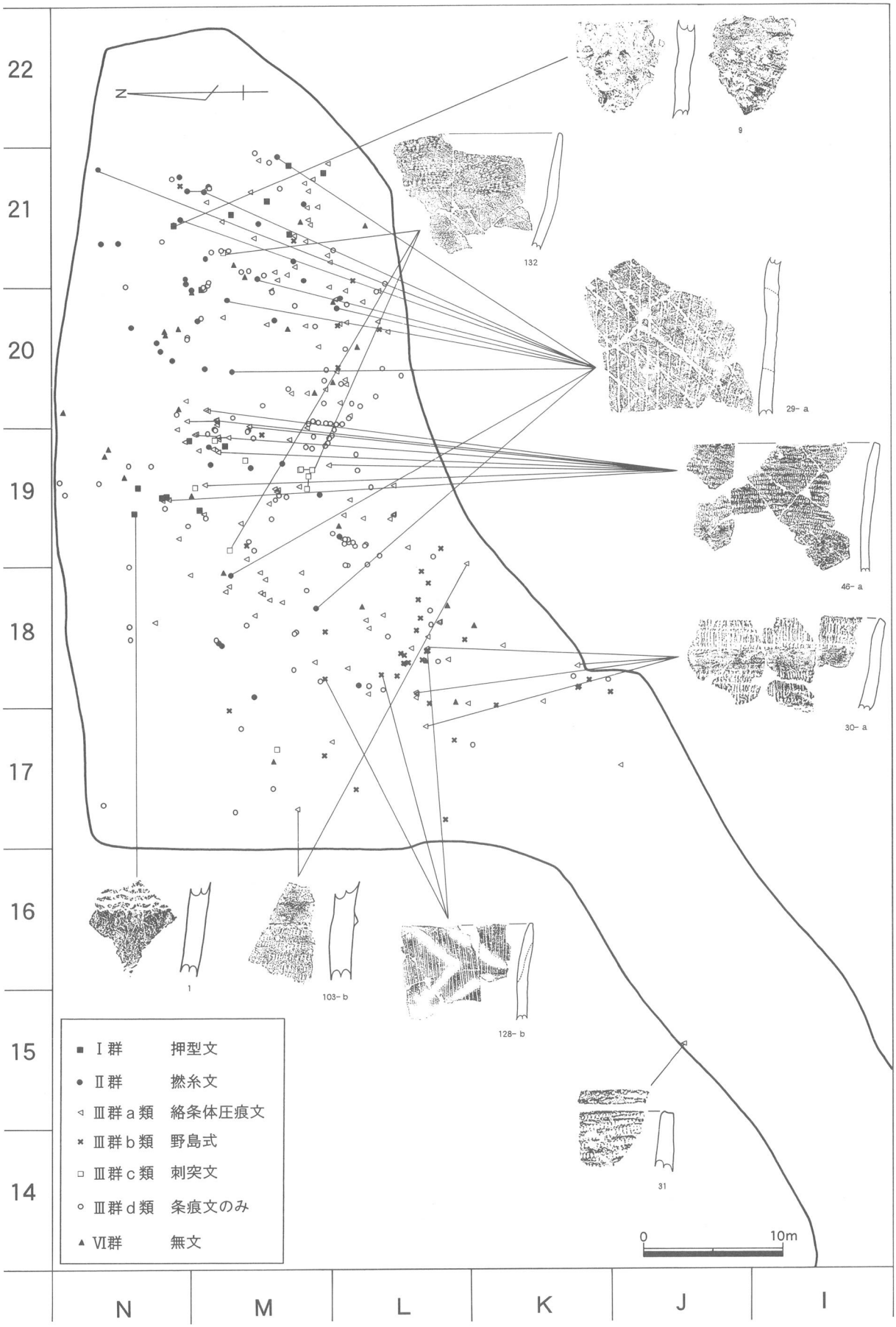
＜ｄ類＞（133～164）

ａ類～ｃ類に並行すると考えられる条痕文のみの土器の一部を掲載した。この中でも133は条痕によって格子目状のモチーフを形成するものである。全て同一個体として扱っているが、接合関係はない。また底部付近（133-f,h,i）になると裏面の調整が粗雑になっていくのが観察できる。胎土には繊維が含まれるが他の条痕文土器よりはるかに少なくしっかりしている。134～164は表面、裏面に条痕の調整が観察されるものである。ａ類、ｂ類の無文部も混じっていると考えられる。全体的に器厚は分厚く、繊維を多量に含む。

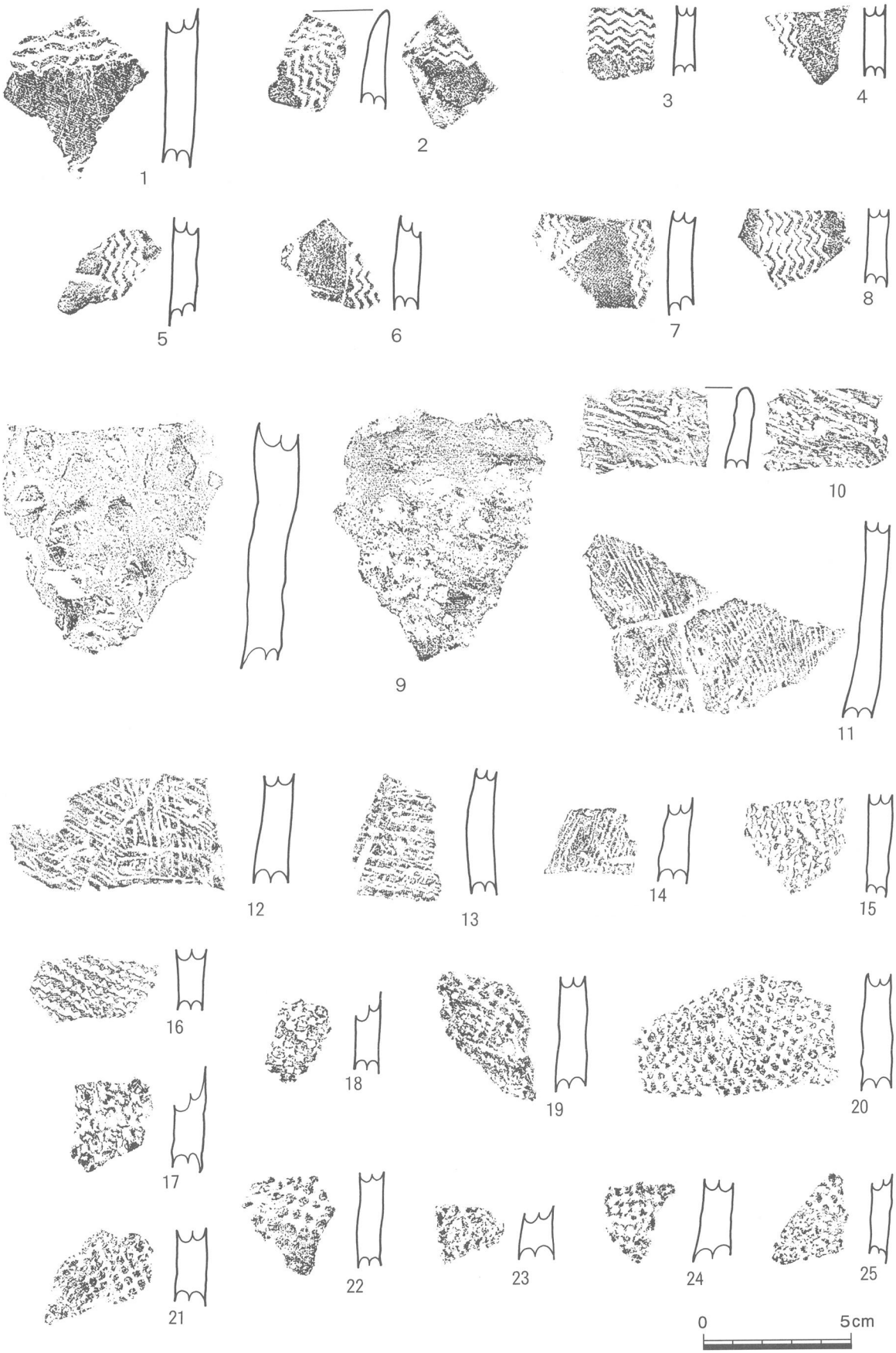
Ⅳ群　Ⅰ群～Ⅲ群に平行する無文の土器と底部（165～187）

165～175は無文の土器の口縁部にあたる。165～169は胎土が砂質で、繊維をほとんど含んでいない。２～８の押型文土器に共伴する無文土器の可能性がある。170～175は繊維を含む無文の土器である。174には補修孔が穿たれている。

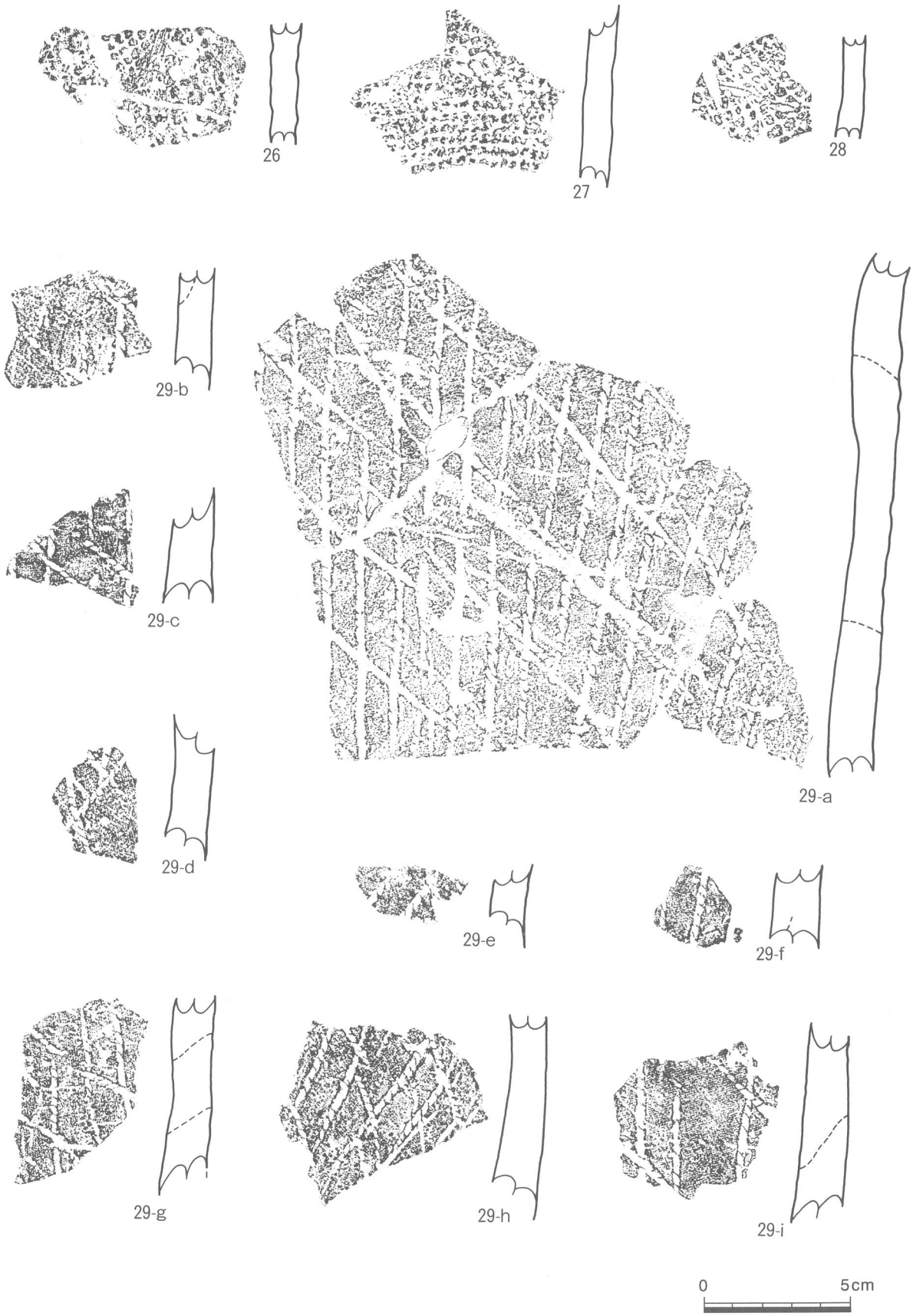
176～187に底部を一括した。これらは残りが非常に悪く、実測図は大半が回転による復元実測である。底部は大きく尖底のもの（176～180）、と平底のもの（182～187）がある。いずれも繊維を多量に含む。181は尖底部に円形の扁平な粘土塊を貼り付けた底部である。胎土は繊維を含まず、砂質である。



第16図　縄文時代早期土器平面分布

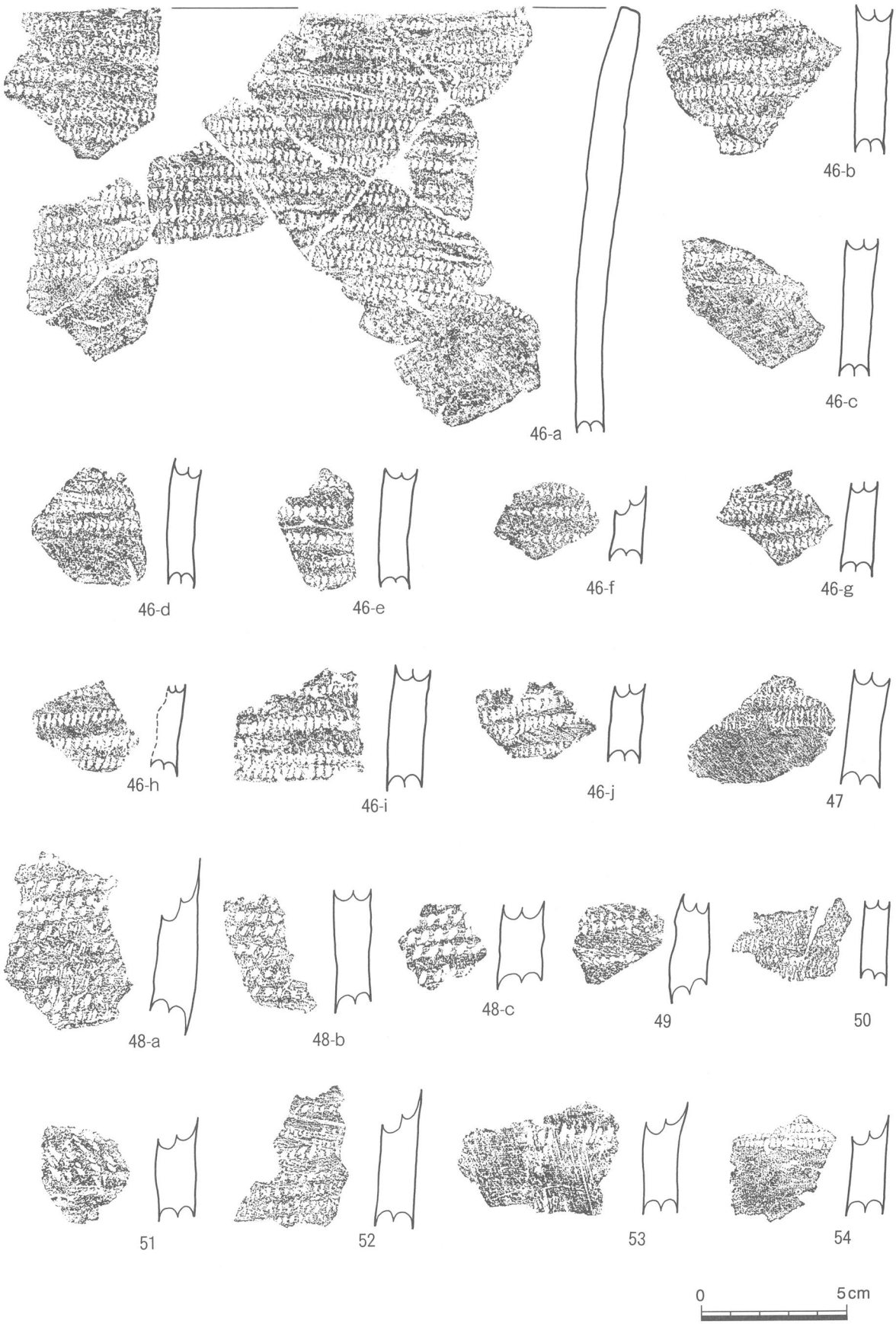


第17図　Ⅰ群・Ⅱ群土器

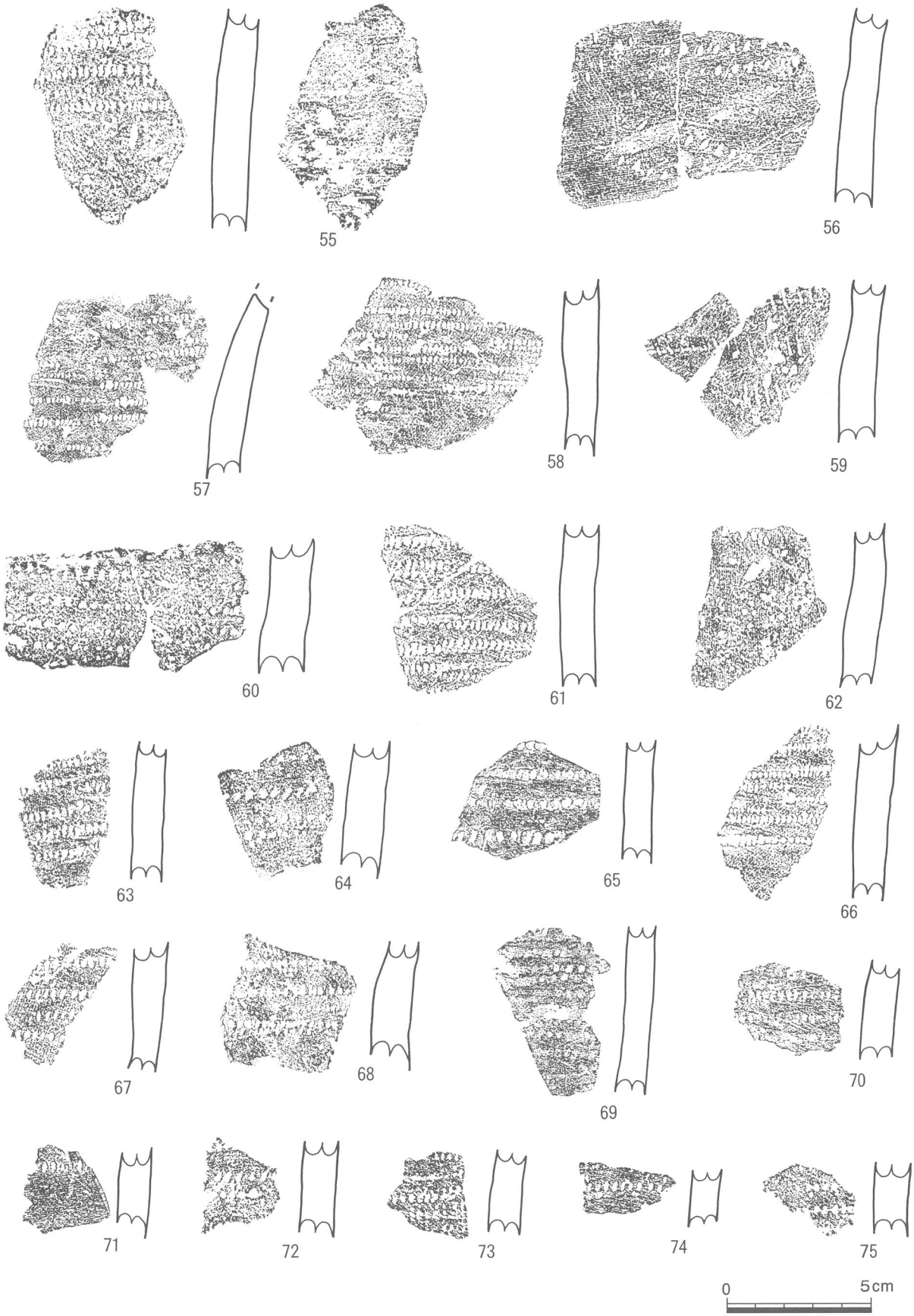


第18図　Ⅱ群土器

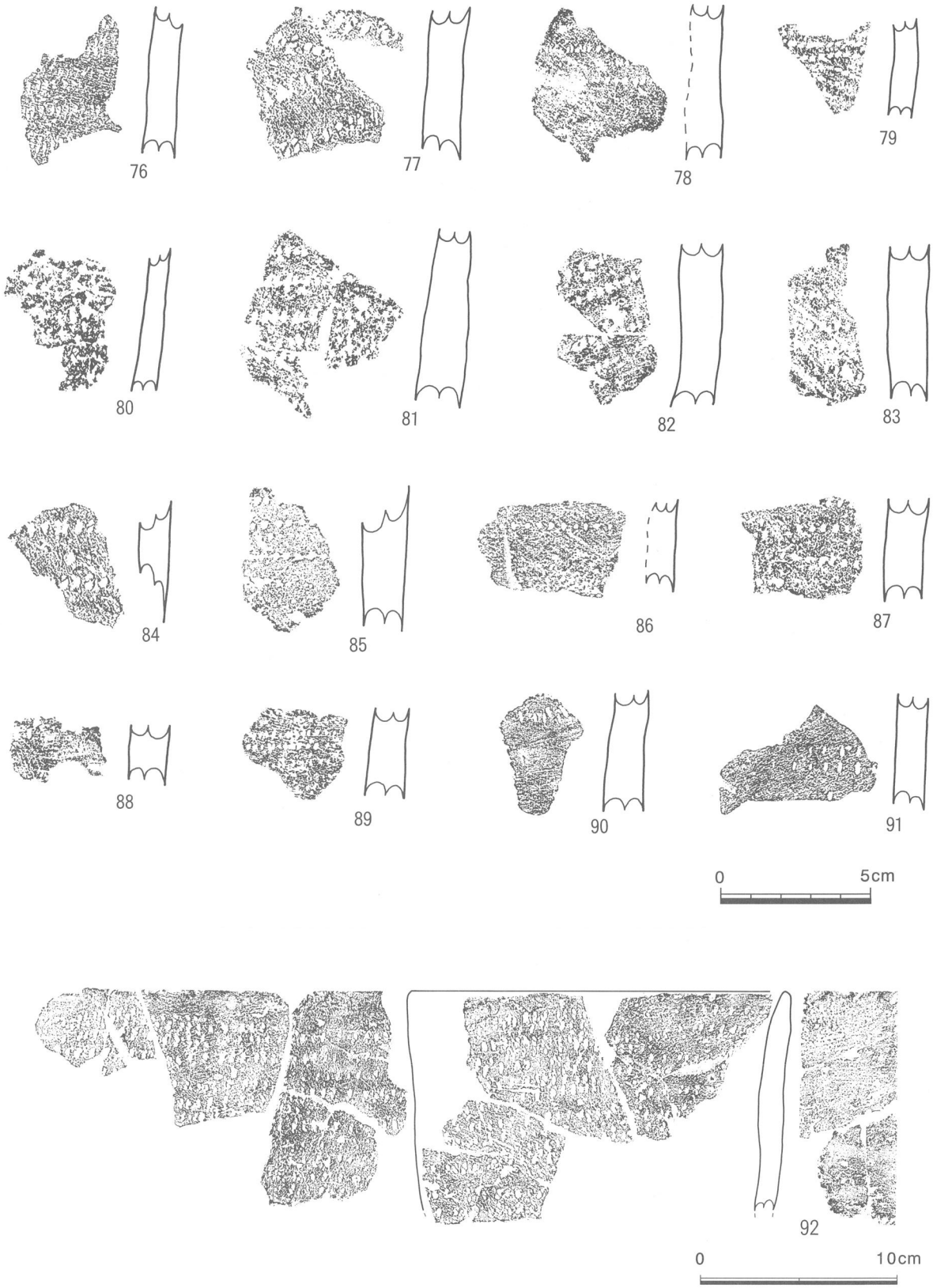
第19図　Ⅲ群土器１


46-a
46-b
46-c
46-d
46-e
46-f
46-g
46-h
46-i
46-j
47
48-a
48-b
48-c
49
50
51
52
53
54
0
5cm

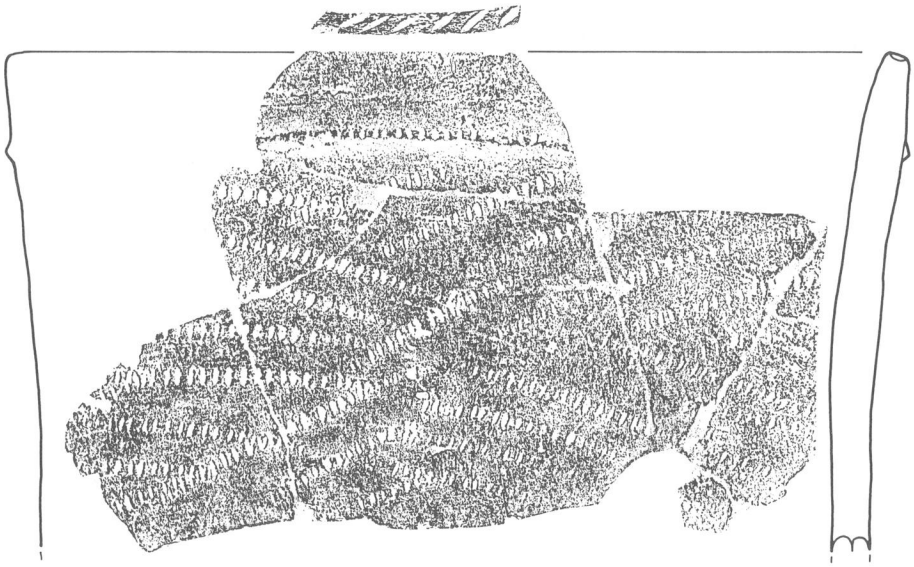
第20図　Ⅲ群土器２



第21図　Ⅲ群土器３



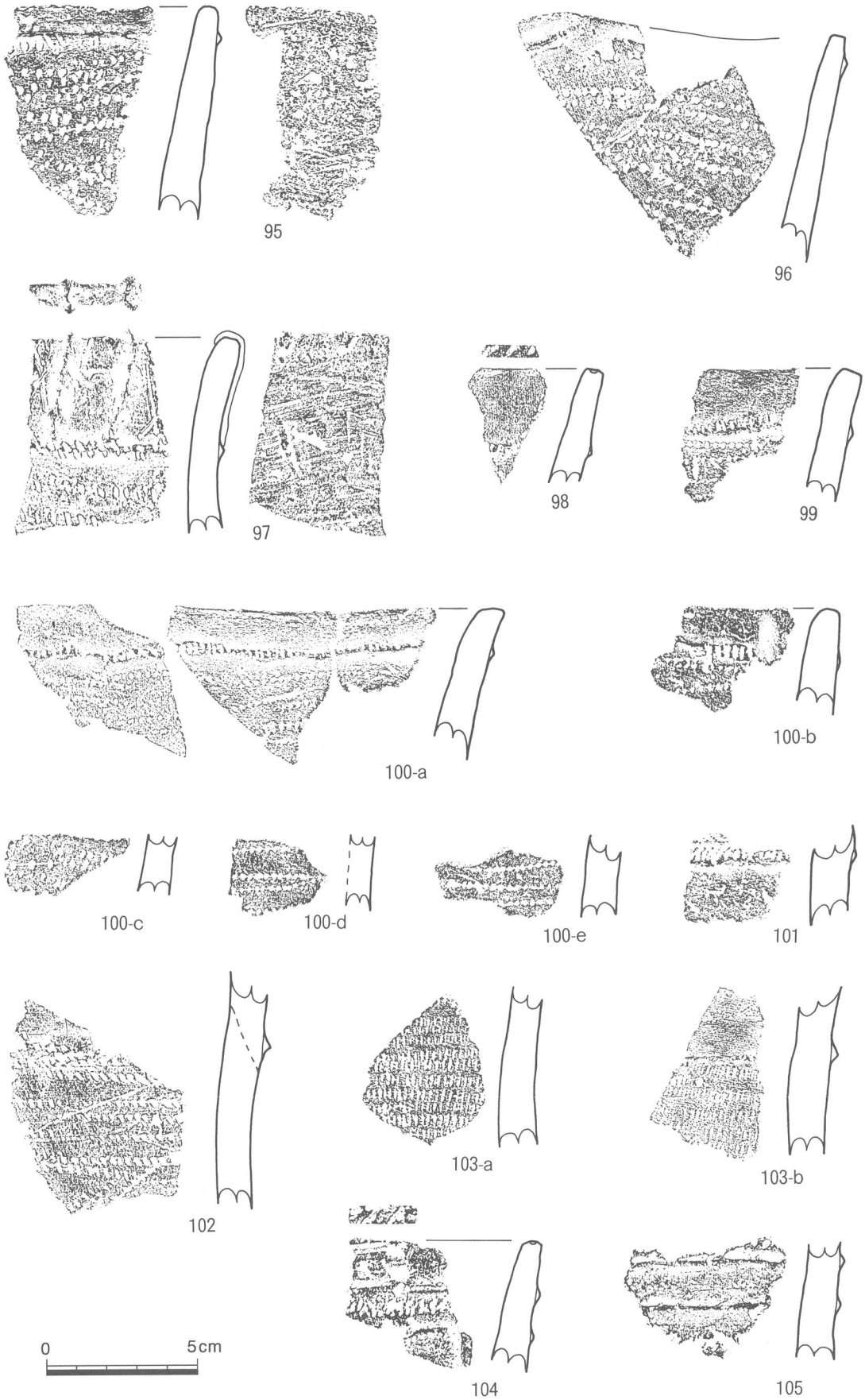
第22図　Ⅲ群土器４



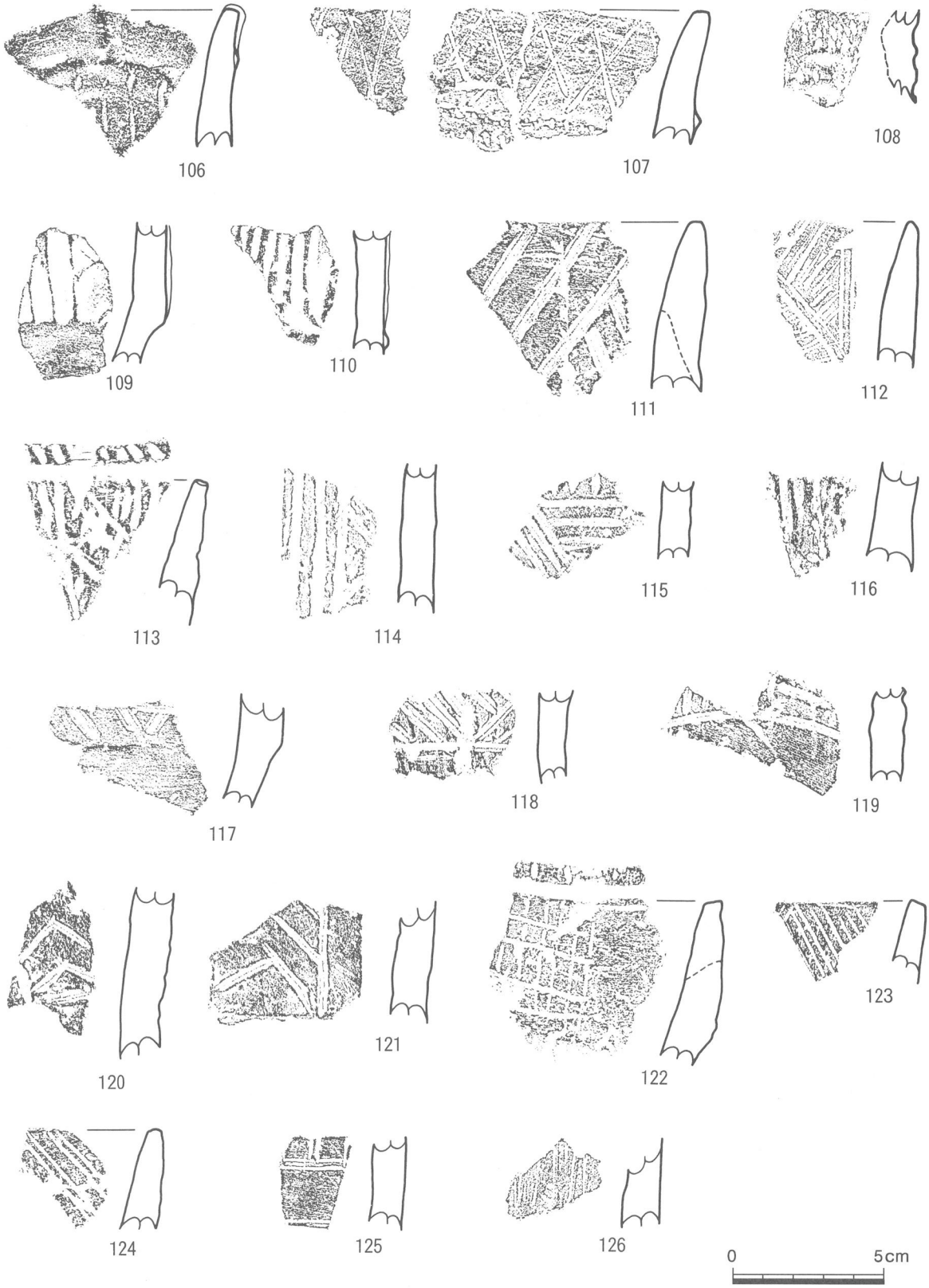
93

94

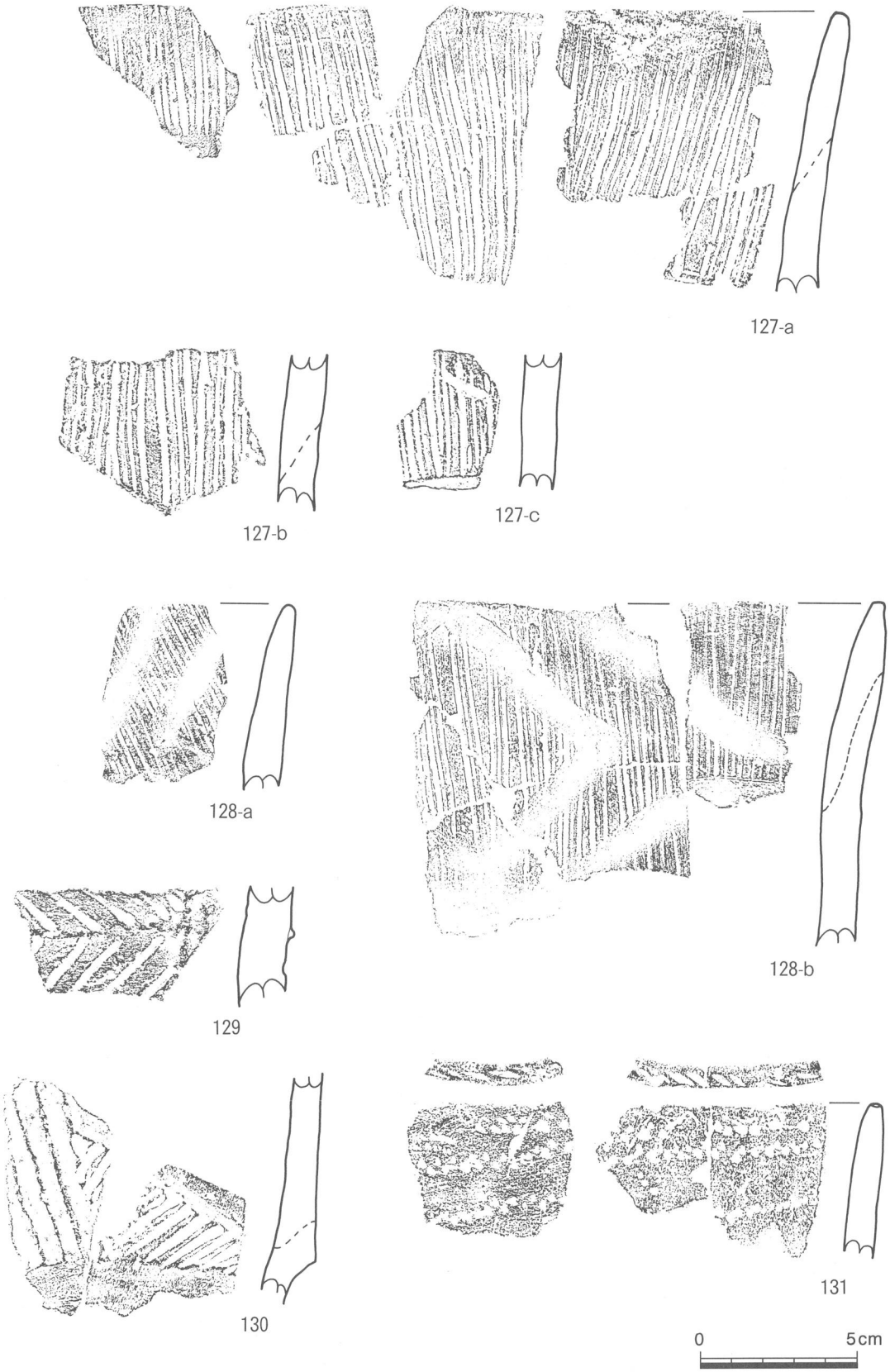
第23図　Ⅲ群土器５


95
96
97
98
99
100-a
100-b
100-c
100-d
100-e
101
102
103-a
103-b
104
105
0
5cm

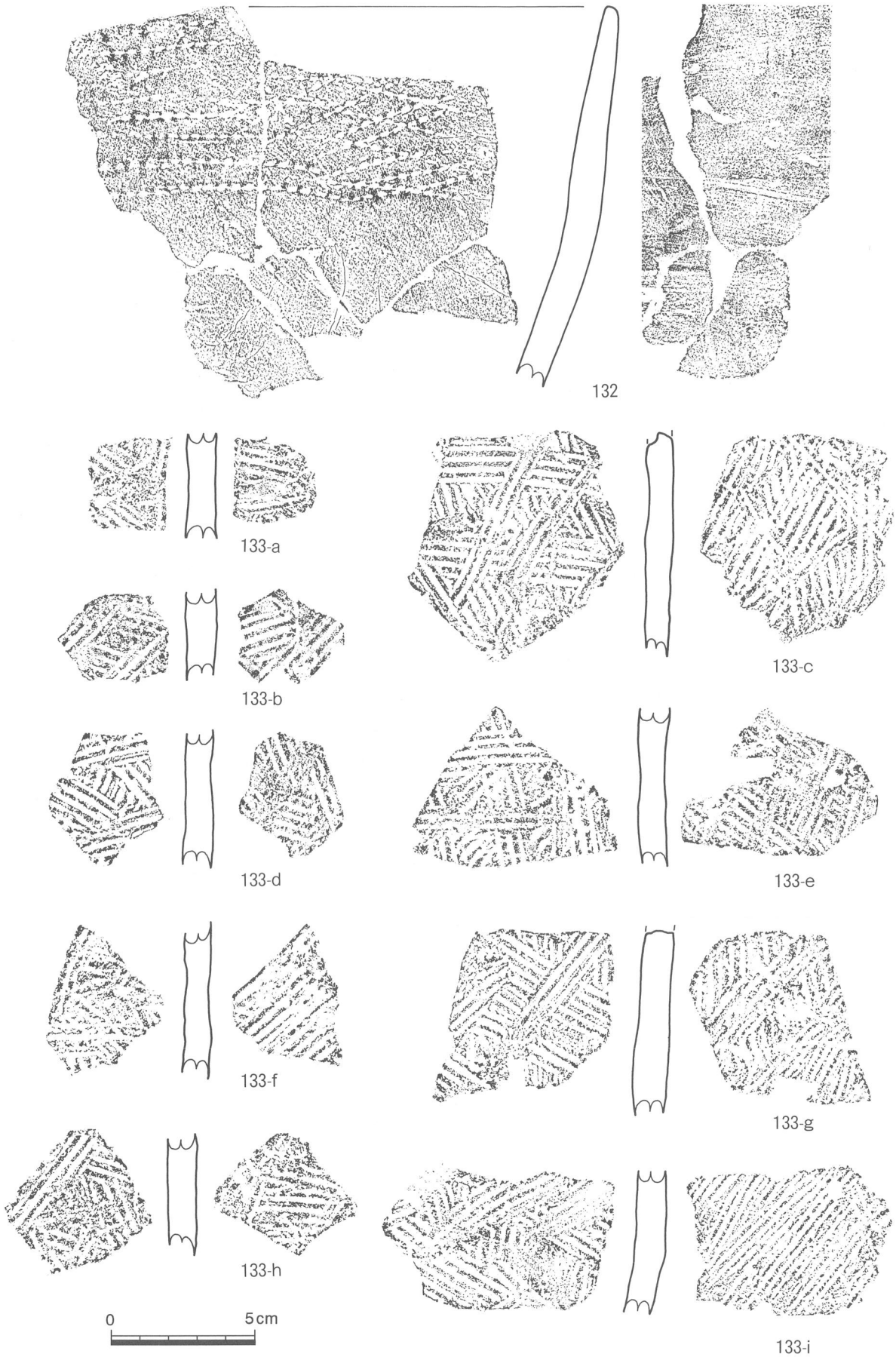
第24図　Ⅲ群土器６


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
0
5cm

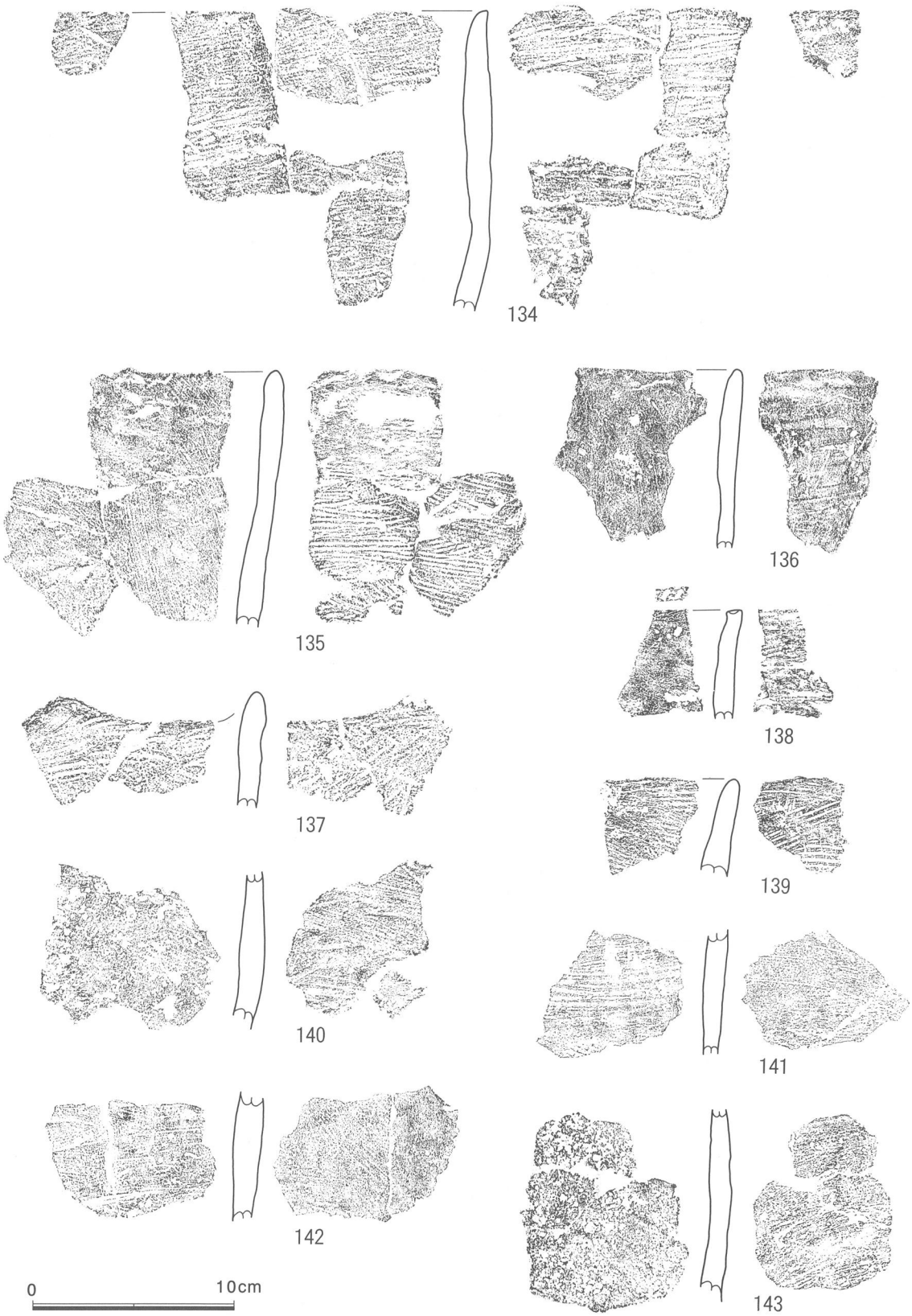
第25図　Ⅲ群土器７



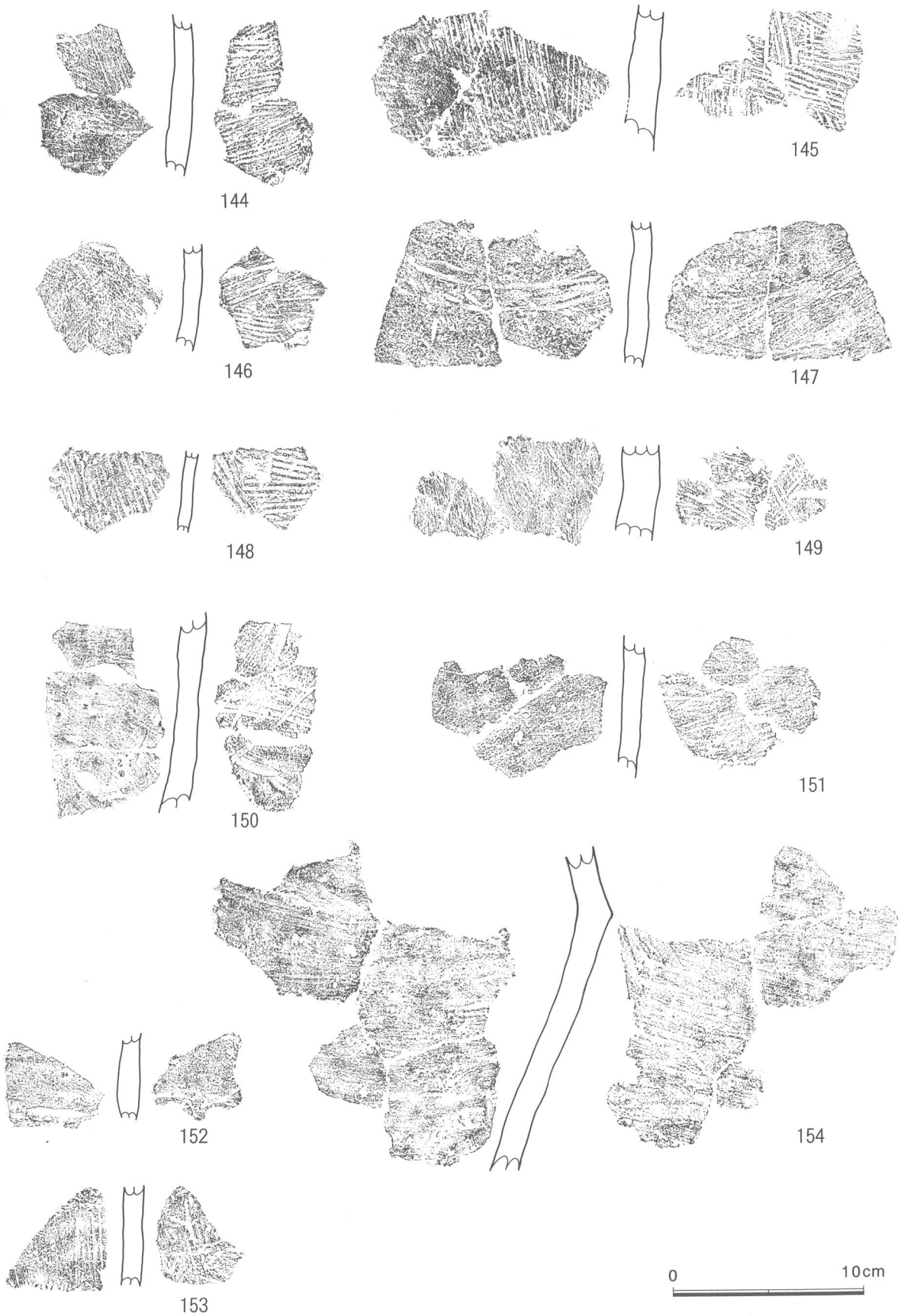
第26図　Ⅲ群土器８



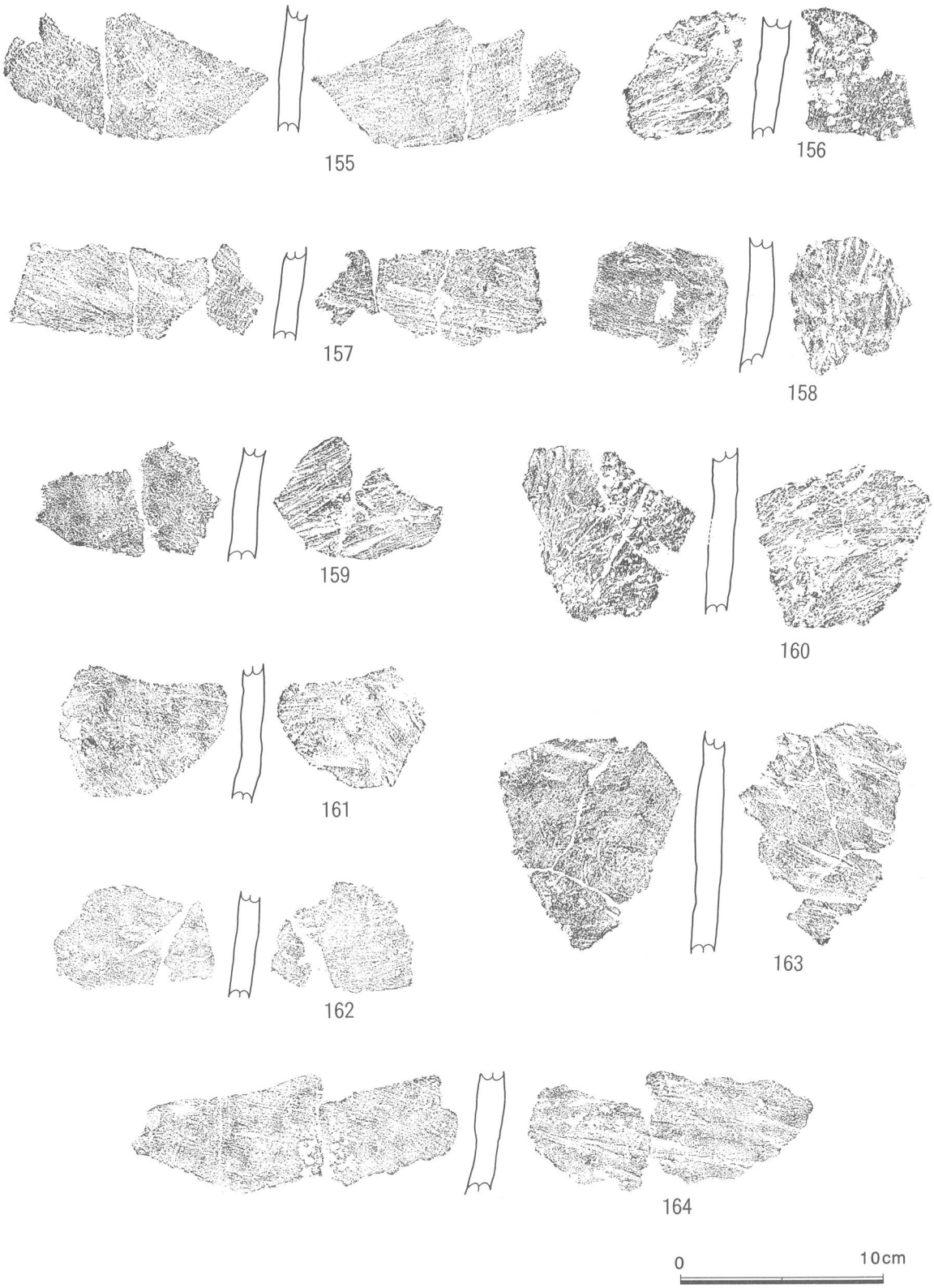
第27図　Ⅲ群土器９



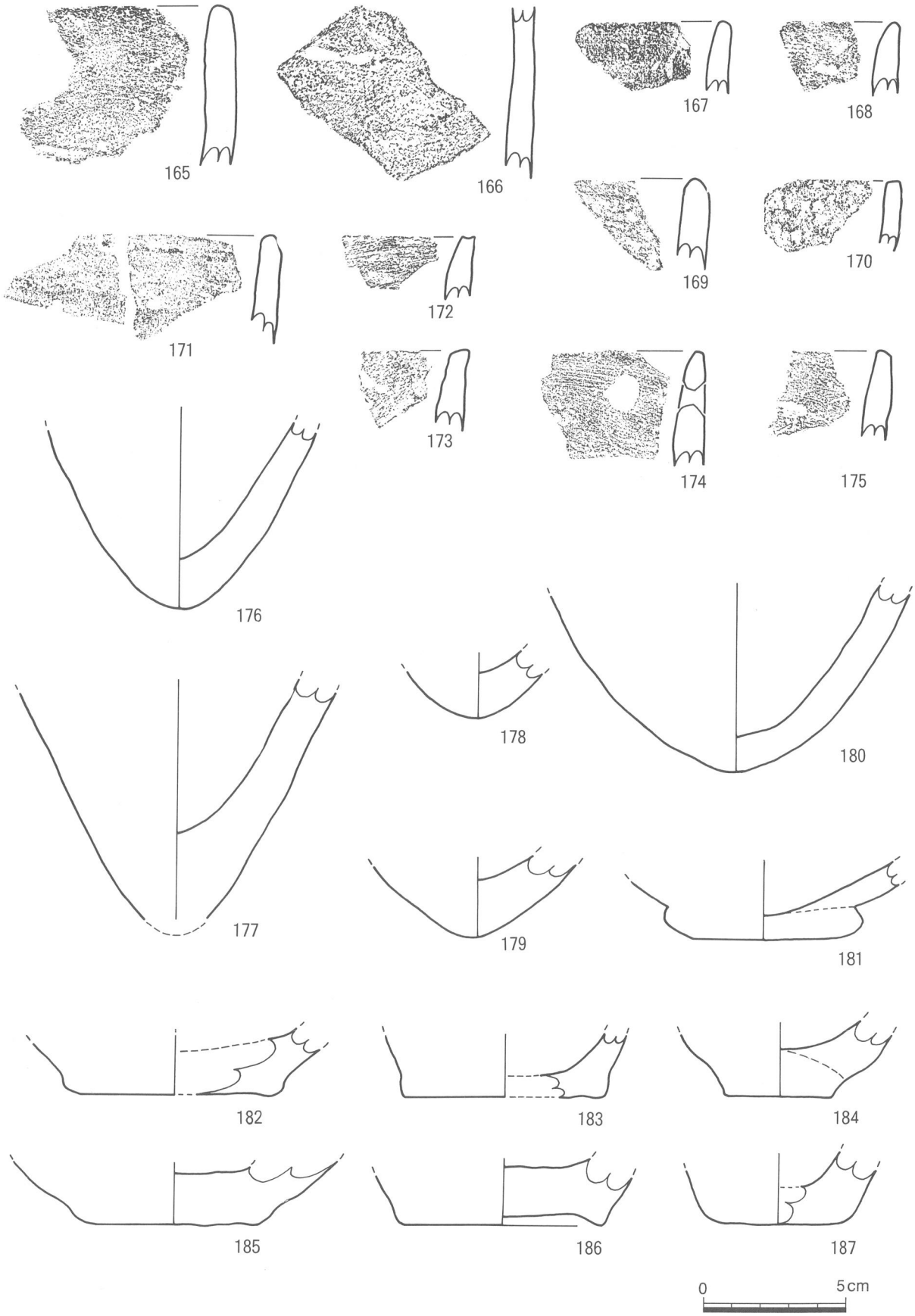
第28図　Ⅲ群土器10



第29図　Ⅲ群土器11



第30図　Ⅲ群土器12


165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
0
5cm

第31図　Ⅳ群土器

（２）縄文時代前期の土器

Ⅴ群　黒浜式土器（188）

188はＨ13グリッドから１点のみ出土している。横位のＬＲの縄文を地文として口縁部に２列の半截竹管の刺突文が施される。胎土には繊維を多量に含む。

Ⅵ群　諸磯式土器（189～222）

Ⅵ群は諸磯式と考えられるものである。全体をａ類：諸磯ａ式土器、ｂ類：諸磯ｂ式土器とそれに並行すると考えられる土器、ｃ類：諸磯ｃ式土器、ｄ類：ｂ類、ｃ類に伴う縄文土器、撚糸文土器に分類して報告する。遺物の分布は第32図にあるとおりであるが、ｂ類とｄ類の分布が重なるため、ｄ類土器は諸磯ｂ式土器に伴う縄文土器の可能性が高い。

＜ａ類＞（189）

１個体が出土している。189はＬＲの縄文を地文に竹管による円形刺突文を縦位に、口縁部には半截竹管による刺突を施す。胎土には繊維の混入は見られず砂質である。

＜ｂ類＞（190～196）

諸磯ｂ式と考えられるものについては縄文を地文に持つもの（190、191、194）、地文がないもの（192、193）に分けられる。190はＲＬの縄文を地文にし、２本単位の浮線文を配する。浮線文脇は器面と密着させるためにナデられているため、地文は消されている。胎土は砂質。191はLRの横位の縄文を地文とし、２本単位の浮線文を貼る。浮線文の脇は指でなでられており断面形は微妙な高まりとなっているのみ。194は口唇部に刻目を持ち、口縁部は緩やかに内湾し波状を呈す。浮線文に挟まれた胴部模様帯には木の葉状文を有する。また地文はＲＬの縄文だが、沈線で区画された木の葉文の外側は磨り消されている。192、193は浅鉢の一部と考えられる。195は波状にうねる連続した爪形文の下に、沈線を境として二枚貝の腹縁を用いた刺突文を持つもので、興津式の文様要素を含む。196はＲＬの縄文を地文として半截竹管によると考えられる下方向に引っ掻くような刺突を加えたものである。器厚はうすく、裏面には指頭痕が残される。また196 -aには、刺突文と組合わさるように、地文の縄文とは異なるＬの押圧縄文が観察できる。

＜ｃ類＞（197～205）

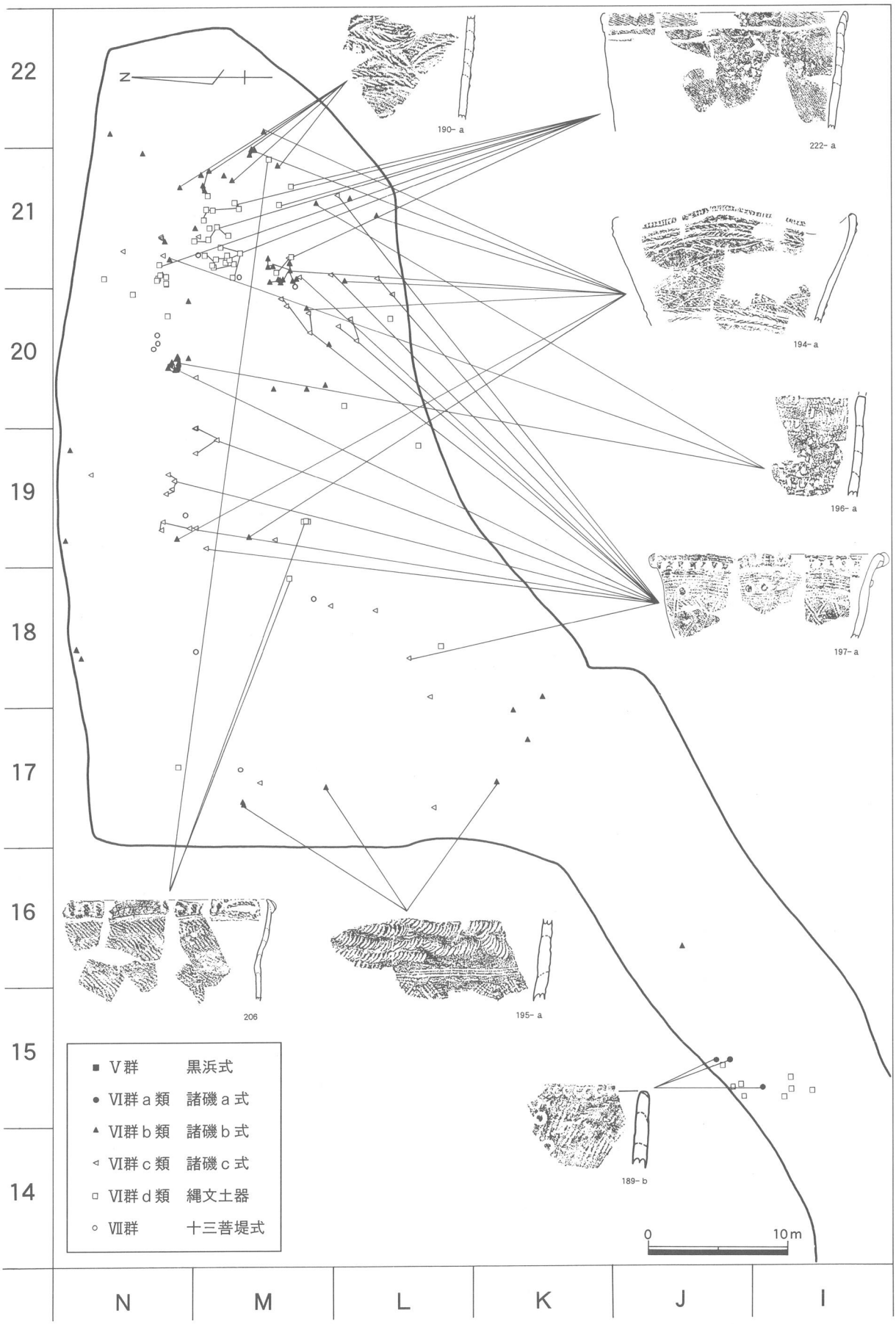
地文となっていた縄文が消え、竹管文が地文化する諸磯ｃ式と考えられるもの（197～205）をまとめた。197は口縁部に三角形の削り取りと貼付文を持ち、胴部にはボタン状の貼付文を配す。地文は半截竹管文となる。198～205は半截竹管による沈線のみのものである。

＜ｄ類＞（206～222）

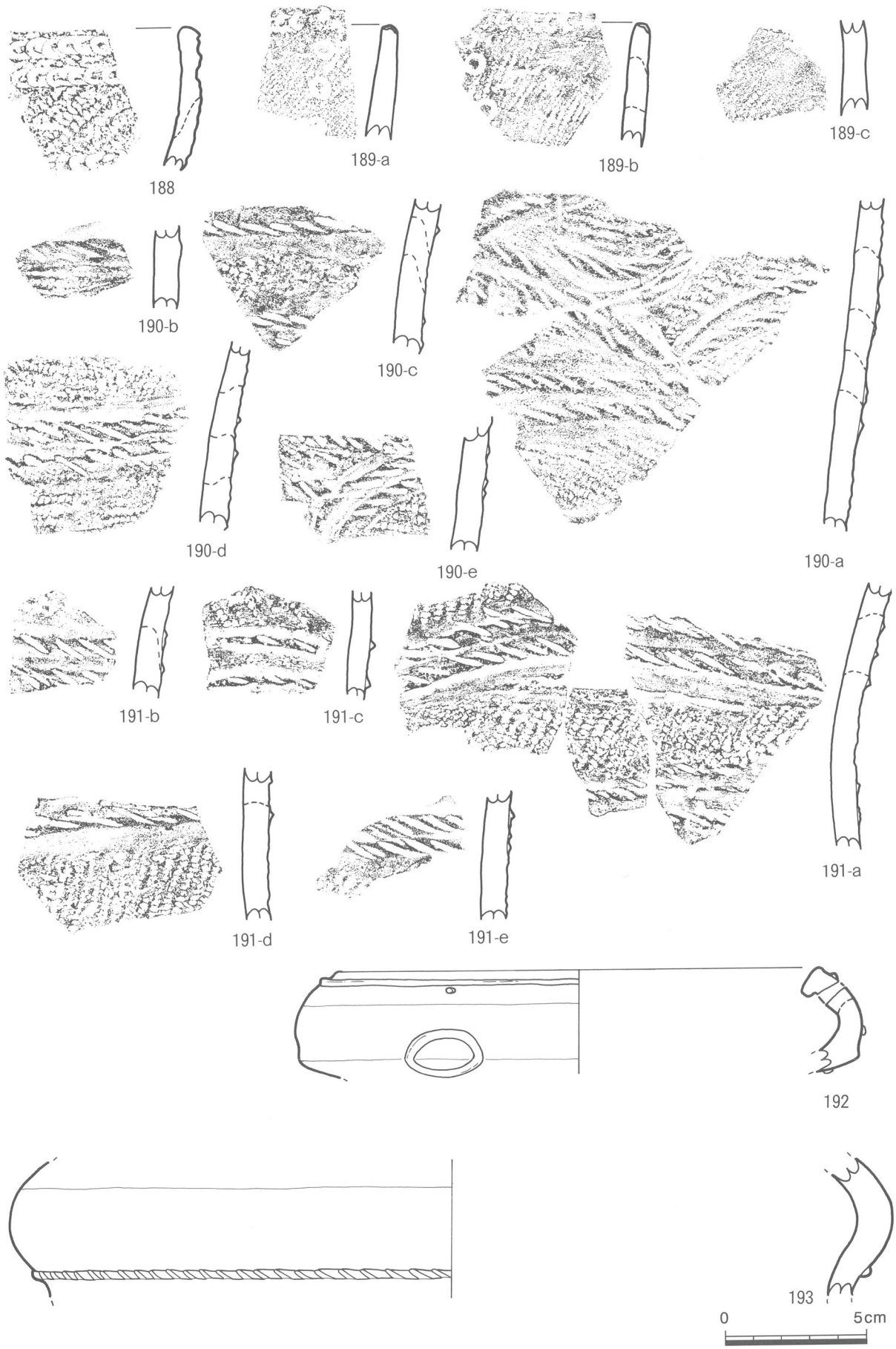
ｂ類、ｃ類に伴うと考えられる縄文土器と撚糸文土器を集めた。206は貼り付け状の口縁を持ち胴部の縄文はＲＬの横位施文である。口縁部には隆線が配され、隆線上にも縄文が施文される。211は不明瞭であるがＲＬの横位回転縄文と考えられる。212、213と同一個体の可能性がある。214、215、218は結束なしの羽状縄文である。222は口縁部が２段に貼り付けられており、全面にナナメ方向のＬの撚糸文を施す。胎土は砂質で脆い。

Ⅶ群　十三菩提式土器（223）

１個体のみが出土している。223は集合条線と三角形の削り取りが施される。



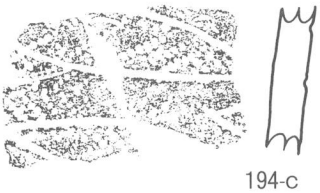
第32図　縄文時代前期土器平面分布

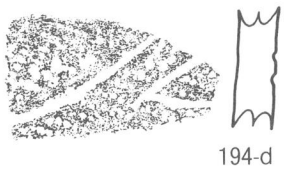

188
189-a
189-b
189-c
190-b
190-c
190-d
190-e
190-a
191-b
191-c
191-a
191-d
191-e
192
193
0
5cm

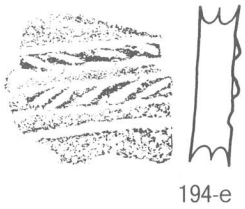
第33図　Ⅴ・Ⅵ群土器

194-a

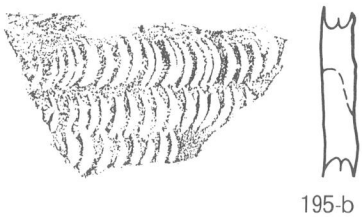
194-b


194-c


194-d


194-e

195-a


195-b

196-a

196-b

196-c

196-d

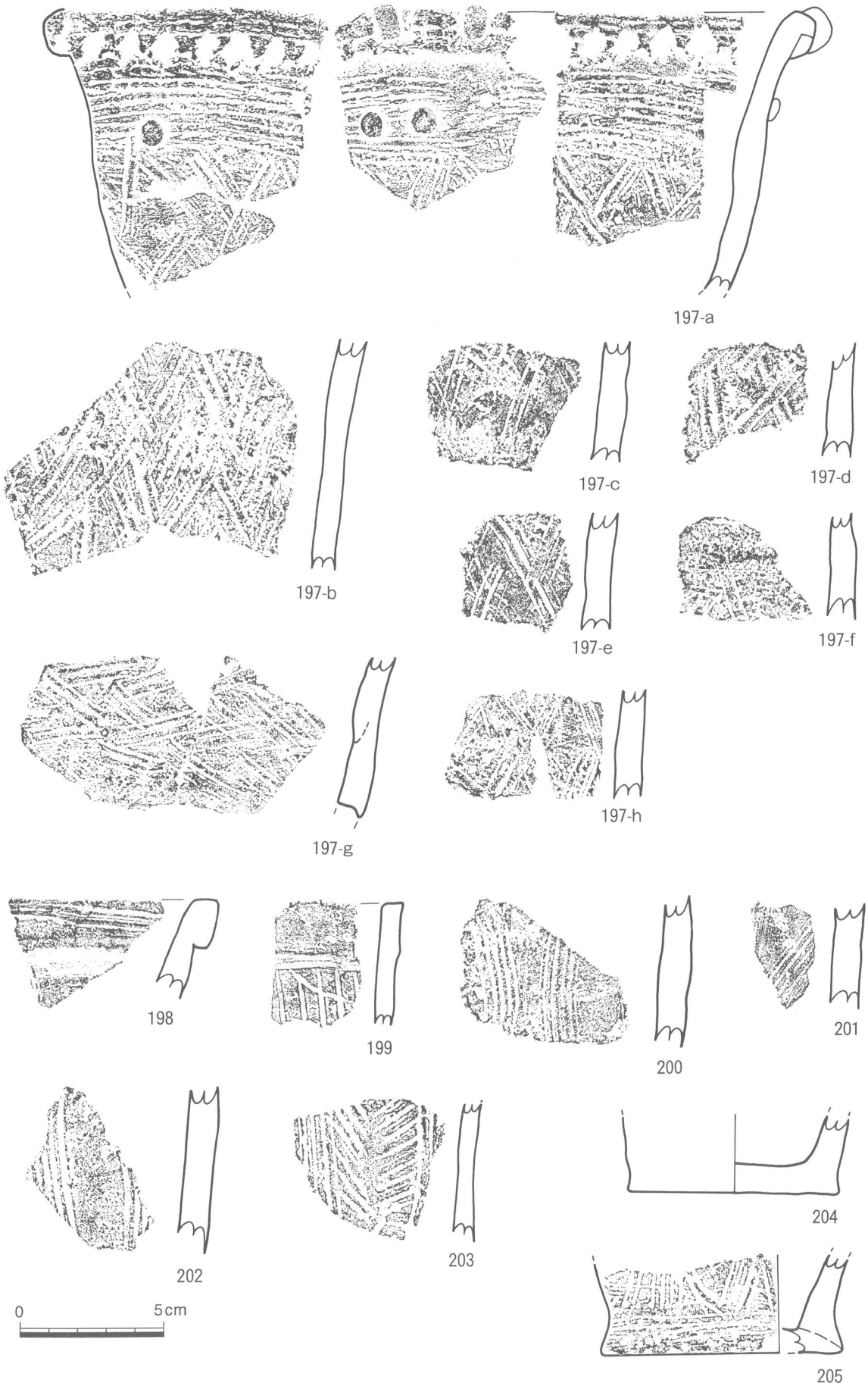
196-e

196-f

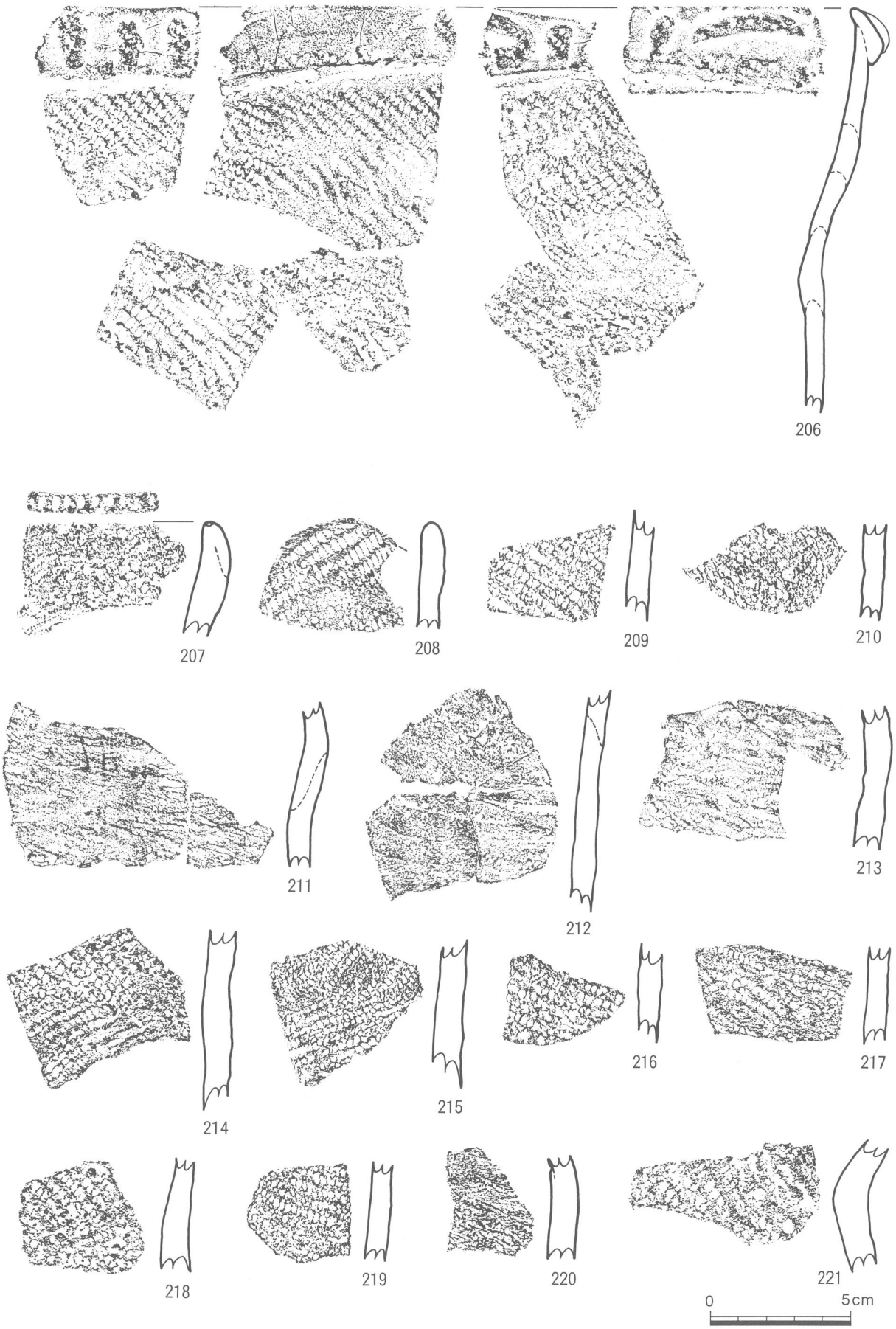
196-g

0
5cm

第34図　Ⅵ群土器１


197-a
197-b
197-c
197-d
197-e
197-f
197-g
197-h
198
199
200
201
202
203
204
205
0
5cm

第35図　Ⅵ群土器２


206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
0
5cm

第36図　Ⅵ群土器３

第37図　Ⅵ・Ⅶ群土器

（３）縄文時代中期の土器

Ⅷ群　勝坂式期の土器（224～273）

中期前半の勝坂式期の土器群に関しては、小破片が多いため文様の要素からａ類：新道式とそれに並行するもの、ｂ類：藤内式土器、ｃ類：井戸尻式とそれに続く勝坂式最終末期の土器に分類して報告する。

＜ａ類＞（224～227）

新道式の新段階に属すると考えられるもので、224・225は三角形と四角形の横区画文を連続爪形文（キャタピラ文）と三角押文とで描く。227は浅鉢で、口縁部の外側に三角押文と波状沈線を配する。226は阿玉台式土器の系統のものと考えられ、口縁部を中心に隆帯が施される。

＜ｂ類＞（228～268）

隆帯横を連続爪形文でおさえるものと（228～255）と隆帯上に刻みを入れるようになるもの（256～261）に分かれる。228はＲＬの横方向の縄文を地文に、幅の広い連続爪形文と狭いものとで三角形の区画をつくったものである。229と230は隆帯脇に連続爪形文を配し、三角形の横区画を描くもので区画内には三叉文をもつ。胴部には集合沈線の文様帯がある。２点は大変類似するが、連続爪形文の施文具が違うため、別個体として掲載した。SB５で出土している。231は浅鉢で口縁部の内側には６単位の楕円区画文を有す。２号住居跡の炉跡から出土している。232は連続爪形文で方形に区画された内を胴部上半は波状沈線を配し、下半はRLの縄文を充填する。ミミズク把手を有する。233～254は隆帯脇に施される連続爪形文の破片を集めた。255は浅鉢である。接合はしないが、口縁部の外側には連続爪形文を配する。256～261は隆帯上に刻みを持つもので、261は縦区画文の一部であろう。262～268は藤内式に伴うと考えられる縄文土器である。265はミニチュア土器であり、外面全面にＲＬの縄文を転がしている。266は前段（Ｌ）の多条縄文の回転縄文と考えられる。267、268はＬの撚糸文である。

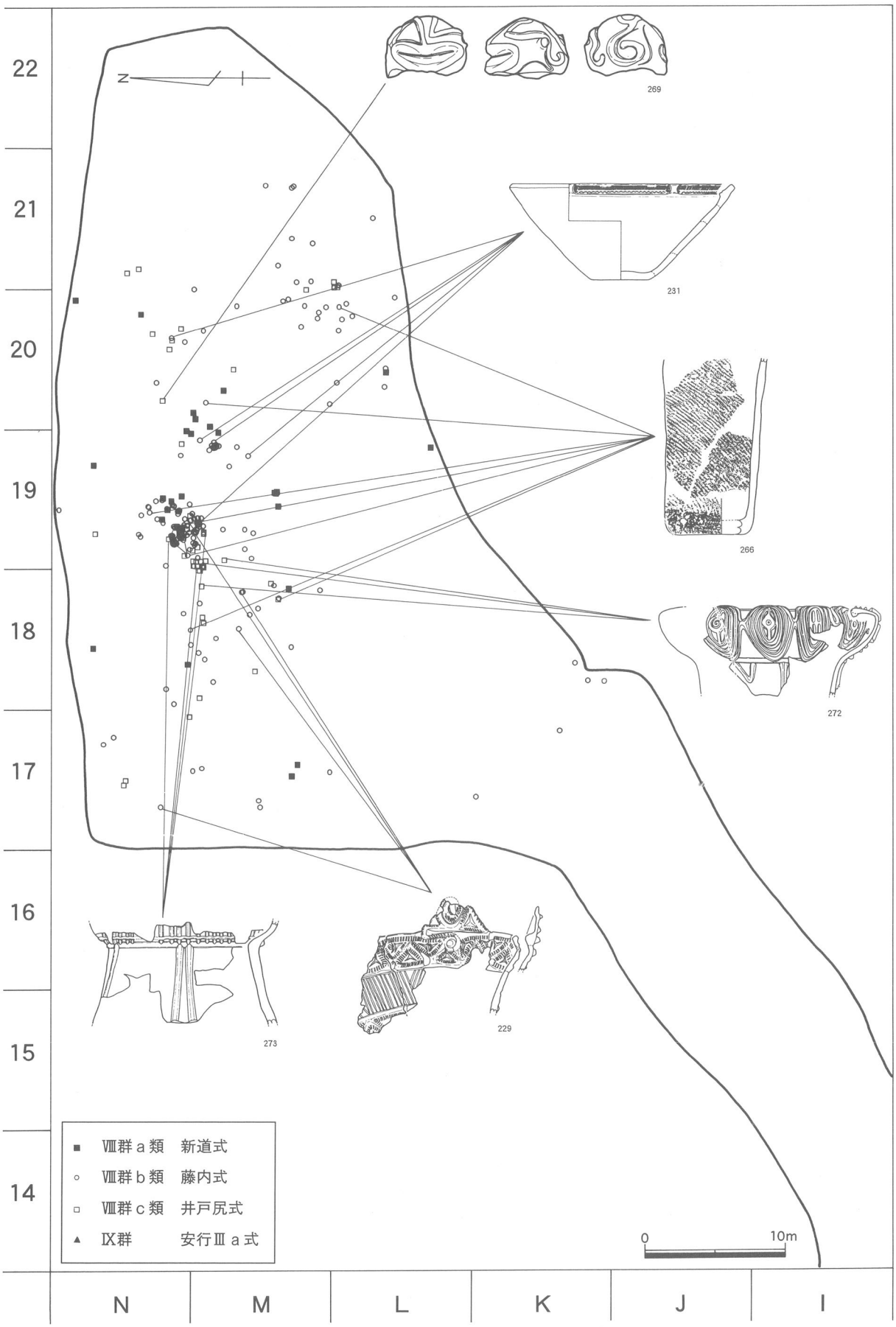
＜ｃ類＞（269～273）

井戸尻式とそれ以降の中期の土器をまとめた。269は顔面把手である。271は蛇把手の一部と考えられる。272、273は井戸尻式終末期から曽利式にかけて存続する、強く湾曲した口縁部に弧状の隆帯を貼り付けたものと考えられる。技法的には隆帯を貼ったのちに細いヘラ状の工具で、隆帯と隆帯の間をなでており、これによって隆帯は器面に密着し、隆帯の断面は方形に近い形となる。八王子市狐塚遺跡出土のものと同一タイプと考えられる。

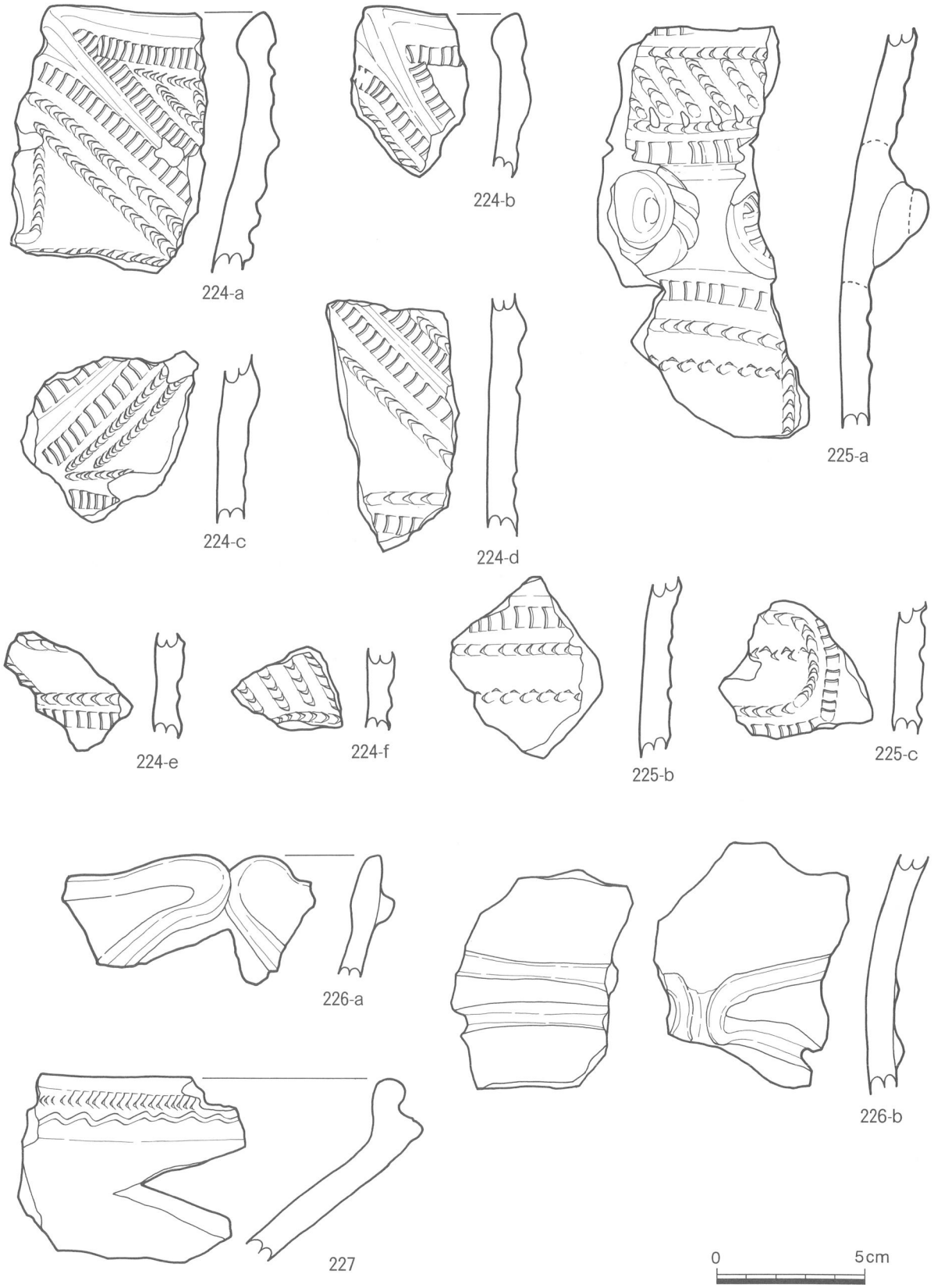
（４）　縄文時代晩期の土器

Ⅸ群　安行Ⅲａ式土器（274）

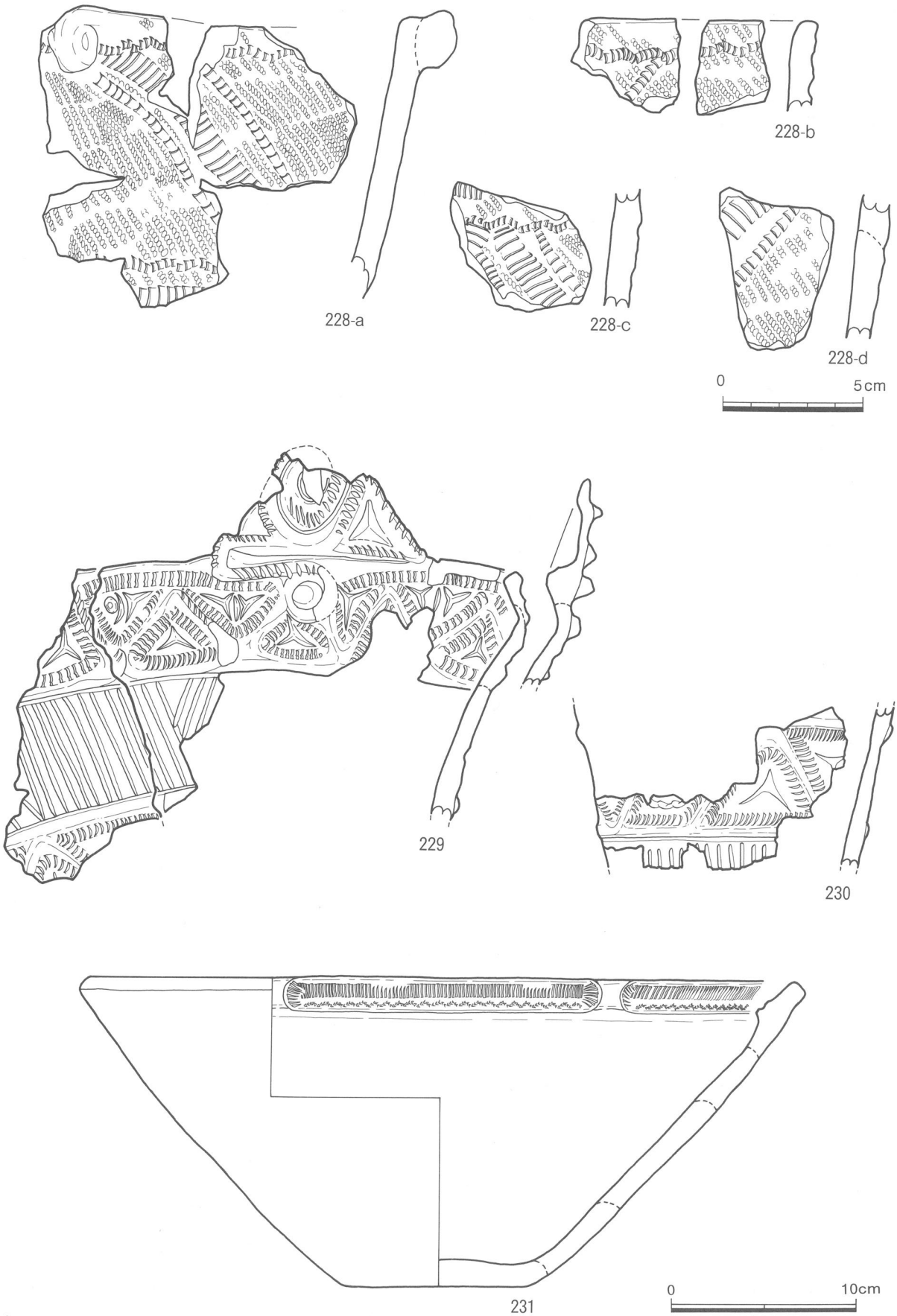
２区の痩せ尾根上（Ｆ３グリッド）で１個体が出土している。274は平縁の深鉢で、沈線の区画内にＲＬの縄文が残る。豚鼻状の瘤文が沈線の交点に配される。



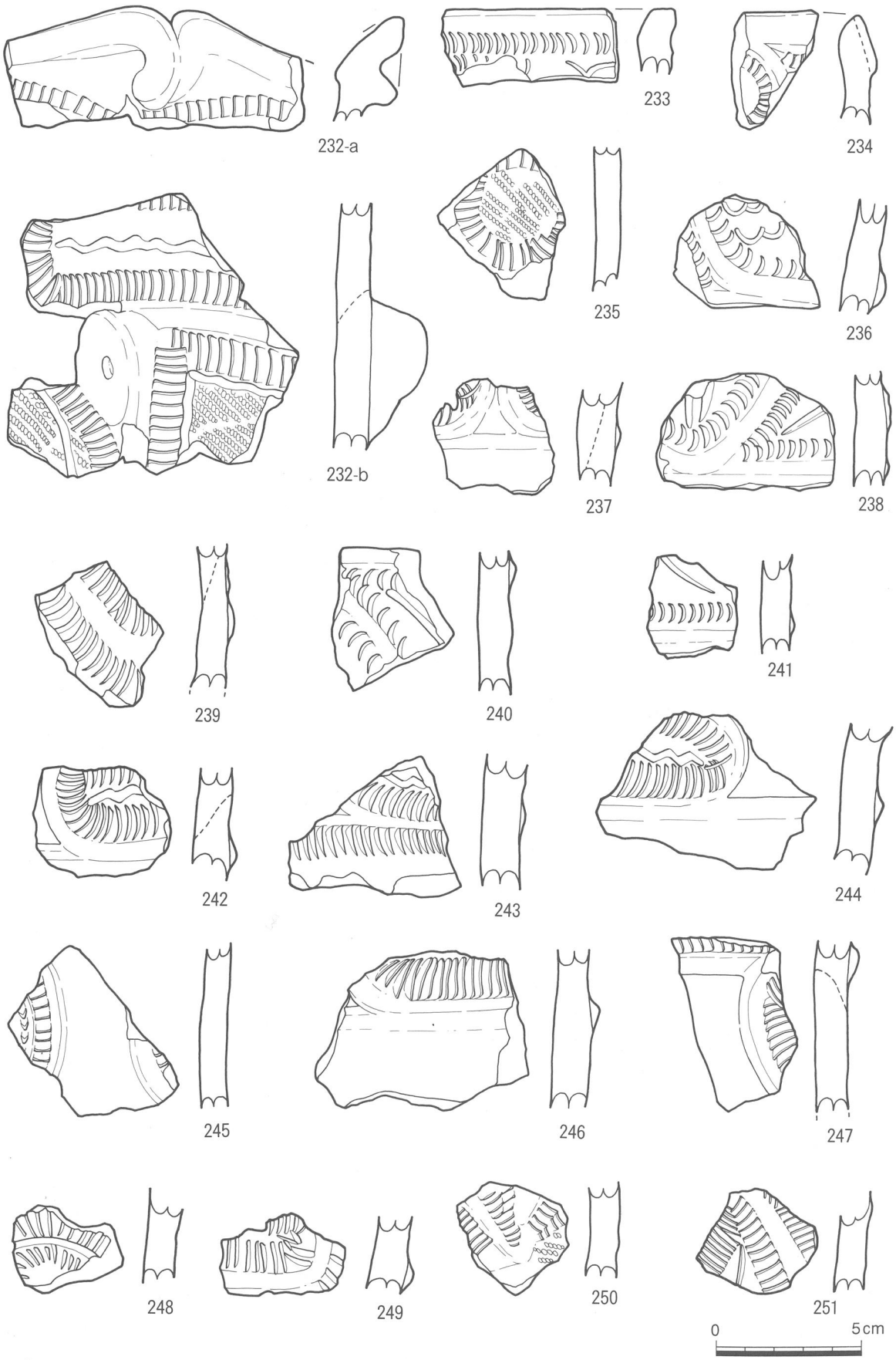
第38図　縄文時代中期土器平面分布


224-a
224-b
225-a
224-c
224-d
224-e
224-f
225-b
225-c
226-a
226-b
227
0
5cm

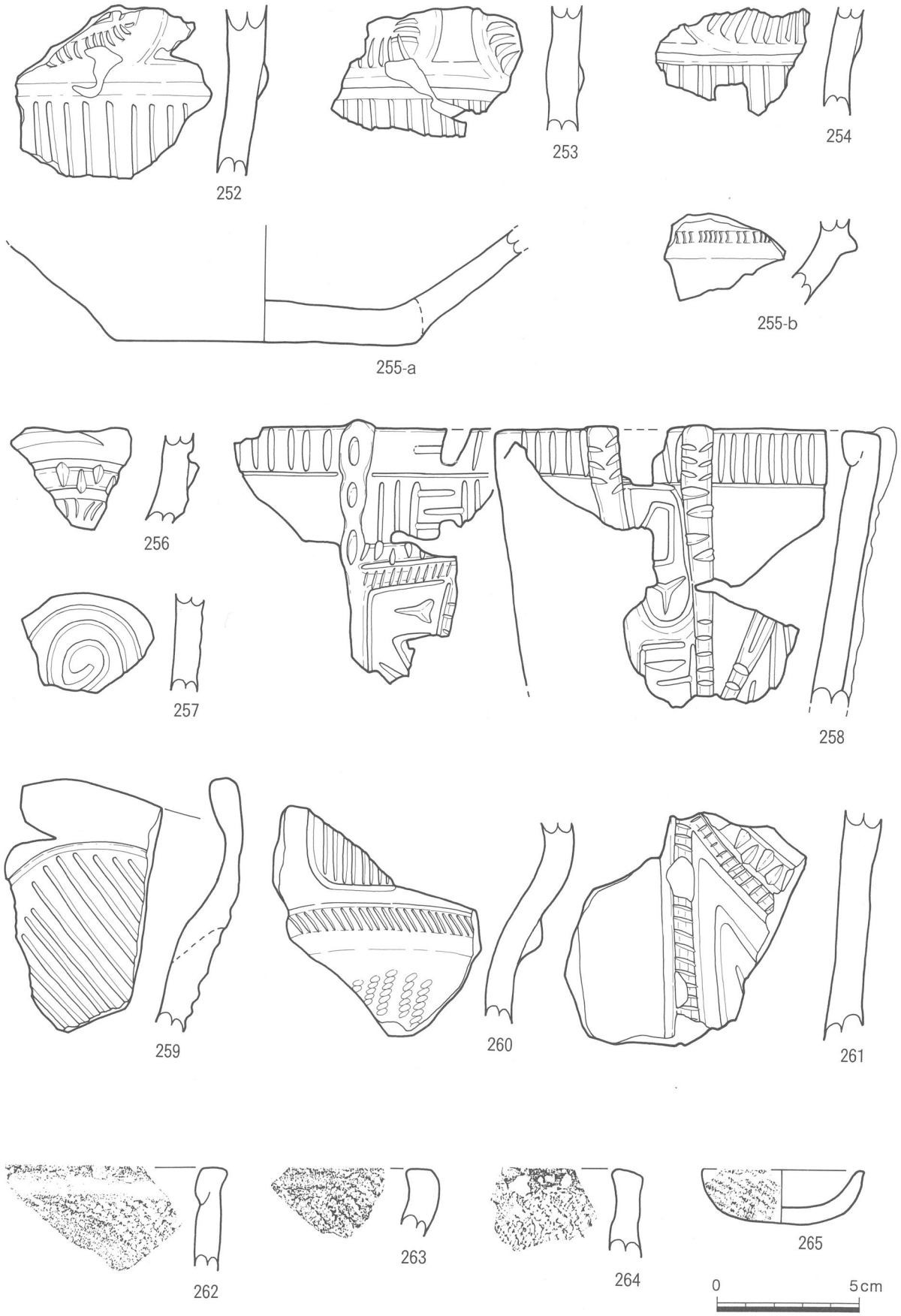
第39図　Ⅷ群土器１



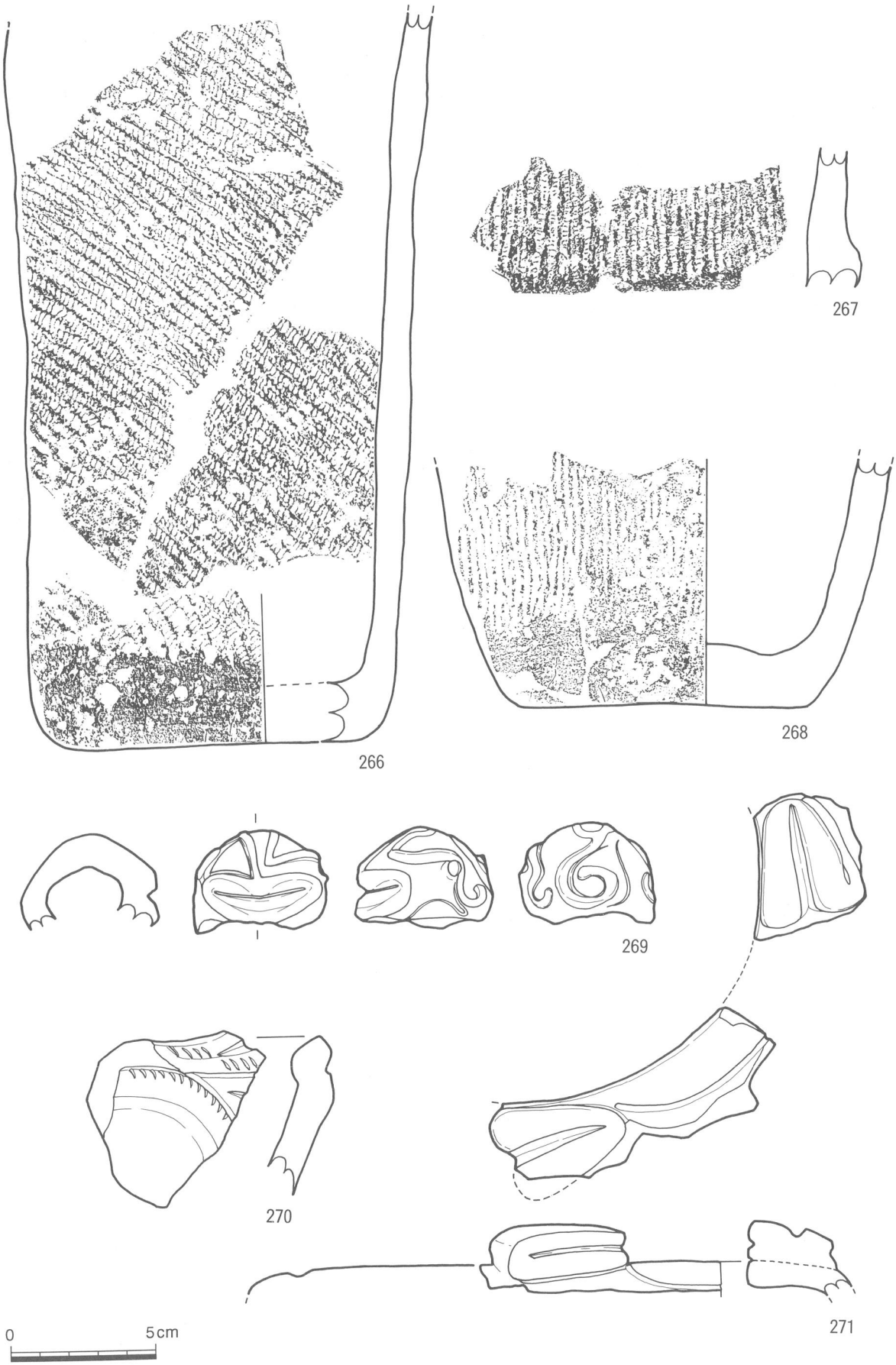
第40図　Ⅷ群土器２


232-a
233
234
232-b
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
0
5cm

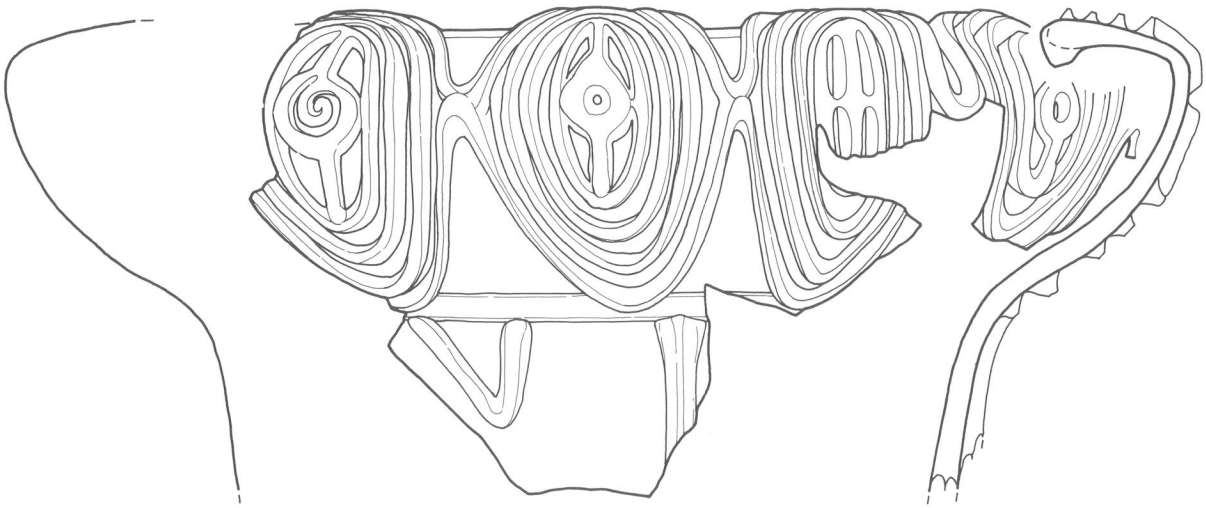
第41図　Ⅷ群土器３


252
253
254
255-a
255-b
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
0
5cm

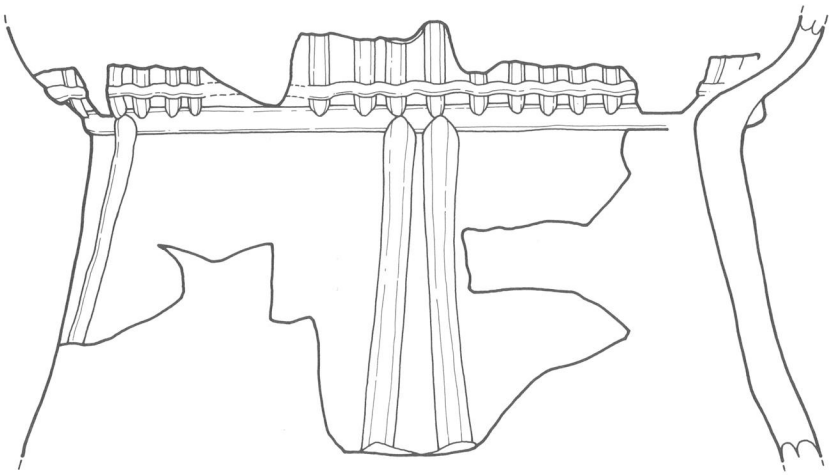
第42図　Ⅷ群土器４



第43図　Ⅷ群土器５



272



273

274

0　　5cm

第44図　Ⅷ・Ⅸ群土器

表２　土器観察表

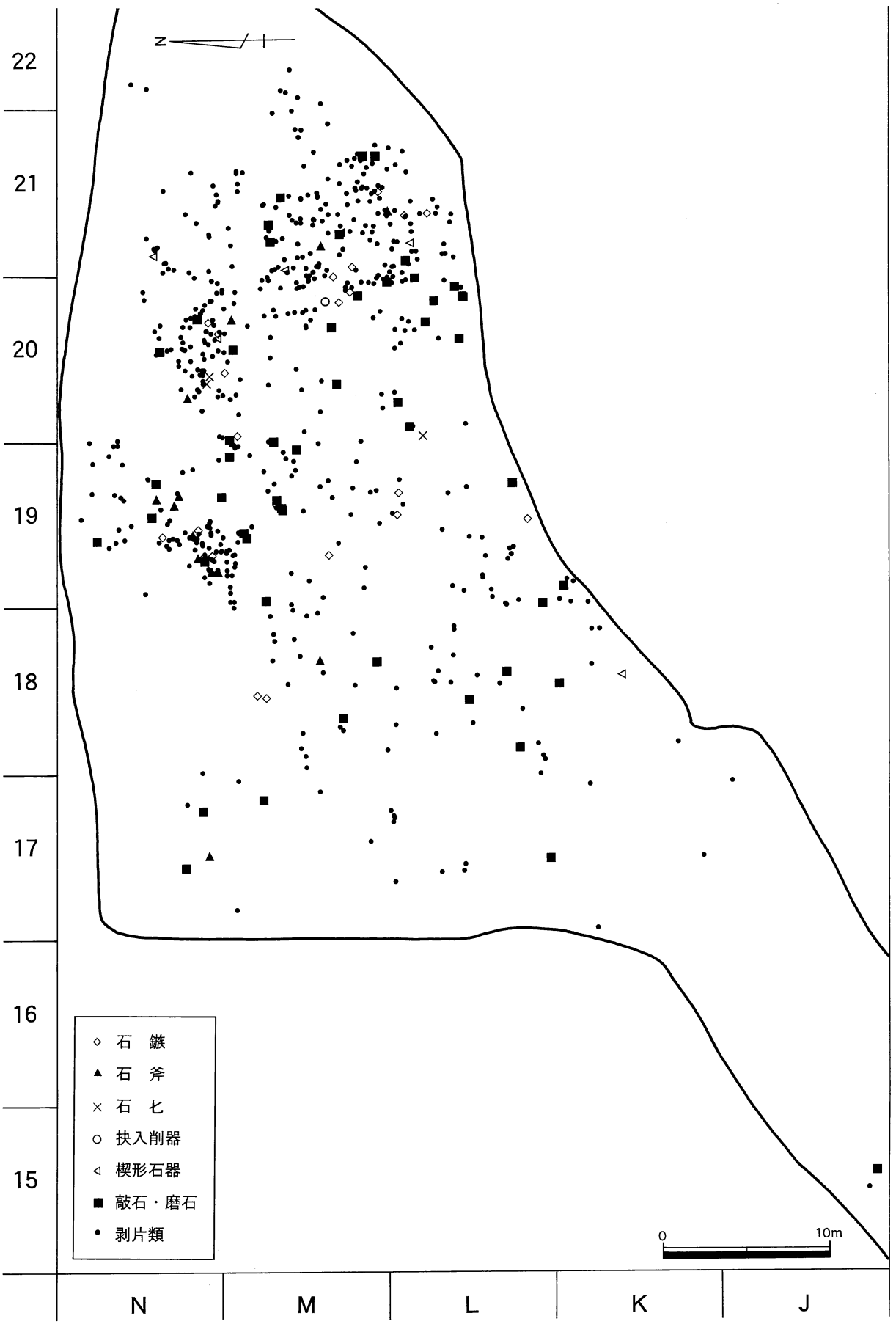
図版番号	層	時期	分類	色調	胎土	文様、調整等
1	3	早期	Ⅰ	にぶい橙色	石英、輝石少、繊維	山形文を横位に帯状施文
2	3	早期	Ⅰ	灰黄褐色	石英、長石、輝石少、金雲母	山形文を縦位に帯状施文したのち、口縁部に横位に施文
3	3	早期	Ⅰ	浅黄橙色	石英、長石、赤色粒子少、砂質	山形文を横位に帯状施文
4	3	早期	Ⅰ	黄橙色	石英、長石、輝石、金雲母	山形文を縦位に帯状施文
5	3	早期	Ⅰ	浅黄橙色	石英、長石、金雲母、赤色粒子少、砂質	山形文を縦位に帯状施文
6	3	早期	Ⅰ	にぶい黄橙色	石英、長石、金雲母少	山形文を縦位に帯状施文
7	3	早期	Ⅰ	浅黄橙色	石英、長石、金雲母、赤色粒子少、砂質	山形文を縦位に帯状施文
8	3	早期	Ⅰ	にぶい黄橙色	石英、輝石、金雲母少	山形文を縦位に帯状施文
9	2	早期	Ⅰ	にぶい黄橙色	石英、長石、輝石、金雲母少、繊維、白色岩片	粗大な楕円文を縦位に密接施文、ウラ面擦痕
10	2	早期	Ⅱ	にぶい赤褐色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	オモテ面、ウラ面は口縁部のみにRの撚糸文
11	2	早期	Ⅱ	橙色	石英、長石、輝石少、繊維	Rの撚糸
12	2	早期	Ⅱ	浅黄橙色	石英、長石、輝石、繊維	撚り不明、走行が不規則
13	3	早期	Ⅱ	明赤褐色	長石、輝石、安山岩片少、繊維	撚り不明
14	2	早期	Ⅱ	橙色	輝石、白色岩片、繊維	Rの撚糸
15	3	早期	Ⅱ	にぶい赤褐色	石英、長石、黒色粒子、繊維	Lの撚糸
16	2	早期	Ⅱ	橙色	石英、白色岩片少、繊維	Rの撚糸
17	3	早期	Ⅱ	橙色	輝石、安山岩片少、繊維	撚り不明
18	2	早期	Ⅱ	橙色	輝石、白色岩片、繊維	Rの撚糸文
19	2	早期	Ⅱ	明赤褐色	石英、輝石、赤色粒子少、繊維	網目状の撚糸文、撚り不明
20	2	早期	Ⅱ	橙色	石英、輝石、繊維	網目状の撚糸文、撚り不明
21	3	早期	Ⅱ	明赤褐色	石英、輝石、安山岩片少、繊維	網目状の撚糸文、撚り不明
22	3	早期	Ⅱ	にぶい黄橙色	石英、繊維	Rの網目状の撚糸文
23	3	早期	Ⅱ	赤色	石英、輝石、繊維	撚り不明
24	3	早期	Ⅱ	にぶい黄橙色	石英、長石、黒色粒子、繊維	撚り不明
25	3	早期	Ⅱ	黒褐色	石英、長石、輝石、繊維	網目状の撚糸文、撚り不明
26	3	早期	Ⅱ	橙色	輝石少、赤色粒子少	網目状の撚糸文、撚り不明
27	2	早期	Ⅱ	明赤褐色	輝石少、繊維	網目状の撚糸文、撚り不明
28	3	早期	Ⅱ	にぶい赤褐色	石英、輝石、金雲母、繊維	網目状の撚糸文、撚り不明
29	3	早期	Ⅱ	橙色	石英、輝石、白色岩片多、繊維	Rの網目状の撚糸文
30	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石多、安山岩片少、繊維	Rの絡状体を帯状に引きずり、その上に絡状体圧痕文を施す
31	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、繊維少	Rの絡状体圧痕文、口縁部に施文あり
32	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片少、繊維	撚り不明、口縁部、ウラ面条痕文
33	2	早期	Ⅲ－a	橙色	長石、黒色粒子少、繊維	撚り不明、口縁部
34	3	早期	Ⅲ－a	橙色	長石、黒色粒子少、白色岩片少、繊維	撚り不明、口縁部
35	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石、白色岩片多、繊維少	lの絡状体圧痕文
36	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	Rの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
37	3	早期	Ⅲ－a	にぶい黄橙色	石英、長石、黒色粒子・白色岩片少、繊維	Rの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
38	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石少、白色粒子多、繊維	Lの絡状体圧痕文、口縁部
39	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石、繊維	撚り不明、口縁部、ウラ面条痕文
40	3	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	石英、輝石、黒色粒子繊維	撚り不明、ウラ面条痕文
41	3	早期	Ⅲ－a	橙色	黒色粒子、白色岩片、繊維	Rの絡状体圧痕文
42	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、黒色・白色粒子少、繊維	Rの絡状体圧痕文、口縁部、ウラ面条痕文
43	2	早期	Ⅲ－a	にぶい褐色	石英、長石少、白色岩片少、繊維	口縁部にRの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
44	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、白色岩片少、繊維	rの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
45	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片少、繊維	Lの絡状体圧痕文
46	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文、器表面に黒色のスス状のもの付着
47	3	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	石英、長石、輝石、磁鉄鉱少、白色岩片多、繊維	Lの絡状体圧痕文
48	2	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石少、白色岩片少、繊維	撚り不明
49	3	早期	Ⅲ－a	明黄褐色	石英、長石多、白色岩片少、繊維	撚り不明
50	3	早期	Ⅲ－a	にぶい赤褐色	石英、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文
51	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石少、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文
52	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	Lの絡状体圧痕文
53	2	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	石英、長石、輝石、繊維	Rの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
54	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、黒色粒子少、繊維	lの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
55	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、黒色粒子少、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
56	2	早期	Ⅲ－a	にぶい赤褐色	石英、長石、黒色粒子少、繊維	Lの絡状体圧痕文を斜方向に施文、ウラ面条痕文
57	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、繊維	撚り不明、ウラ面条痕文
58		早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、繊維	Rの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
59	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文
60	3	早期	Ⅲ－a	灰黄褐色	石英、長石少、黒色粒子多、白色粒子少、繊維	撚り不明、ウラ面擦痕
61	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文
62	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、黒色粒子、白色岩片少、繊維	lの絡状体圧痕文
63	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	Rの絡状体圧痕文
64	2	早期	Ⅲ－a	褐灰色	石英、輝石黒色粒子少、白色岩片多、繊維	撚り不明
65		早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、長石、白色岩片少、繊維少	Lの絡状体圧痕文、ウラ面擦痕
66	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、白色岩片少、繊維	rの絡状体圧痕文、ウラ面条痕文
67		早期	Ⅲ－a	橙色	石英、黒色粒子、白色岩片少、繊維	撚り不明
68	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、長石、輝石、繊維	Rの絡状体圧痕文
69	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片少、繊維	撚り不明
70	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片少、繊維	撚り不明
71	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石、白色岩片多、繊維少	Rの絡状体圧痕文

図版番号	層	時期	分類	色調	胎土	文様、調整等
72	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、長石少、白色岩片少、繊維	撚り不明
73	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文
74	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、安山岩片少、繊維	撚り不明
75	2	早期	Ⅲ－a	にぶい赤褐色	石英、黒色粒子、赤色粒子少、繊維	Rの絡状体圧痕文
76	3	早期	Ⅲ－a	にぶい赤褐色	石英、長石少、輝石、繊維	Rの絡状体圧痕文、回転している
77	2	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	Lの絡状体圧痕文を斜方向に転がす、半回転、ｳﾗ面擦痕
78	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石、白色岩片多、繊維少	撚り不明、ウラ面剥離
79	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、黒色粒子、安山岩片、繊維	撚り不明
80		早期	Ⅲ－a	明黄褐色	石英、長石、黒色粒子多、繊維	Rの絡状体圧痕文
81	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文
82	3	早期	Ⅲ－a	にぶい黄橙色	石英、長石、白色岩片多、繊維	撚り不明
83	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、長石、黒色粒子少、白色岩片多、繊維	撚り不明
84	3	早期	Ⅲ－a	にぶい赤褐色	石英、輝石少、白色岩片多、繊維	Lの絡状体圧痕文
85	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石少、白色岩片多、繊維	撚り不明
86	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石少、輝石、繊維少	Rの絡状体圧痕文
87	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、繊維	撚り不明
88	2	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、長石、黒色粒子少、繊維	Rの絡状体圧痕文、ｳﾗ面条痕文
89	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	Rの絡状体圧痕文
90	2	早期	Ⅲ－a	にぶい赤褐色	石英、輝石、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文、ｳﾗ面条痕文
91	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、長石、輝石少、繊維	Lの絡状体圧痕文、ｳﾗ面擦痕
92	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石少、繊維	Rの絡状体圧痕文、ｳﾗ面条痕文
93	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文を斜方向に施文、口縁部には1条の細隆線を配し、その上を絡状体で押さえる、口唇部には刻み、ウラ面条痕文
94	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片多、繊維	Rの絡状体圧痕文を斜方向に施文、口縁部には2条の細隆線を配し、その上を絡状体で押さえる、口唇部には刻み、ウラ面条痕文
95	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、黒色粒子、白色岩片少、繊維	口縁部に細隆線を配し、絡状体圧痕文を斜位に施文する、ｳﾗ面条痕文
96	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維少	口縁部に細隆線を配し、絡状体圧痕文を斜位に施す、波状口縁、ｳﾗ面条痕文
97	2	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	石英、長石、黒色粒子・白色岩片少、繊維	口縁部に細隆線を配し、横位の細隆線上にはRの絡状体圧痕文を施す、ｳﾗ面条痕文
98	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、長石、黒色粒子・白色岩片少、繊維	口縁部に細隆線を配し、口唇部に刻み
99	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	口縁部に細隆線を配し、rの絡状体を施す
100	2	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	口縁部の細隆線上に絡状体圧痕文を施す、撚り不明
101	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、輝石、黒色粒子、安山岩片、繊維	細隆線上に1の絡状体圧痕文を施す
102	3	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	石英、長石、輝石、繊維	口縁部に細隆線を配し、上に絡状体圧痕文を施す、撚り不明
103	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、黒色粒子少、繊維	Rの絡状体圧痕文、1条の細隆線上にも施文、ｳﾗ面条痕文
104	3	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	2本の細隆線を配し、その下部にLの絡状体圧痕文を施す、口唇部に刻みあり、ｳﾗ面条痕
105	3	早期	Ⅲ－a	明赤褐色	輝石、白色岩片少、繊維	断面三角形の細隆線を挟んで上下にLの絡状体圧痕文を施す
106	3	早期	Ⅲ－a	橙色	石英、白色粒子少、黒色粒子多、繊維少	ゆるやかな波状口縁を呈し、口縁部に細隆線を配し、その下に絡状体?による縦位の沈線
107	3	早期	Ⅲ－a	にぶい橙色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	口縁部に沈線を格子目状に施し、細隆線で区画してRの絡状体圧痕文を配す、ｳﾗ面条痕文
108	3	早期	Ⅲ－a	にぶい黄橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片多、繊維	半回転させたRの絡状体圧痕文を横位に施文した後、沈線を施す
109	3	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、白色粒子少、黒色粒子多、繊維少	隆線
110	3	早期	Ⅲ－b	にぶい褐色	石英、長石、輝石少、白色岩片多、繊維	隆線
111	3	早期	Ⅲ－b	にぶい褐色	輝石、黒色粒子多、白色岩片少、繊維	沈線文、口縁部
112	2	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片少、繊維	集合沈線、口縁部
113	3	早期	Ⅲ－b	橙色	黒色粒子、白色岩片多、繊維	集合沈線、口唇部刻み、ｳﾗ面条痕文
114	3	早期	Ⅲ－b	橙色	黒色粒子、白色岩片多、繊維	沈線文
115	3	早期	Ⅲ－b	浅黄橙色	石英、黒色粒子少、繊維	沈線文
116	2	早期	Ⅲ－b	にぶい橙色	石英、長石、黒色粒子、繊維	沈線文
117	2	早期	Ⅲ－b	浅黄橙色	石英、黒色粒子少、繊維	沈線文
118		早期	Ⅲ－b	にぶい黄褐色	石英、白色岩片少、繊維	沈線文
119	3	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、黒色粒子、白色岩片少、繊維	沈線文
120	3	早期	Ⅲ－b	にぶい橙色	石英、長石、黒色粒子少、繊維	沈線文
121	3	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、長石少、黒色粒子多、繊維	沈線文、ｳﾗ面条痕文
122	3	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、黒色粒子少、繊維	格子目状の沈線文、口唇部に刻みあり
123	3	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、黒色粒子、白色岩片少、繊維	集合沈線
124	2	早期	Ⅲ－b	褐灰色	石英、輝石少、繊維	2本単位の沈線文、口縁部
125	3	早期	Ⅲ－b	にぶい橙色	石英、黒色粒子少、繊維	2本単位の沈線文
126	2	早期	Ⅲ－b	にぶい赤褐色	石英、黒色粒子少、繊維	沈線文
127	3	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、長石、輝石少、繊維	櫛歯状工具による集合沈線文
128	3	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片少、繊維	櫛歯状工具による粗い集合沈線上をﾅﾃﾞ消して矢羽状のモチーフを配す
129	2	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、長石、輝石、白色岩片少、繊維	横方向の隆線に、矢羽状の沈線
130	2	早期	Ⅲ－b	橙色	石英、黒色粒子少、繊維	隆線＋沈線文

図版番号	層	時期	分類	色調	胎土	文様、調整等
131	2	早期	Ⅲ－C	にぶい橙色	石英、輝石多、金雲母少、繊維	半截竹管による2ヶ単位の刺突文、口唇部に刻みあり
132	2	早期	Ⅲ－C	橙色	石英、黒色粒子、白色岩片少、繊維少	貝殻腹縁による刺突を口縁部に施す、オモテ面・ウラ面条痕文、胴部にやや膨らみをもつ
133	3	早期	Ⅲ－d	橙色	石英、輝石少、黒色粒子多、繊維少	貝殻条痕文（モチーフあり）
134	3	早期	Ⅲ－d	橙色	石英、輝石少、黒色粒子多、白色岩片、繊維	貝殻条痕文
135	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、輝石少、白色岩片多、繊維多	貝殻条痕文
136	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石少、白色岩片少、繊維	貝殻条痕文
137	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、輝石少、黒色粒子多、白色岩片多、繊維	貝殻条痕文、波状口縁
138	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石、輝石、赤粒子少、繊維多	貝殻条痕文、口唇部に刻み有り
139	3	早期	Ⅲ－d	にぶい黄褐色	輝石、磁鉄鉱、白色岩片、繊維多	貝殻条痕文、口縁部
140	3	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石少、黒色粒子少、繊維多	貝殻条痕文
141	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石、輝石、赤粒子少、繊維多	貝殻条痕文
142	2	早期	Ⅲ－d	赤褐色	石英、長石、輝石少、黒色粒子、白色岩片少、繊維多	貝殻条痕文
143	2	早期	Ⅲ－d	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片少、繊維多	貝殻条痕文
144	3	早期	Ⅲ－d	にぶい褐色	石英、輝石少、黒色粒子少、白色岩片少、繊維多	貝殻条痕文
145	3	早期	Ⅲ－d	にぶい褐色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	貝殻条痕文
146	3	早期	Ⅲ－d	橙色	石英、長石少、輝石、白色岩片少、繊維多	貝殻条痕文
147	2	早期	Ⅲ－d	明黄褐色	石英、長石、輝石少、黒色粒子多、繊維	貝殻条痕文
148	3	早期	Ⅲ－d	橙色	石英、長石、輝石少、黒色粒子多、繊維少	貝殻条痕文、器厚は薄い
149	3	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英少、輝石、黒色粒子少、白色岩片、繊維多	貝殻条痕文
150	2	早期	Ⅲ－d	橙色	石英、輝石、磁鉄鉱、白色岩片少、繊維	貝殻条痕文
151	3	早期	Ⅲ－d	にぶい褐色	石英、輝石、白色岩片少、繊維	貝殻条痕文
152	3	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石、輝石少、黒色粒子多、繊維	貝殻条痕文
153	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石、輝石少、黒色粒子多、繊維	貝殻条痕文
154	3	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英少、黒色粒子少、繊維多	貝殻条痕文、屈曲部を有する
155	3	早期	Ⅲ－d	明黄褐色	石英、長石少、黒色粒子多、繊維多	貝殻条痕文
156	3	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、輝石、黒色粒子少、繊維	貝殻条痕文
157	2	早期	Ⅲ－d		石英、輝石、黒色粒子少、繊維	貝殻条痕文
158	3	早期	Ⅲ－d	にぶい褐色	石英、輝石、黒色粒子多、白色岩片少、繊維多	貝殻条痕文
159	3	早期	Ⅲ－d	にぶい赤褐色	石英少、黒色粒子、繊維多	貝殻条痕文はウラ面が顕著
160	3	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、輝石少、黒色粒子多、繊維多	貝殻条痕文
161	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石、輝石少、繊維多	貝殻条痕文
162	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、長石、輝石少、黒色粒子多、白色岩片少、繊維多	貝殻条痕文
163	3	早期	Ⅲ－d	明褐色	石英、黒色粒子、白色岩片、繊維多	貝殻条痕文
164	2	早期	Ⅲ－d	明赤褐色	石英、黒色粒子少、繊維多	貝殻条痕文
165	2	早期	Ⅳ	明赤褐色	石英、長石少、輝石、白色岩片多、砂質	口縁部、無文
166	2	早期	Ⅳ	明褐色	石英、長石、輝石、黒色粒子少、白色岩片少、砂質	無文
167	3	早期	Ⅳ	にぶい褐色	石英、長石、輝石少、砂質	口縁部、無文
168	3	早期	Ⅳ	黄褐色	石英少、輝石、黒色粒子、白色岩片多、砂質	口縁部、無文
169	3	早期	Ⅳ	暗灰黄色	石英、長石少、輝石多、砂質	口縁部、無文
170	2	早期	Ⅳ	褐色	石英、長石多、輝石、金雲母少、繊維、砂質	口縁部、無文
171	3	早期	Ⅳ	明赤褐色	石英少、黒色粒子、繊維多	口縁部、無文
172	3	早期	Ⅳ	褐色	黒色粒子、白色岩片少、繊維	口縁部、無文
173	3	早期	Ⅳ	にぶい赤褐色	輝石、黒色粒子少、白色岩片、繊維	口縁部、無文
174	3	早期	Ⅳ	にぶい褐色	石英少、輝石少、白色岩片、繊維	補修孔有り、口縁部、無文
175	3	早期	Ⅳ	明赤褐色	石英、黒色粒子、白色岩片少、繊維	口縁部、無文
176	3	早期	Ⅳ	明黄褐色	石英、長石少、白色岩片、繊維	尖底
177	3	早期	Ⅳ	明赤褐色	石英、長石、輝石少、白色岩片、繊維	尖底
178	3	早期	Ⅳ	橙色	石英少、白色岩片、繊維	尖底
179	3	早期	Ⅳ	橙色	石英少、白色岩片、繊維	尖底
180	2	早期	Ⅳ	明赤褐色	石英、長石、輝石少、繊維	尖底
181	2	早期	Ⅳ	橙色	石英、長石、輝石、金雲母少、砂質	平底（尖底のものに扁平な円形の粘土を張ることで平底とする）
182	3	早期	Ⅳ	橙色	石英少、白色岩片、繊維	平底
183	3	早期	Ⅳ	橙色	石英、輝石少、白色岩片、繊維	平底
184	3	早期	Ⅳ	橙色	石英少、白色岩片、繊維	平底
185	2	早期	Ⅳ	橙色	石英少、白色岩片、繊維	平底
186	3	早期	Ⅳ	橙色	石英、白色岩片、赤粒子少、繊維	平底
187	3	早期	Ⅳ	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片、繊維	平底
188	2	前期	Ⅴ	にぶい黄橙色	石英、長石、輝石少、繊維多	LRの縄文地、口縁部に2列の半截竹管の刺突文
189	2	前期	Ⅵ－a	にぶい黄橙色	石英多、輝石少、金雲母、砂質	LRの縄文地に竹管の円形刺突文、口唇部・口縁部は半截竹管の刺突
190	3	前期	Ⅵ－b	明赤褐色	石英、輝石少、金雲母多、砂質	RLの縄文地に2本単位の浮線文
191	2	前期	Ⅵ－b	にぶい橙色	石英、長石、輝石少、金雲母多	LRの縄文地に2本単位の浮線文、ｳﾗ面ﾐｶﾞｷ
192	3	前期	Ⅵ－b	明赤褐色	石英、輝石少、金雲母多	地文なし、細い隆線、全面ﾐｶﾞｷ浅鉢
193	2	前期	Ⅵ－b	明赤褐色	石英多、長石少、輝石	地文なし、浮線上に刻み、全面ﾐｶﾞｷ、浅鉢

図版番号	層	時期	分類	色調	胎土	文様、調整等
194	3	前期	Ⅵ－b	明赤褐色	石英多、長石少、輝石	RLの縄文地に沈線による木の葉状文を配し文様外は縄文を磨り消す、2本単位の浮線上には刻みあり、波状口縁で口唇部には刻みあり
195	2	前期	Ⅵ－b	橙色	石英多、長石少、輝石	上半部は波状にうねる連続した爪形文、沈線区画の下部は貝の腹縁による刺突、興津式の要素を含む
196	2	前期	Ⅵ－b	にぶい黄褐色	石英多、輝石少、金雲母少	RLの回転縄文を地文としてLの押圧縄文と刺突、ウラ面指頭痕
197	3	前期	Ⅵ－c	明赤褐色	石英、長石少、輝石少、黒色粒子	口縁部に三角形の削り取りと貼付文、胴部には2ヶ単位の豆粒大の貼付文、地文は半截竹管による沈線文
198	2	前期	Ⅵ－c	明赤褐色	石英、長石少、輝石少、黒色粒子	半截竹管による沈線文
199	3	前期	Ⅵ－c	明赤褐色	石英、輝石少、金雲母多	半截竹管による沈線文
200	2	前期	Ⅵ－c	にぶい橙色	石英、輝石少、金雲母多	半截竹管による沈線文
201	3	前期	Ⅵ－c	にぶい黄褐色	石英、輝石少、金雲母多	半截竹管による沈線文
202	2	前期	Ⅵ－c	にぶい橙色	石英多、長石少、輝石、黒色粒子、白色岩片少	半截竹管による沈線文
203	2	前期	Ⅵ－c	明赤褐色	石英、輝石少、金雲母多	半截竹管による沈線文
204	3	前期	Ⅵ－c	明赤褐色	石英、輝石少、金雲母多	半截竹管による沈線文、底部
205	2	前期	Ⅵ－c	明赤褐色	石英多、長石少、輝石	半截竹管による沈線文、底部
206	2	前期	Ⅵ－d	にぶい黄褐色	石英、輝石少、金雲母多	RLの縄文、口縁部は貼付、隆線が配され隆線上にも縄文が施文
207	2	前期	Ⅵ－d	にぶい橙色	石英多、長石少、輝石、黒色粒子、白色岩片少	LRの縄文
208	2	前期	Ⅵ－d	にぶい橙色	石英、長石多、輝石少、金雲母	前段Rの多条縄文、波状口縁
209	2	前期	Ⅵ－d	にぶい褐色	石英、輝石少、金雲母多	RLの縄文
210	2	前期	Ⅵ－d	にぶい赤褐色	石英、長石多、輝石、磁鉄鉱、金雲母少	Lの撚糸文?
211	2	前期	Ⅵ－d	橙色	石英、長石、輝石少、金雲母多	RLの縄文?
212	2	前期	Ⅵ－d	橙色	石英、長石少、黒色粒子少	RLの縄文?
213	2	前期	Ⅵ－d	明赤褐色	石英、長石少、黒色粒子少	RLの縄文?
214	3	前期	Ⅵ－d	明赤褐色	石英、長石少、黒色粒子少	RLとLRの羽状縄文（結束なし）
215	3	前期	Ⅵ－d	にぶい赤褐色	石英、長石多、輝石、金雲母少	LRの羽状縄文（結束なし）
216	2	前期	Ⅵ－d	にぶい褐色	石英、輝石少、金雲母多	RLの縄文
217	3	前期	Ⅵ－d	灰黄褐色	石英、輝石少、金雲母多	RLの縄文
218	2	前期	Ⅵ－d	褐色	石英、輝石少、黒色粒子多	RLとLRの羽状縄文（結束なし）
219	2	前期	Ⅵ－d	にぶい黄褐色	石英、輝石少、金雲母多	RLの縄文
220	2	前期	Ⅵ－d	明赤褐色	石英、輝石少、金雲母多	RLの縄文
221	2	前期	Ⅵ－d	明赤褐色	石英、長石多、輝石、磁鉄鉱少	RLR?の複節縄文
222	2	前期	Ⅵ－d	にぶい橙色	石英、長石、黒色粒子少、砂質	口縁部は2段に貼り付けられており、全面にLの撚糸文
223	3	前期	Ⅶ	明赤褐色	石英、輝石多、金雲母	集合条線を地文に三角形の削り取りが施される
224	2	中期	Ⅷ－a	明赤褐色	石英、長石多、輝石少	三角形と四角形の横区画文を、連続爪形文と三角押文とで描く
225	2	中期	Ⅷ－a	にぶい赤褐色	石英、長石多、輝石少	三角形と四角形の横区画文を、連続爪形文と三角押文とで描く
226	2	中期	Ⅷ－a	にぶい赤褐色	石英、長石、輝石多少、白色岩片少	口縁部を中心に隆帯を施す
227	2	中期	Ⅷ－a	にぶい黄橙色	石英、長石、輝石多少、白色岩片少	口縁部の外側に三角押文・波状沈線を配する、浅鉢
228	2	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石少、輝石少、白色岩片	ミミヅク把手、RLの縄文を地文とし半截竹管による押引き、連続爪形文で三角形の区画を施す
229	2	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、黒色粒子、白色岩片少	口縁部に三角区画文を配し、隆帯脇を連続爪形文で押さえる、区画内は三叉文、玉抱き三叉文で充填、胴部は横区画を集合沈線で充填
230	2	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、黒色粒子、白色岩片少	三角区画文の隆帯脇に連続爪形文を配し、中心には三叉文を持つ胴部は集合沈線で満たす
231	3	中期	Ⅷ－b	赤褐色	石英長石、輝石少	口縁部の内側に6単位の楕円形の区画内に連続爪形文と波状の三角押文、浅鉢
232	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、輝石少、金雲母少、白色岩片少	RLの縄文を地文に、ミミヅク把手、波状沈線、連続爪形文を施す
233	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、黒色粒子少	連続爪形文、口縁部
234	3	中期	Ⅷ－b	にぶい黄橙色	石英、黒色粒子少	連続爪形文、口縁部
235	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片	RLの縄文を地文に連続爪形文
236	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片	連続爪形文、半截竹管による半円形の刺突
237	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、輝石多、金雲母少	楕円横区画文、連続爪形文
238	2	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、黒色粒子、白色岩片少	三角区画文の隆帯脇に連続爪形文を配し、中心には三叉文を持つ胴部は沈線で満たす
239	2	中期	Ⅷ－b	にぶい赤褐色	石英多、輝石、金雲母少	連続爪形文
240	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英多、輝石、金雲母少	連続爪形文
241	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英多、輝石、金雲母少	連続爪形文、三叉文
242	2	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英多、輝石少、金雲母	楕円横区画文、連続爪形文、波状沈線
243	2	中期	Ⅷ－b	にぶい赤褐色	石英多、輝石、金雲母、白色岩片少	楕円横区画文、連続爪形文、波状沈線
244	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英多、輝石、金雲母少、白色岩片少	楕円横区画文の隆帯横を連続爪形文でおさえ、波状沈線を施す
245	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石少、白色岩片多	楕円横区画文、連続爪形文、三角押文

図版番号	層	時期	分類	色調	胎土	文様、調整等
246	2	中期	Ⅷ－b	にぶい赤褐色	石英多、輝石、金雲母少	楕円横区画文、連続爪形文
247	3	中期	Ⅷ－b	にぶい赤褐色	石英多、金雲母、黒色粒子少	楕円横区画文、連続爪形文
248	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石少、輝石少、白色岩片少	連続爪形文
249	2	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、輝石少、黒色粒子多、繊維多	連続爪形文
250	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、輝石少、黒色粒子多、繊維多	RLの縄文を地文に連続爪形文
251	2	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石、輝石少	連続爪形文
252	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、黒色粒子少	三角横区画文の隆帯脇を連続爪形文で押さえる、三叉文、沈線文
253	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石、輝石少、白色岩片多	楕円横区画文、連続爪形文
254	3	中期	Ⅷ－b	にぶい赤褐色	石英、黒色粒子少	楕円横区画文、連続爪形文、沈線
255	2	中期	Ⅷ－b	にぶい黄橙色	石英、黒色粒子少	浅鉢、半截竹管による押引き、口縁部の外側に連続爪形文
256	2	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石多、輝石少、金雲母	楕円形横区画文、隆帯上に刻み有り
257	2	中期	Ⅷ－b	にぶい赤褐色	石英、長石多、輝石少、金雲母少	渦巻文
258	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石、輝石少、白色岩片	隆帯上に刻み有り
259	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英少、輝石多、白色岩片	沈線による区画のなかを沈線によって充填
260	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石少、輝石少、白色岩片多	横区画内沈線充填、下半部RLの縄文
261	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石少、輝石少、白色岩片多	縦区画文、隆帯上に刻み有り
262	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石、輝石多、白色岩片少	RLの縄文
263	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石、輝石少	RLの縄文
264	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、黒色粒子少	RLの縄文
265	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石、輝石少	RLの縄文、ミニチュア土器
266	3	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、黒色粒子少、白色岩片	前段Lの多条縄文の回転縄文
267	2	中期	Ⅷ－b	橙色	石英、長石、輝石少、金雲母	Lの撚糸文
268	3	中期	Ⅷ－b	明赤褐色	石英、長石多、輝石少、金雲母少	Lの撚糸文
269	3	中期	Ⅷ－c	明黄褐色	石英、長石多、輝石、金雲母少	顔面把手
270	3	中期	Ⅷ－c	明黄褐色	石英、長石、輝石少、白色岩片	楕円区画の隆帯上に刻み
271	3	中期	Ⅷ－c	明赤褐色	石英、長石、輝石少、白色岩片	蛇把手
272	2	中期	Ⅷ－c	明赤褐色	石英、長石、輝石多	口縁部に弧状の隆帯を集合
273	2	中期	Ⅷ－c	明黄褐色	石英、長石少、輝石多	口縁部に弧状の隆帯を集合
274	2	晩期	Ⅸ	明赤褐色	石英、長石多、輝石少	沈線の区画内にRLの縄文、沈線の交点に豚鼻状の瘤文、平縁の深鉢



第45図　石器平面分布

2　石　器

石器の帰属する時期に関しては、包含層の堆積が不安定であったことと、斜面堆積であったこととで分離できていない。また土器の出土層位を見ると、早期～中期の遺物がほとんどレベル差を持たずに検出されていることが分かり、出土層による分類も意味をなさないと考えられる。よってここでは縄文時代早期～中期の遺物をまとめて器種別に扱うこととする。

（1）尖頭器

１区の頂部、Ｎ19グリッドより１点出土している。１はガラス質黒色安山岩製で、縄文時代草創期の遺物と考えられる。先端部は欠損しており、基部は丸く、加工は素材剥片の剥離面を残すような非常に粗いものである。

（2）石　鏃

未製品、欠損品を含めて27点が出土している。２は基部にＵ字状の抉りを持つもので、早期の石鏃の可能性がある。５は貝殻状の剥片を素材としたもので、ブランティングによく似た急角度の調整を加えることで整形したもので、非常に小型のものである。12は角状の脚部を持つ鍬形鏃でガラス質黒色安山岩製である。７はヒンジフラクチャーを起こした剥片の末端部を打面として側縁部の調整をおこなう。未製品か。13～19は欠損品、20～28は未製品もしくは未製品の一部である。21は分厚い剥片を素材としており、掻器の可能性もあるが、下部に抉りを入れようとした痕跡があるので、石鏃の未製品とした。

（3）石　匕

５点出土している。29はガラス質黒色安山岩の剥片を素材にし、背面は面的な調整が施され、打面を取り去っている。30はホルンフェルスの剥片を素材とし、剥片の形状をあまり変えることなく抉り部と刃部を削出する。打面が残る。31は頁岩製で、頸部の抉部を削出しようとした形跡がある。また剥片の末端部には使用痕がある。石匕の未製品と考えている。32は圧砕岩製の両面加工のもので、刃部は裏面が最終調整面となっており、刃部再生の痕跡が残る。33は硬質細粒凝灰岩製で、薄手の剥片を素材としている。右縁辺部は刃部をつくった後に節理によって折れているが、この折面を打面として調整を再び加えている。

（4）抉入削器・楔形石器

34は剥片の縁辺部にノッチ部分を設けたもので、欠損品と考えられる。35～43は楔形石器で、上下、あるいは左右に対称的にダメージが観察されるものである。石材は39がガラス質黒色安山岩である他は、全て黒曜石である。

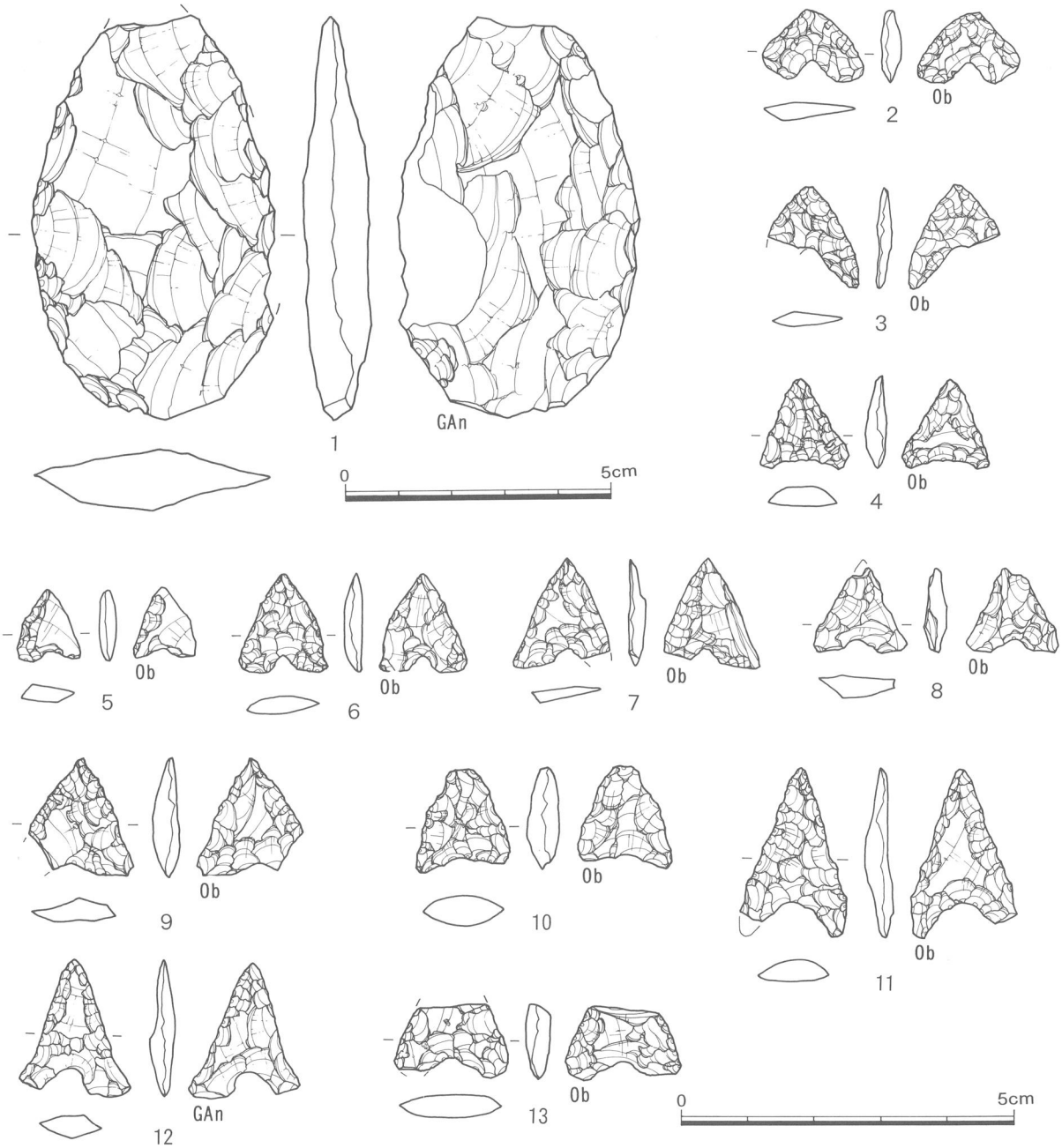
（5）石　斧

磨製石斧が３点（44～46）、打製石斧（47～59）が13点出土している。44は珪質細粒圧砕岩製で、擦切技法で制作される擦切磨製石斧である。部分的に敲打痕が残るが、ほぼ全面が磨かれており、側縁部には制作時の溝が観察できる。また挿図中胴部網掛け部は装着痕で、わずかに面が凸凹しているのが観察できる。刃部には使用痕と考えられる光沢あり。45は欠損品で先端部のみが残る。乳棒状磨製石斧と考えられ、刃部には使用痕が観察される。46は未製品で扁平な礫を素材とし、上下部を打って整形する。刃部や側縁部を中心に擦痕も観察できる。47は分割した礫を素材とし、その縁辺部に調整を加えているもので、裏面には分割面をそのまま残すため断面形は半月形を呈する。刃部には原礫面が残り、先端部付近には擦痕が観察されるが、使用痕であるかは判然としない。48～56は短冊形の打製石斧で、そのほとんどが欠損品である。48はホルンフェルスの扁平な剥片を素材としたもので、比較的粗く調整したのち、縁辺部に細かい剥離を加えて形を整えている。同一方向の節理割れを起こしており、使用痕等は観察されない。49は砂岩製で両刃の石斧と考えられる。側縁部のエッジ部分は敲打によって潰されている。着柄のためというよりも、握るためのものと考えられる。50は白雲母片岩製である。石の目に沿って剥

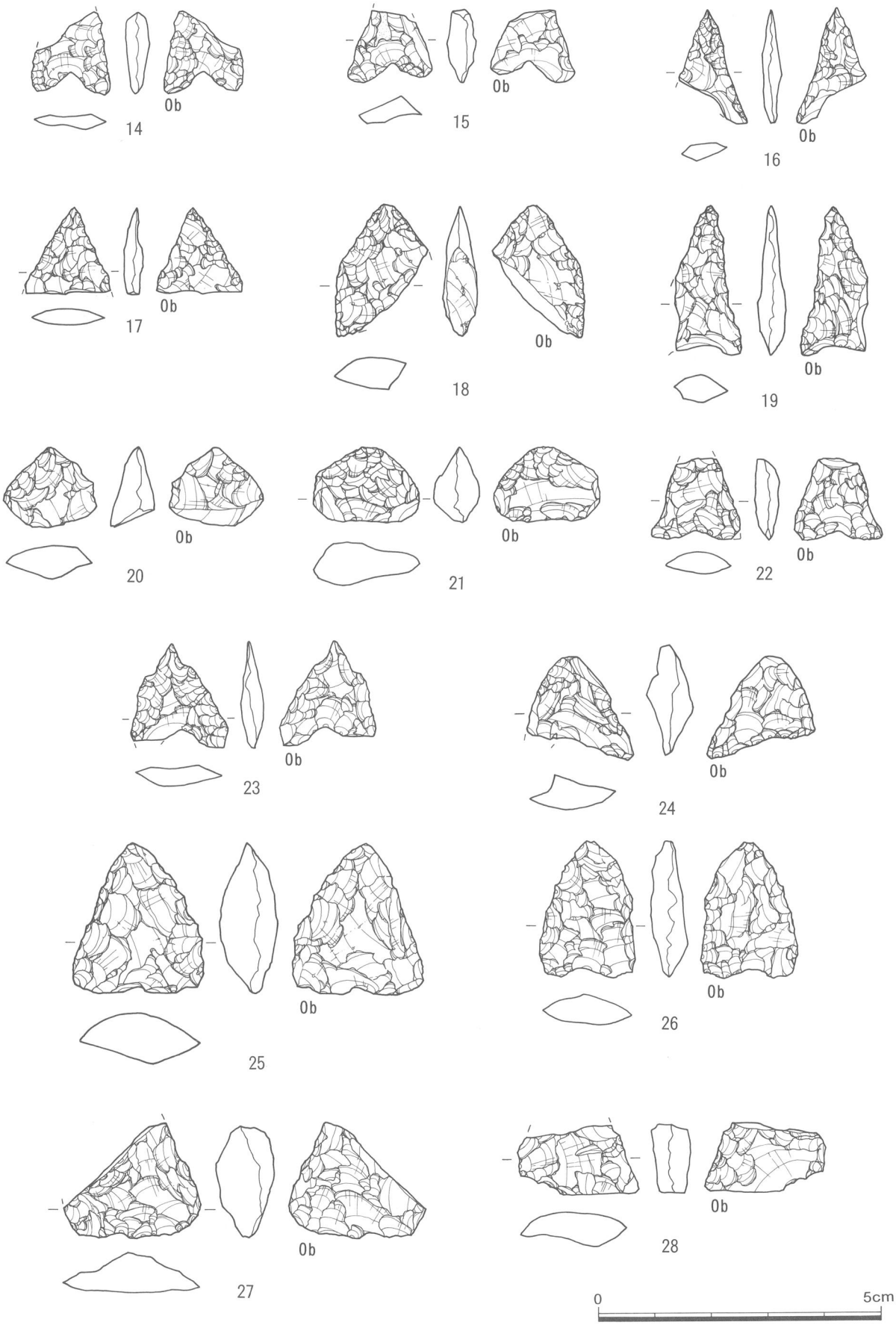
離された、板状の剥片を素材として、縁辺部に調整を加えただけのものである。風化が激しい。52はホルンフェルスの原礫面が残る剥片を素材としたものである。節理に沿って割れている。59は原礫面をもつ剥片を素材とした小型の打製石斧である。

（6）敲石・磨石・凹石

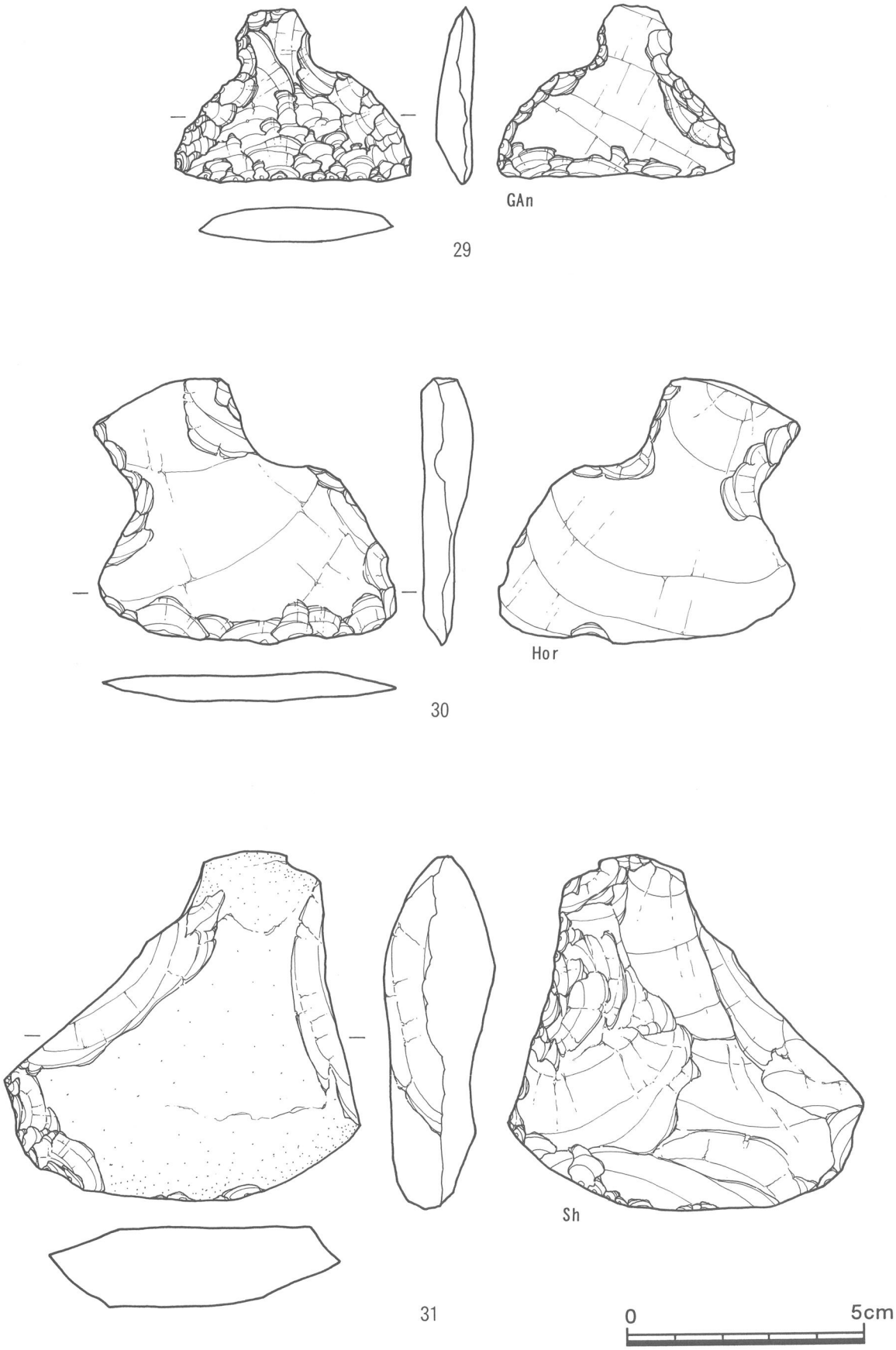
64点が出土しており、複合石器も多い。60～97は敲石として分類したものである。60～74は棒状の礫の上下端に敲打痕を残すもので、中でも60～65、66、67は石器制作のためのハンマーストーンを思わせるように、比較的敲打部が尖っている。75～97は扁平な礫を素材として、敲打痕が縁辺部に及ぶ。98～101は磨石、102～105は磨石、敲石、凹石の複合石器である。106は断面が三角形を呈し、稜に磨痕が観察される、特殊磨石と呼ばれるものである。107～124は磨石と敲石の複合石器である。礫の端部に敲打痕が、平坦部に磨痕が観察されるのが一般的である。



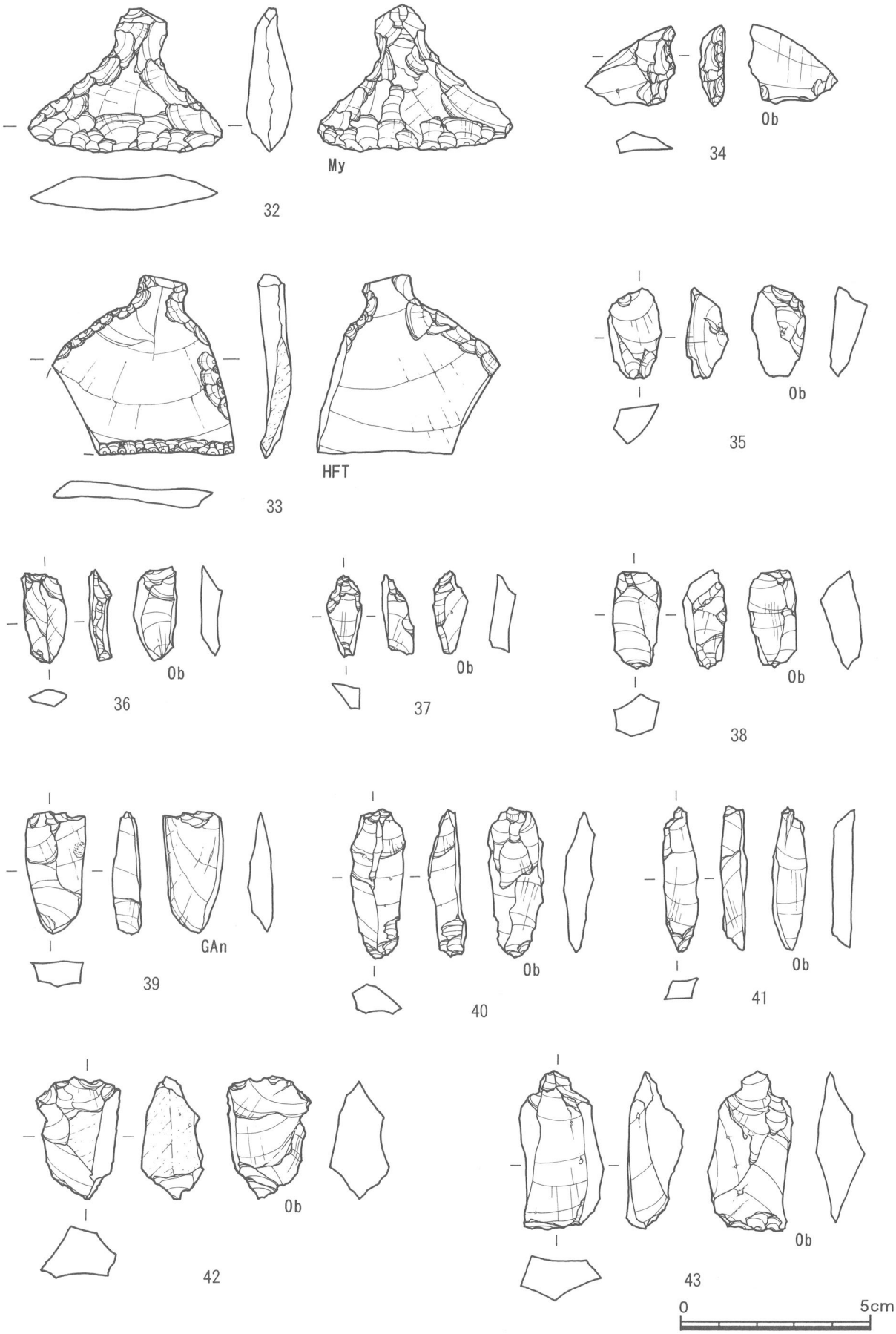
第46図　尖頭器・石鏃


14
Ob
15
Ob
16
Ob
17
Ob
18
Ob
19
Ob
20
Ob
21
Ob
22
Ob
23
Ob
24
Ob
25
Ob
26
Ob
27
Ob
28
Ob
0
5cm

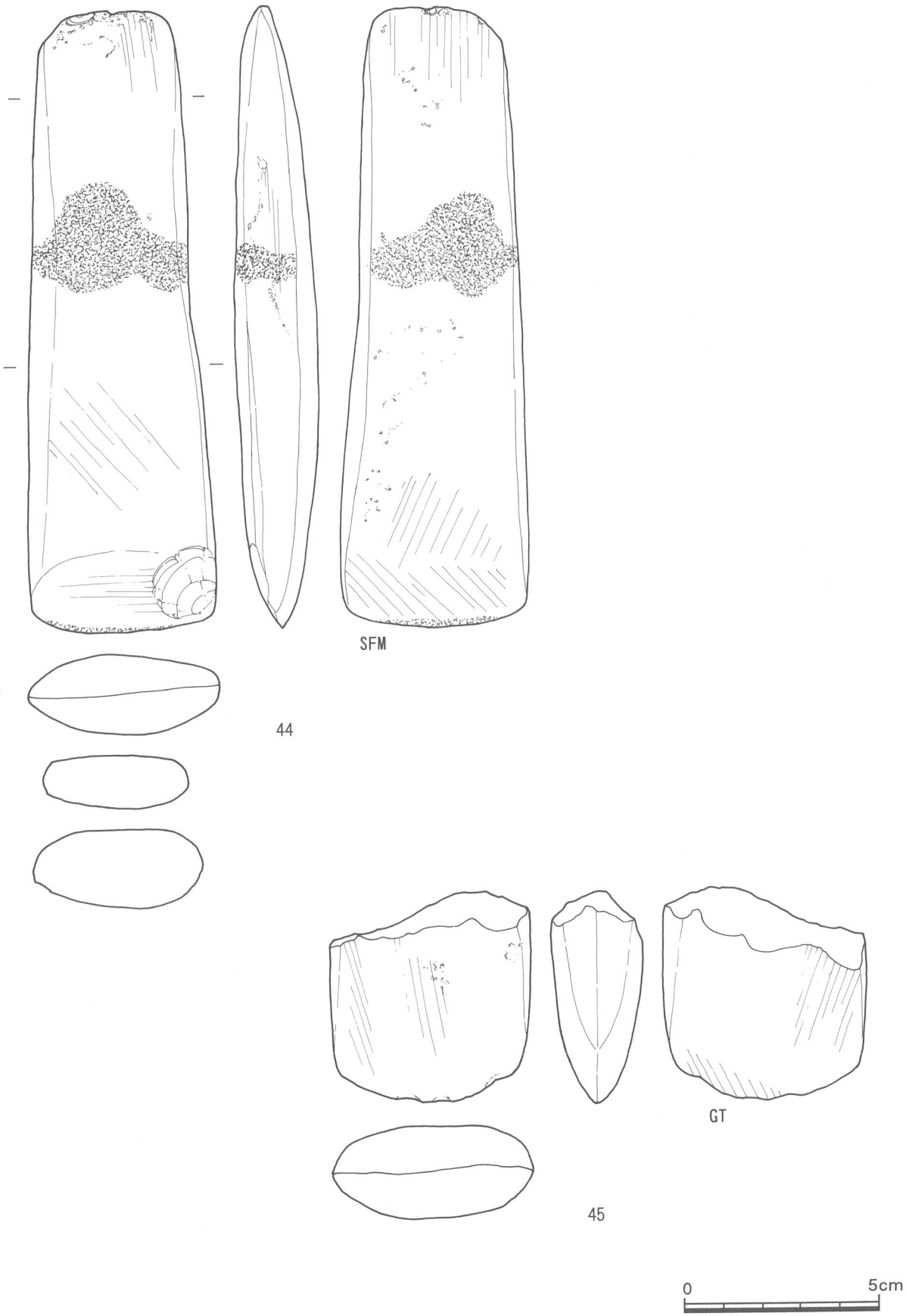
第47図　石鏃



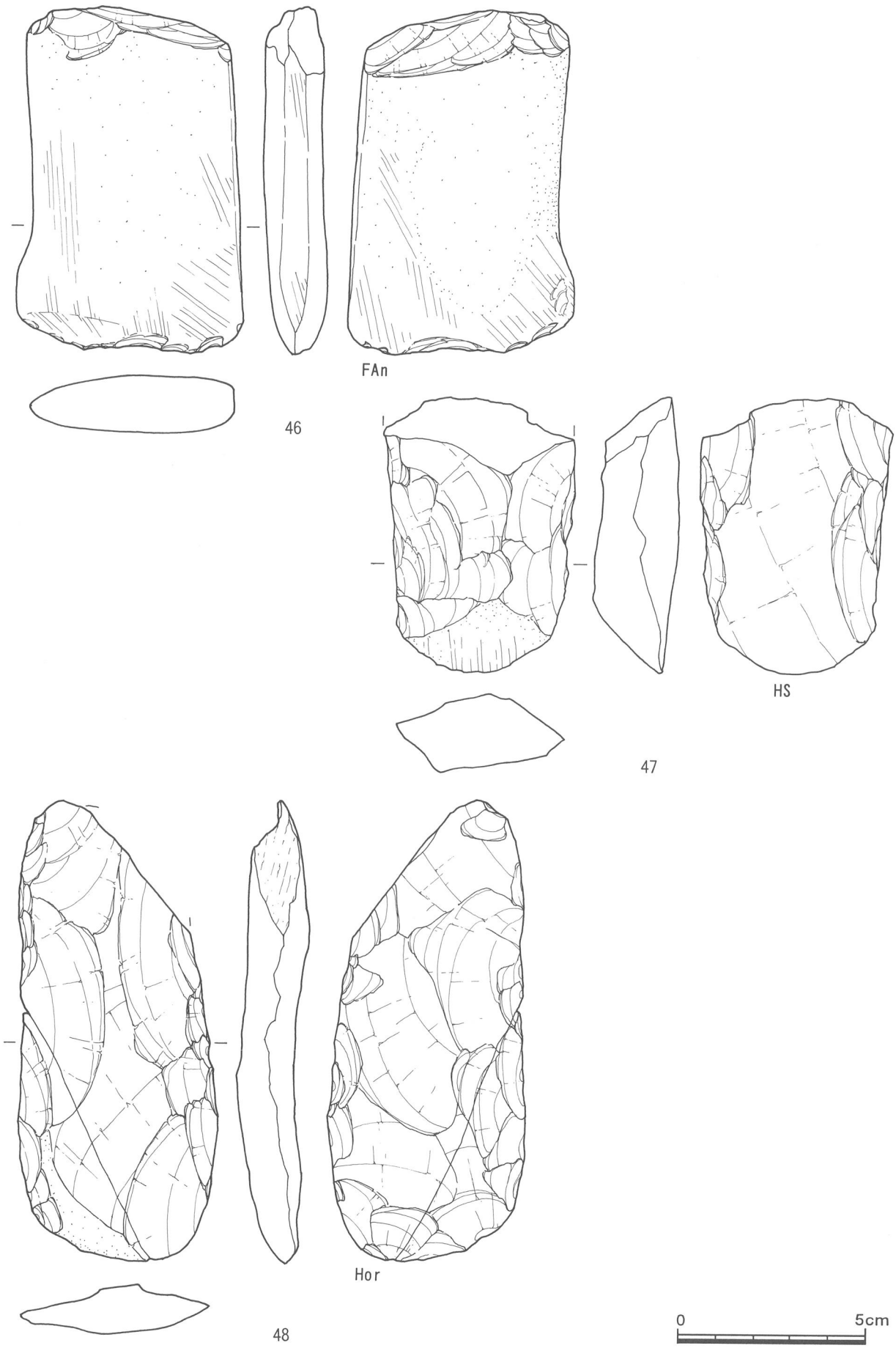
第48図　石七


My
32
Ob
34
HFT
33
Ob
35
Ob
36
Ob
37
Ob
38
GAn
39
Ob
40
Ob
41
Ob
42
Ob
43
0
5cm

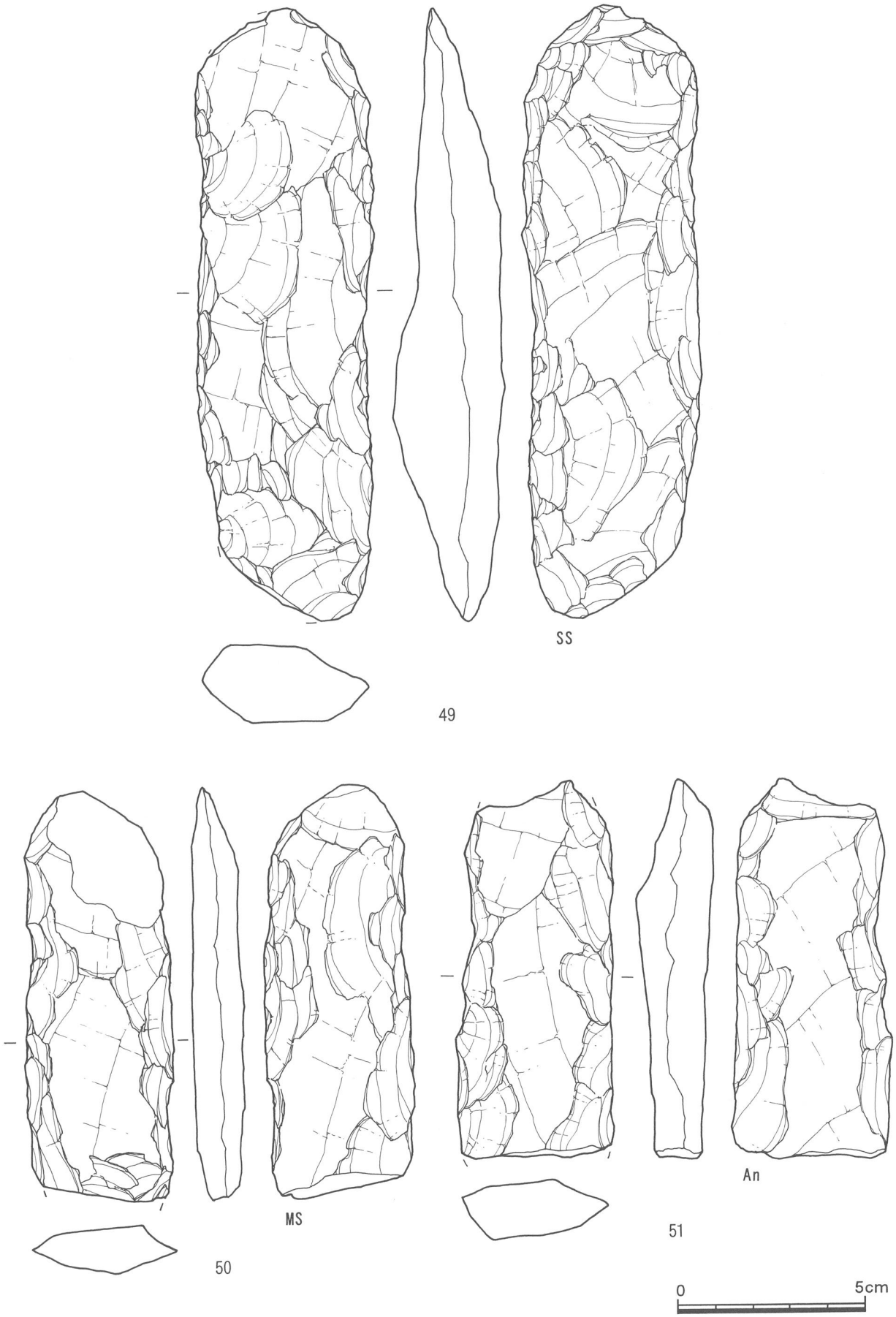
第49図　石匕・楔形石器



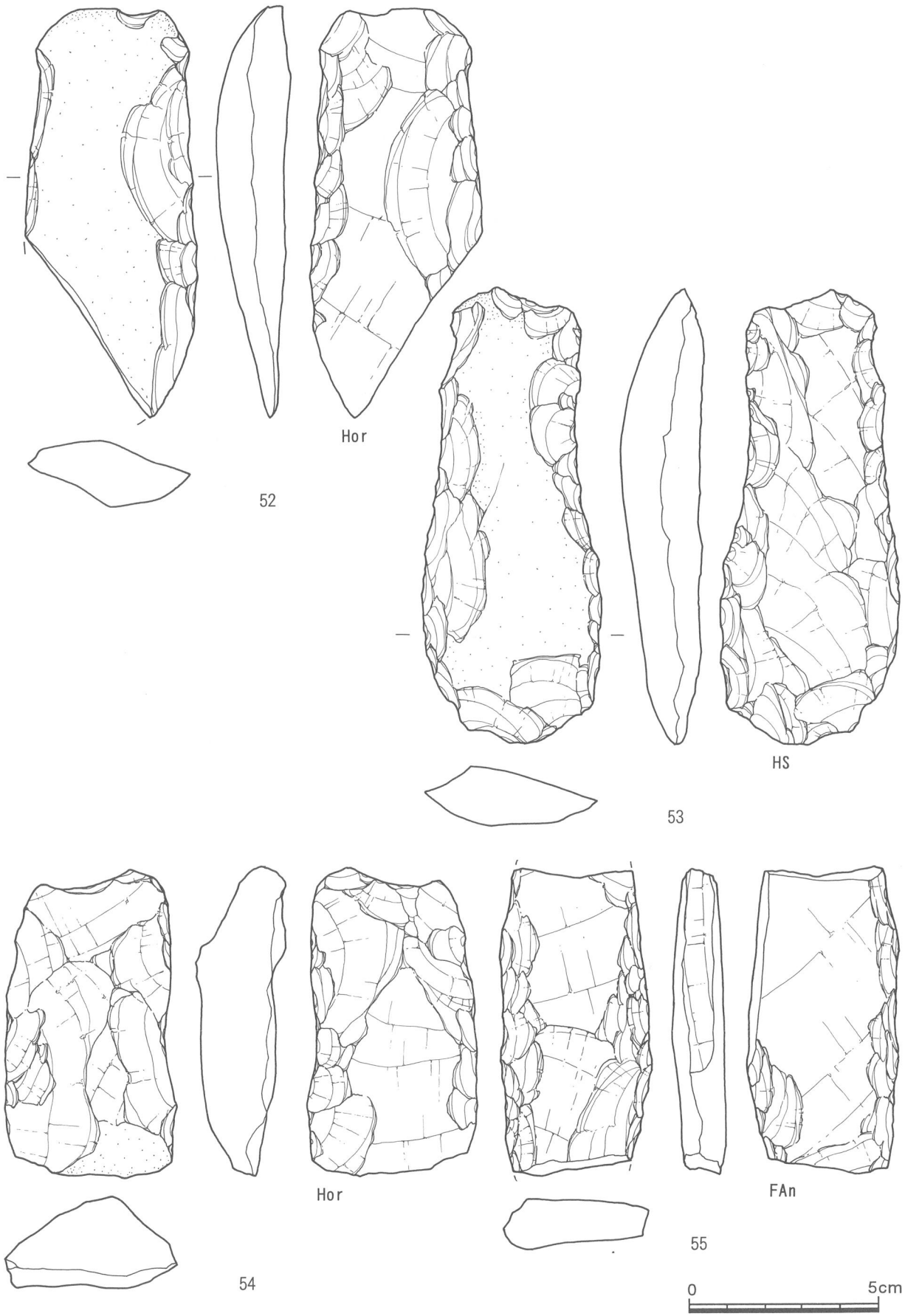
第50図　石斧１



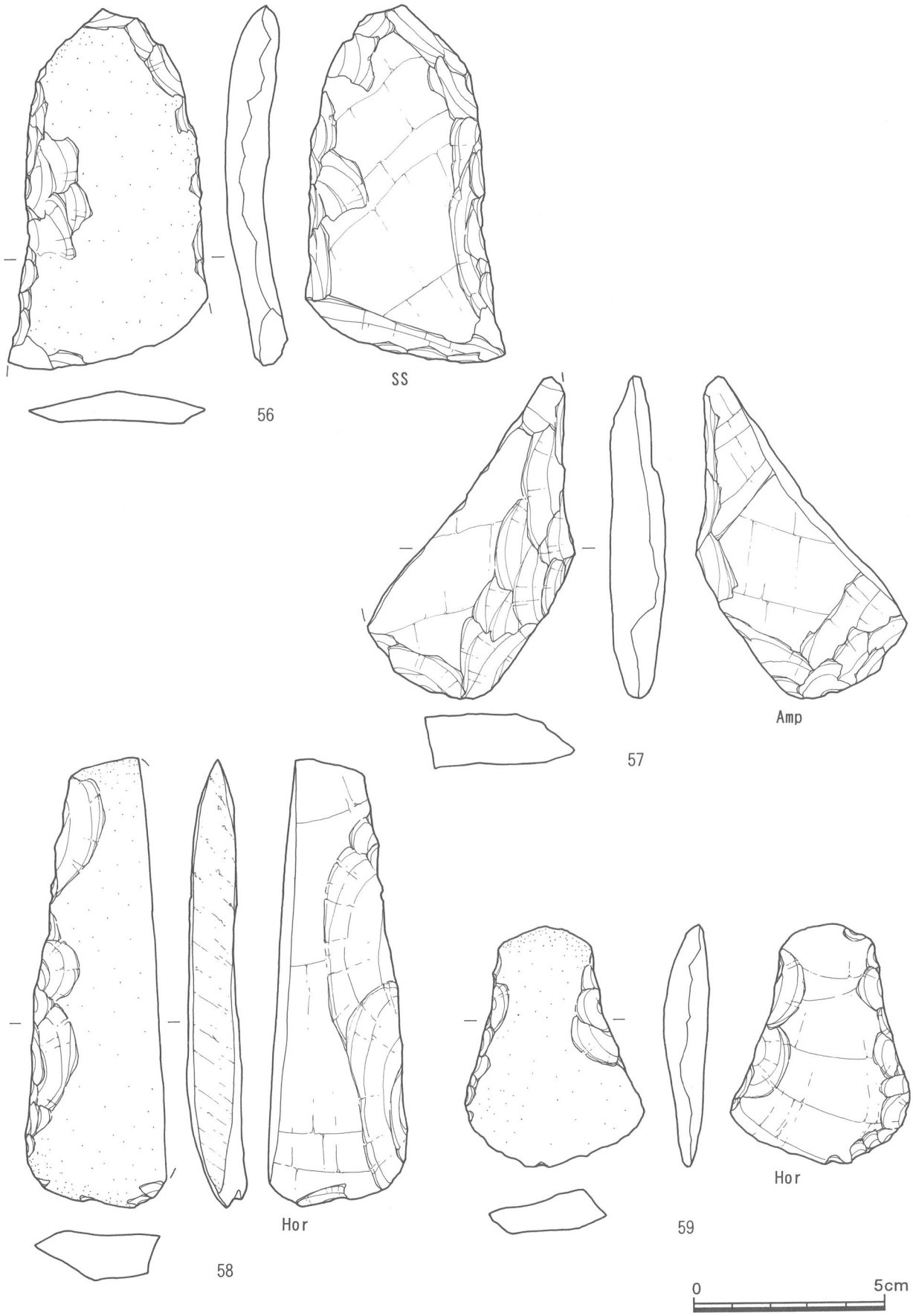
第51図　石斧２



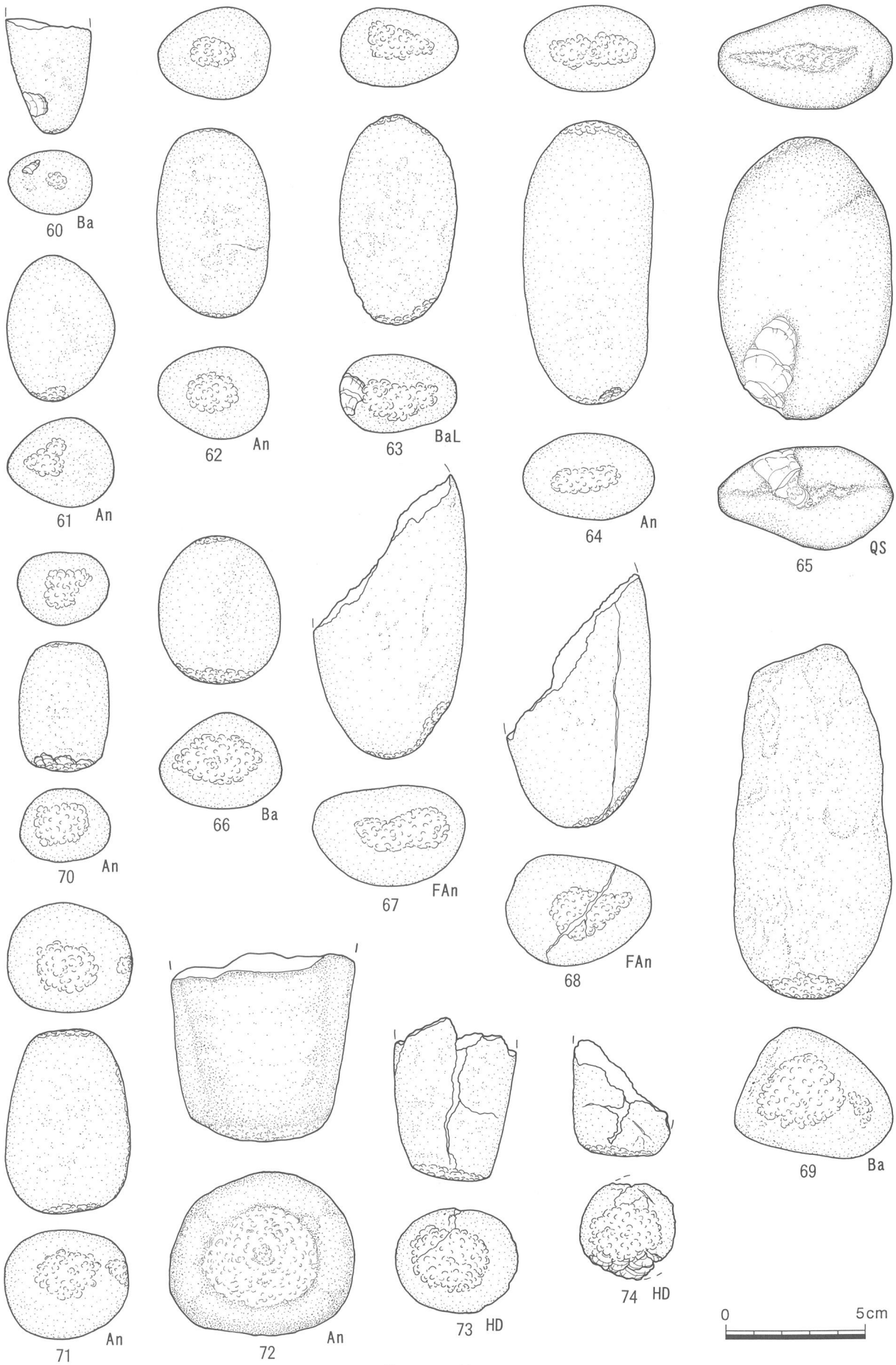
第52図　石斧３



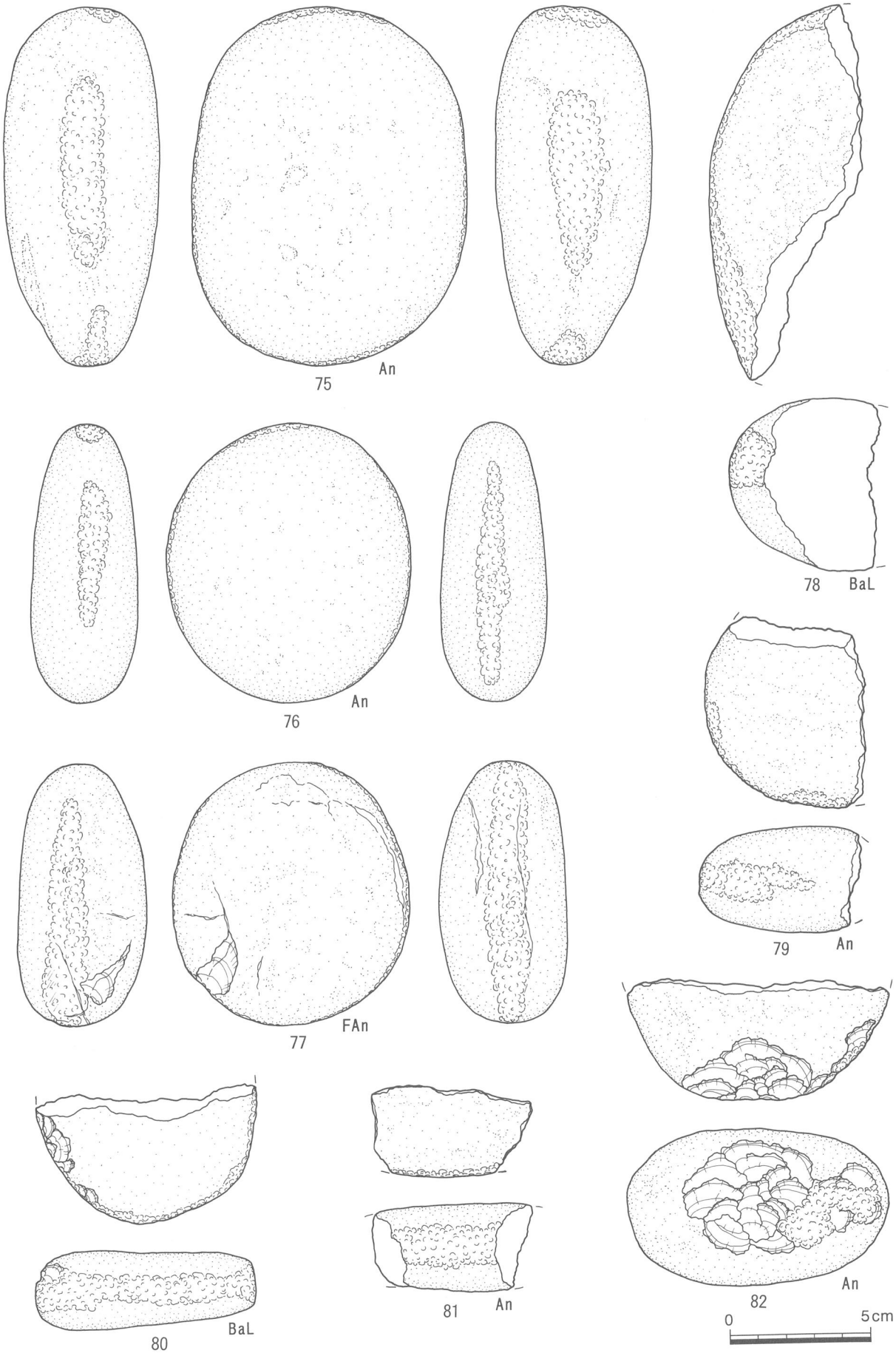
第53図　石斧４



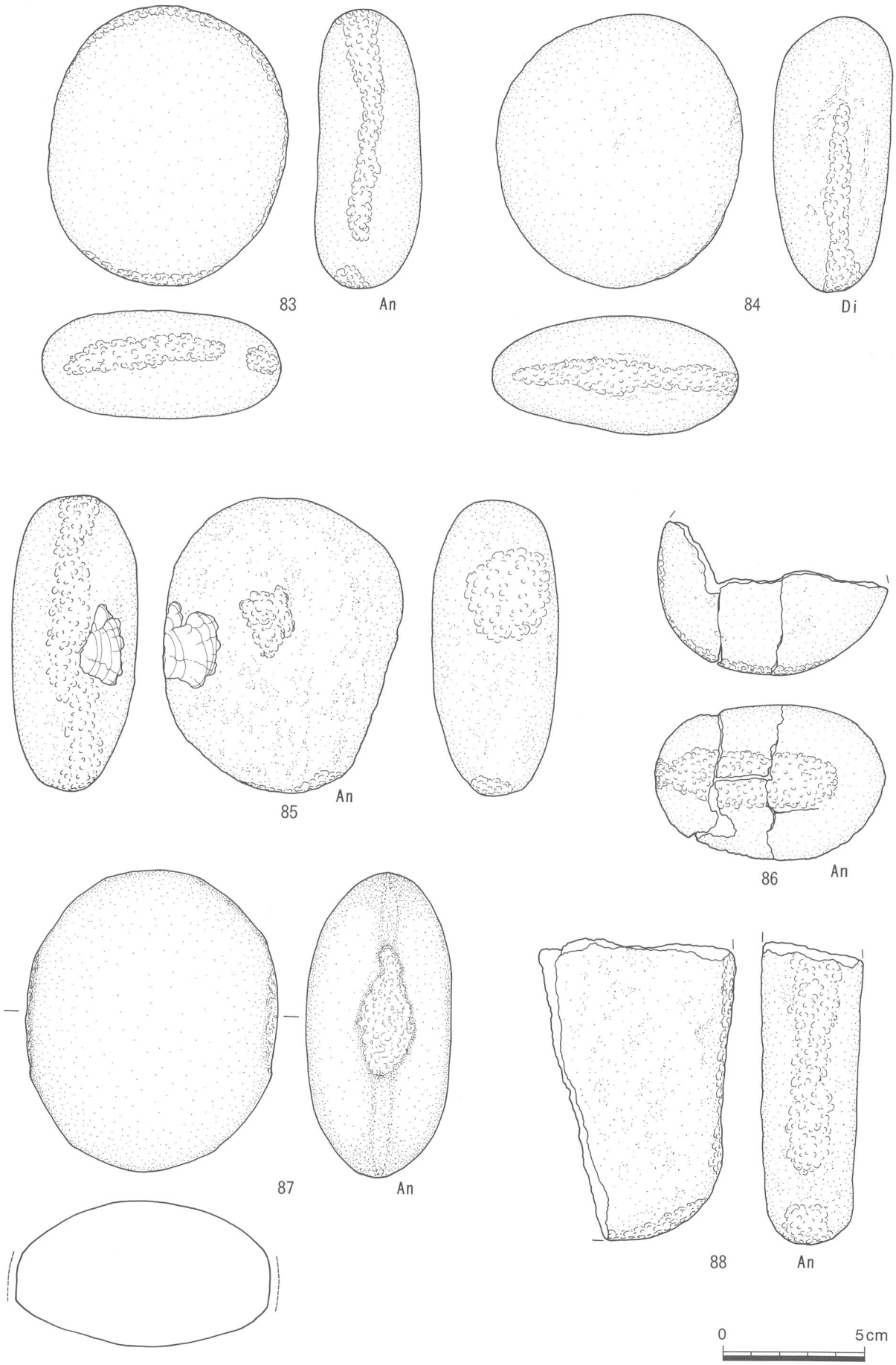
第54図　石斧５


60 Ba
61 An
62 An
63 BaL
64 An
65 QS
66 Ba
67 FAn
68 FAn
69 Ba
70 An
71 An
72 An
73 HD
74 HD
0 5cm

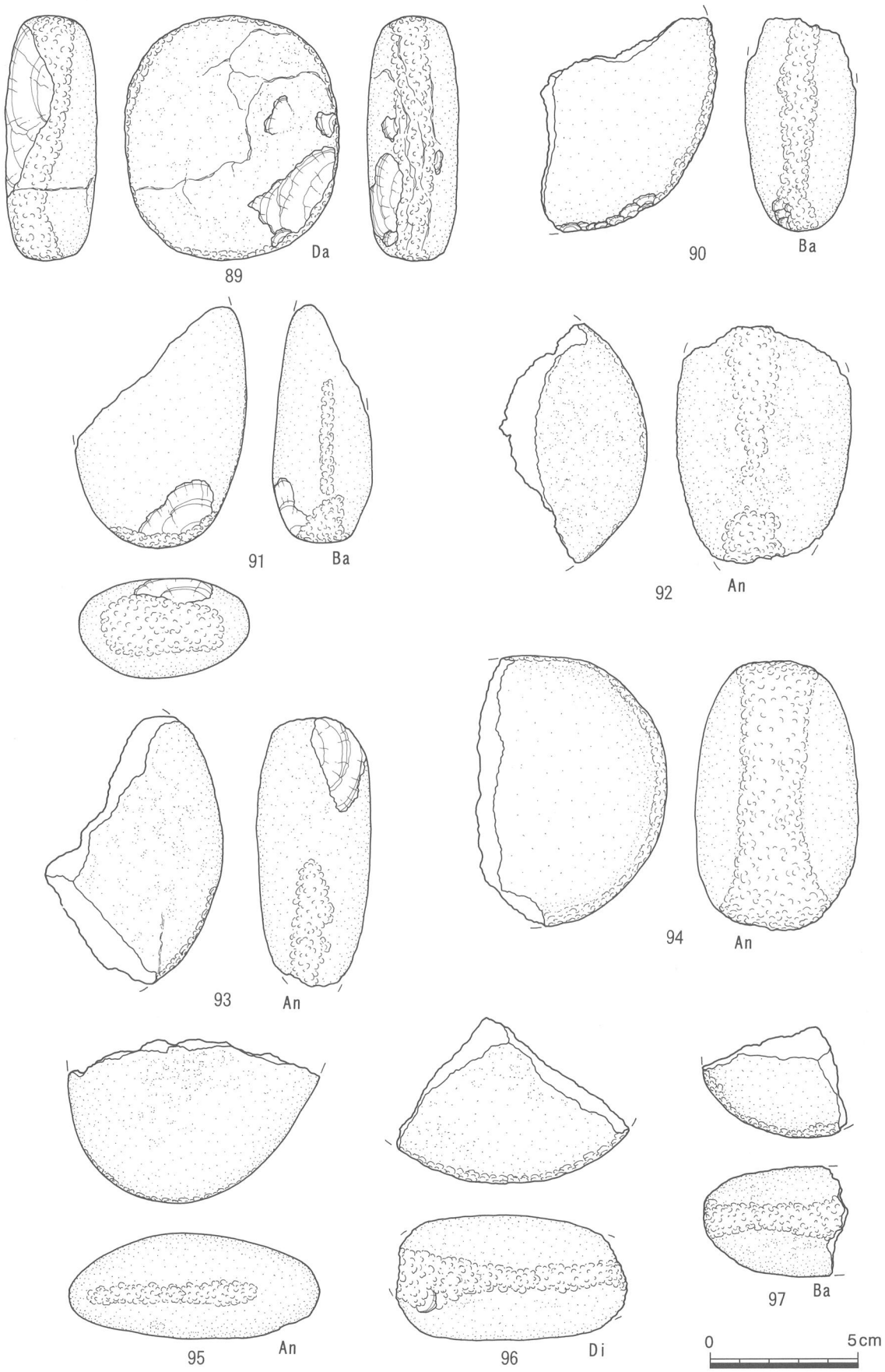
第55図　敲石１



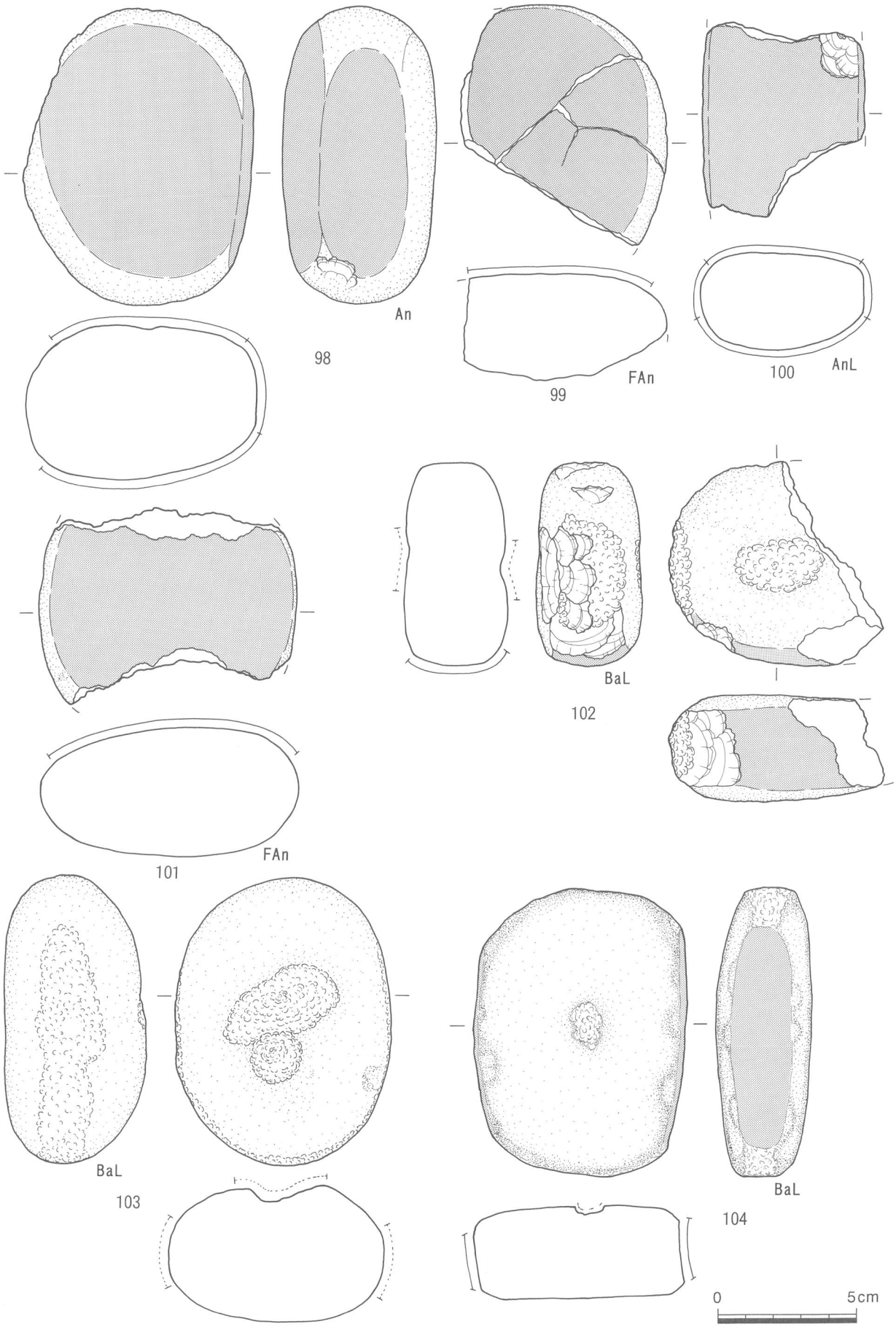
第56図　敲石２



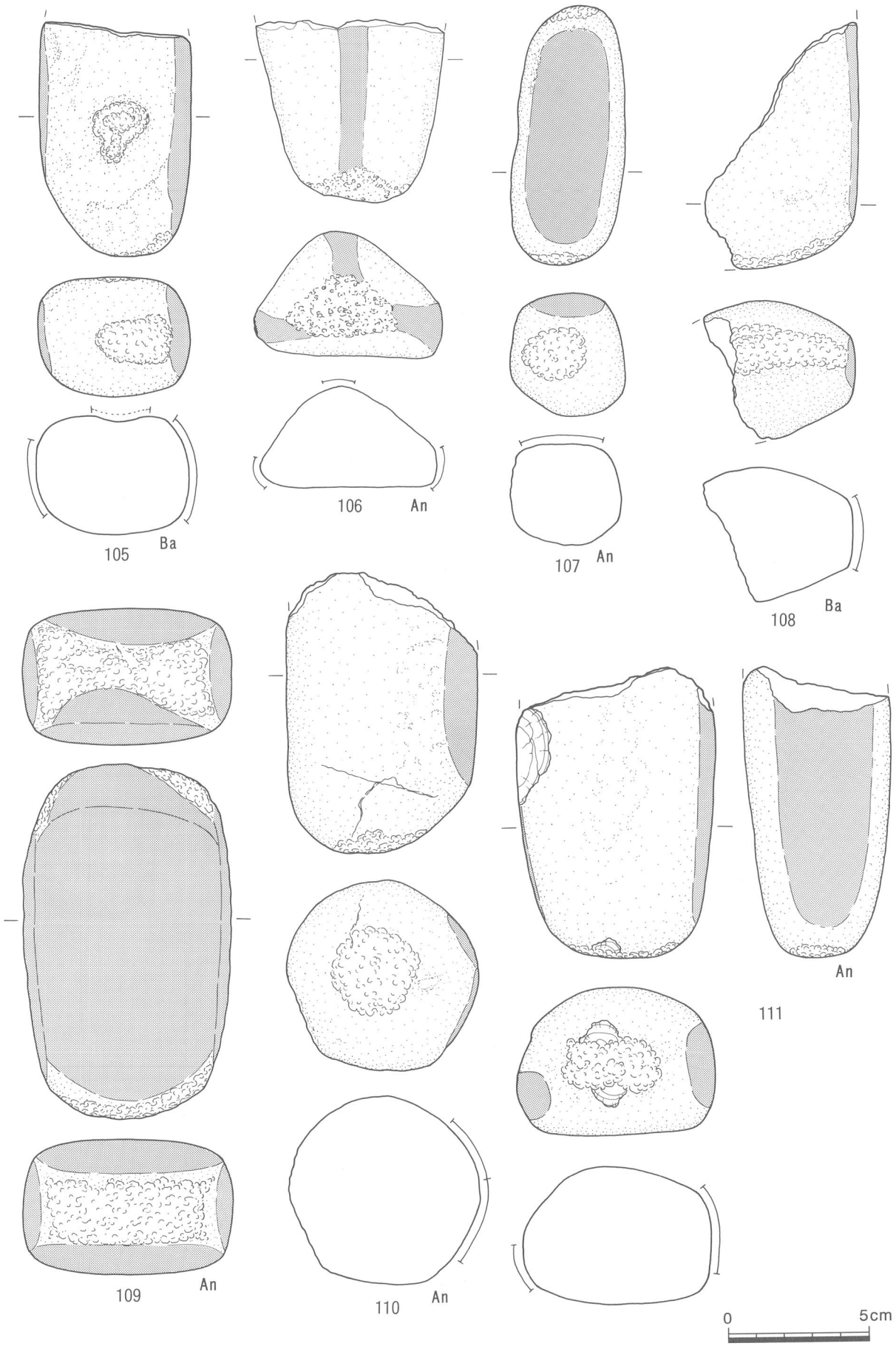
第57図　敲石３



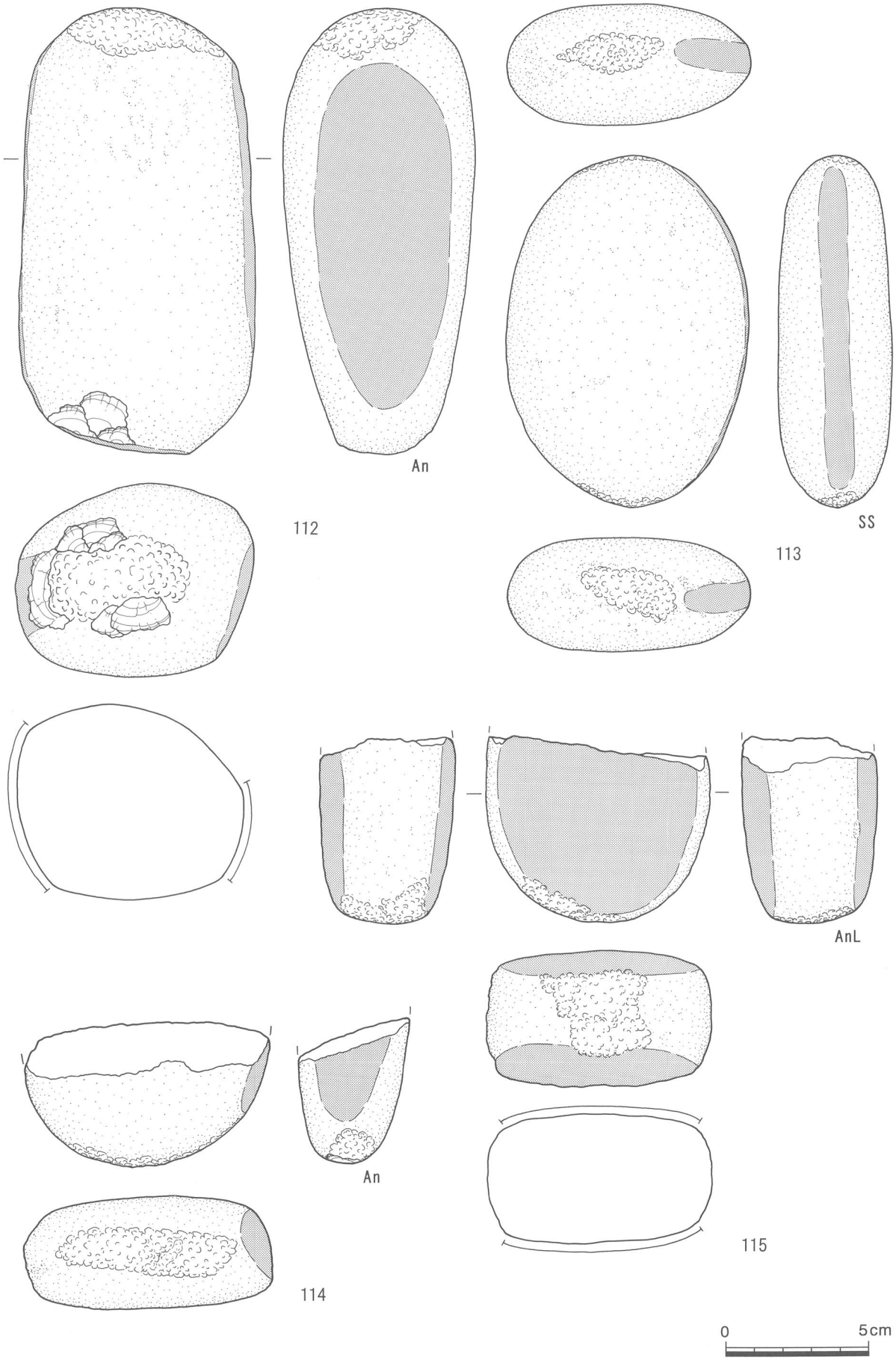
第58図　敲石４



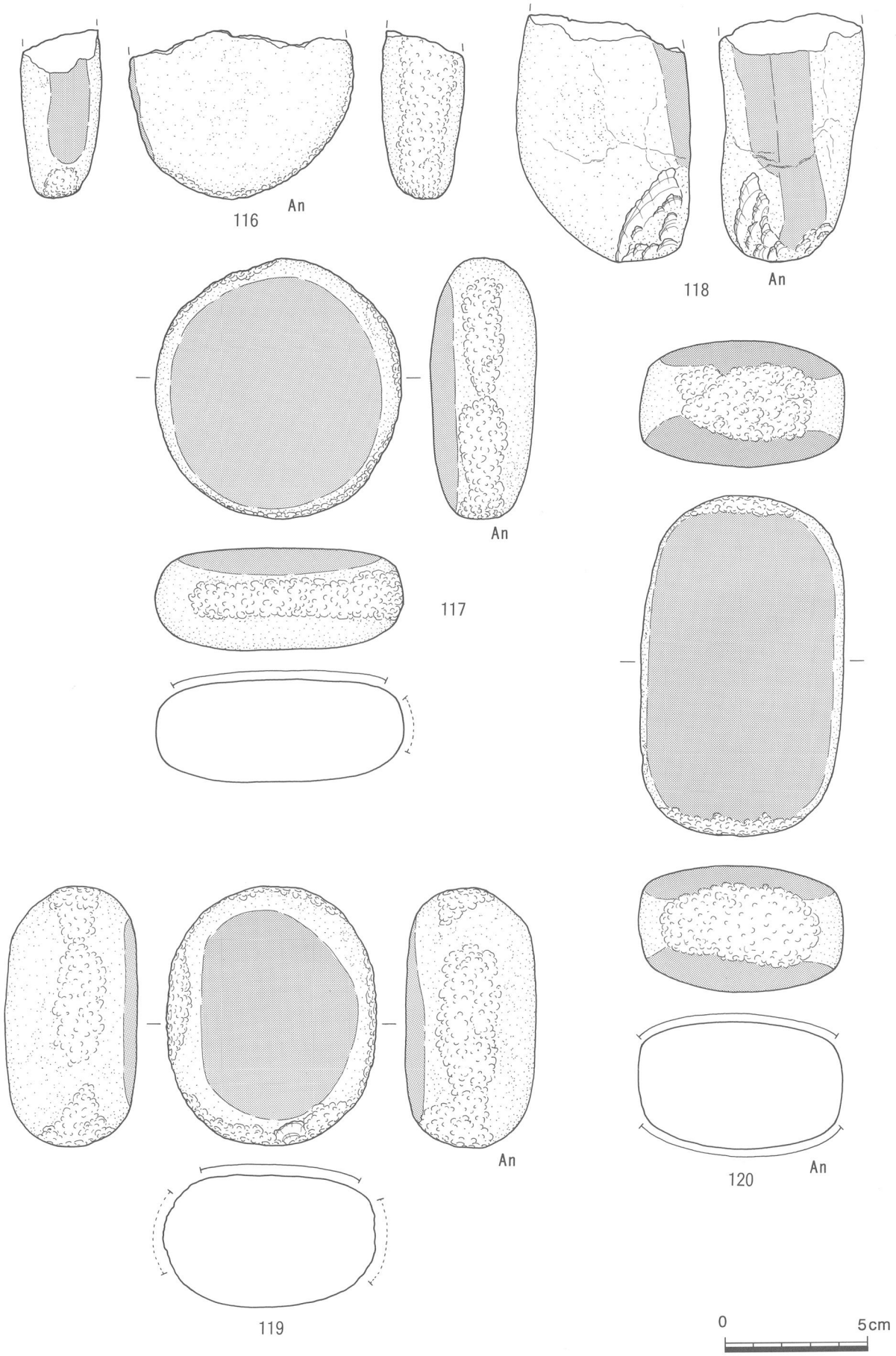
第59図　磨石・敲石・凹石１



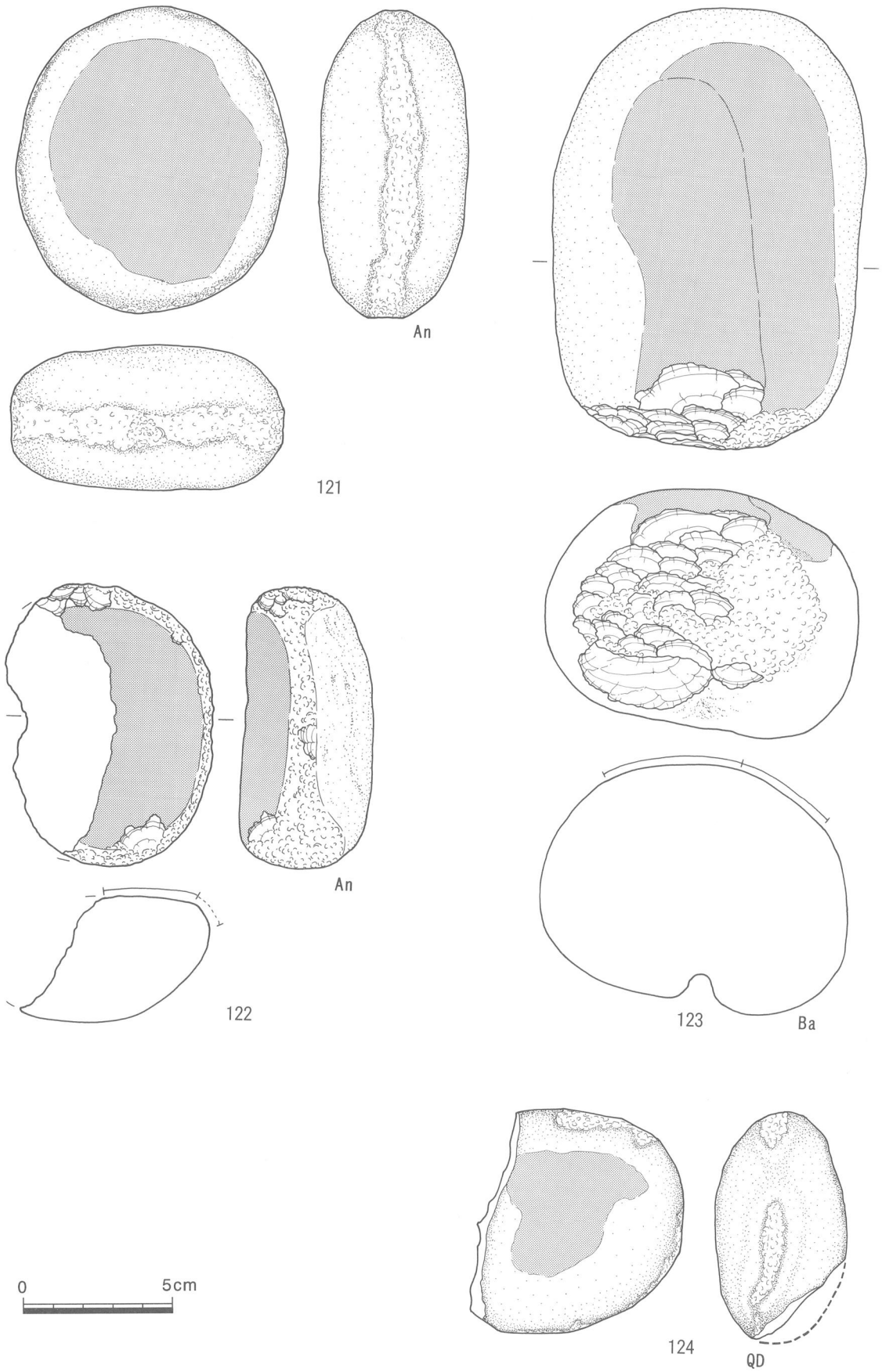
第60図　磨石・敲石・凹石２



第61図　磨石・敲石１



第62図　磨石・敲石２



第63図　磨石・敲石３

表３　石器観察表

図版No.	層位	遺物番号	器種	石材	最大縦長(mm)	最大横長(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1	3	0526	尖頭器	ガラス質黒色安山岩	(75.6)	(45.3)	(12.5)	(43.2)	欠損品
2	3	0314	石鏃	黒曜石	11.3	15.3	3.0	0.4	
3	2	0072	石鏃	黒曜石	(15.2)	(14.2)	(2.7)	(0.3)	欠損品
4	3	0371	石鏃	黒曜石	13.6	13.2	3.0	0.4	ＳＢ０２出土
5	2	0140	石鏃	黒曜石	10.6	9.2	2.9	0.2	縁辺部のみの調整
6	3	0457	石鏃	黒曜石	15.0	13.3	3.0	0.5	
7	3	0453	石鏃	黒曜石	(16.8)	(14.4)	(2.2)	(0.4)	未製品？（欠損品）
8	3	0004	石鏃	黒曜石	(12.8)	(14.0)	(3.3)	(0.4)	欠損品
9	3	0356	石鏃	黒曜石	(18.1)	(16.1)	(4.1)	(0.8)	欠損品
10	3	0475	石鏃	黒曜石	(15.7)	(13.8)	(5.0)	(0.8)	欠損品
11	表採	0006	石鏃	黒曜石	(25.4)	(16.0)	(3.8)	(0.9)	欠損品
12	3	0156	石鏃	ガラス質黒色安山岩	20.6	166.6	3.8	0.8	
13	3	0265	石鏃	黒曜石	(11.0)	(17.1)	(3.7)	(0.7)	欠損品
14	3	0287	石鏃	黒曜石	(14.9)	(14.1)	(4.6)	(0.7)	欠損品
15	3	0429	石鏃	黒曜石	(12.9)	(14.9)	(4.4)	(0.7)	ＳＢ０１出土、欠損品
16	3	0036	石鏃	黒曜石	(20.2)	(12.3)	(3.4)	(0.4)	欠損品
17	3	0001	石鏃	黒曜石	(15.0)	(15.5)	(3.8)	(0.8)	欠損品
18	3	0500	石鏃	黒曜石	(23.2)	(16.9)	(6.4)	(1.6)	欠損品
19	2	0056	石鏃	黒曜石	(26.2)	(11.8)	(5.2)	(1.1)	未製品（欠損）
20	3	0188	石鏃	黒曜石	(15.1)	(16.4)	(6.9)	(1.2)	未製品、欠損後楔形石器として使用
21	3	0244	石鏃	黒曜石	13.4	19.1	7.6	1.7	未製品
22	表採	0007	石鏃	黒曜石	(14.7)	(15.7)	(4.5)	(0.9)	欠損品
23	3	0301	石鏃	黒曜石	(19.5)	(18.3)	(3.8)	(0.8)	未製品（欠損）
24	3	0440	石鏃	黒曜石	(17.5)	(19.2)	(7.9)	(1.5)	未製品（欠損）
25	2	0115	石鏃	黒曜石	27.6	23.2	9.5	4.9	未製品
26	3	0486	石鏃	黒曜石	24.3	17.1	5.8	2.2	未製品
27	2	0030	石鏃	黒曜石	(19.6)	(24.2)	(10.1)	(3.5)	未製品（欠損）
28	3	0074	石鏃	黒曜石	(12.5)	(22.2)	(6.6)	(1.9)	未製品（欠損）
29	2	0190	石七	ガラス質黒色安山岩	38.1	52.5	8.3	14.9	剥片の背面を面的に調整する
30	2	0139	石七	ホルンフェルス	58.8	65.7	11.5	37.1	打面を残した剥片素材、縁辺部にのみ調整を加え、刃部を削出する
31	2	0188	石七	頁岩	77.1	76.3	22.9	116.1	原礫面を残す分厚い剥片を側縁部から調整、未製品
32	3	0087	石七	圧砕岩	32.3	43.0	9.8	9.6	両面調整
33	2	0069	石七	硬質細粒凝灰岩	40.2	41.5	6.5	9.3	剥片を素材とし、縁辺部より調整を加える
34	3	0007	抉入削器	黒曜石	(17.9)	(19.2)	(5.4)	(1.5)	欠損品
35	3	0169	楔形石器	黒曜石	20.5	12.4	8.6	1.8	
36	3	0482	楔形石器	黒曜石	20.5	9.3	5.2	0.8	
37	3	0448	楔形石器	黒曜石	18.6	7.7	7.4	0.7	
38	2	0008	楔形石器	黒曜石	21.9	10.1	9.7	2.2	
39	2	0125	楔形石器	ガラス質黒色安山岩	27.1	13.4	6.3	3.1	
40	3	0178	楔形石器	黒曜石	32.6	12.8	6.6	2.2	
41	3	0489	楔形石器	黒曜石	32.2	7.8	5.4	1.6	
42	3	0459	楔形石器	黒曜石	27.8	17.3	14.3	5.9	
43	3	0106	楔形石器	黒曜石	35.3	18.6	13.4	6.8	
44	2	0179	磨製石斧	珪質細粒圧砕岩	160.0	49.0	20.8	279.3	緊縛痕、刃部に使用痕、側縁部に擦切時の溝が観察される
45	2	0025	磨製石斧	緑色凝灰岩	(54.1)	(53.2)	(24.0)	(111.4)	欠損品、刃部に使用痕
46	3	0126	磨製石斧	細粒安山岩	96.0	61.2	15.5	166.4	扁平な礫を素材とし、上下端を打ち欠き整形する。未製品。
47	3	0484	打製石斧	硬砂岩	(74.9)	(51.1)	(23.8)	(113.6)	刃部磨製、欠損品
48	2	0085	打製石斧	ホルンフェルス	(126.0)	(53.9)	(16.9)	(124.2)	短冊形、節理割れ、欠損品
49	2	0137	打製石斧	砂岩	(166.0)	(46.5)	(30.1)	(267.8)	短冊形、縁辺部に着柄のための潰痕あり。両刃、欠損品
50	3	0571	打製石斧	白雲母片岩	(112.0)	(40.6)	(13.7)	(85.5)	短冊形、風化が激しい、欠損品
51	3	0445	打製石斧	輝石安山岩	(101.7)	(43.9)	(20.4)	(114.4)	短冊形、欠損品
52	2	0086	打製石斧	ホルンフェルス	(110.7)	(46.4)	(19.1)	(105.7)	短冊形、欠損品
53	2	0064	打製石斧	硬砂岩	122.7	48.1	20.8	144.2	短冊形、縁辺部に着柄のための潰痕あり
54	2	0084	打製石斧	ホルンフェルス	82.4	46.8	24.2	95.2	短冊形
55	3	0088	打製石斧	細粒安山岩	(82.8)	(40.8)	(13.9)	(74.5)	短冊形、欠損品
56	3	0379	打製石斧	砂岩	(98.1)	(54.1)	(15.1)	(74.6)	短冊形、欠損品
57	2	0167	打製石斧	角閃石	(86.1)	(54.9)	(14.1)	(67.4)	欠損品
58	2	0096	打製石斧	ホルンフェルス	(119.7)	(37.6)	(15.0)	(82.5)	撥形、節理割れ、欠損品
59	3	0460	打製石斧	ホルンフェルス	64.3	48.0	11.9	33.9	撥形、節理割れ
60	表採	0004	敲石	玄武岩	(41.5)	(30.5)	(23.0)	(75.3)	欠損品
61	2	0170	敲石	輝石安山岩	(52.5)	(39.0)	(38.5)	(83.4)	欠損品
62	3	0135	敲石	輝石安山岩	68.5	40.0	33.5	135.8	
63	2	0178	敲石	玄武岩質溶岩	(75.0)	(42.0)	(28.5)	(110.2)	欠損品
64	3	0541	敲石	輝石安山岩	102.0	46.5	31.0	190.7	
65	2	0134	敲石	石英質砂岩	102.0	63.0	37.0	354.9	
66	3	0365	敲石	玄武岩	53.0	43.5	35.0	97.8	
67	3	0418	敲石	細粒安山岩	102.5	55.0	36.0	213.7	
68	3	0435	敲石	細粒安山岩	(91.0)	(52.0)	(40.0)	(174.3)	欠損品
69	3	0262	敲石	玄武岩	127.5	56.5	48.0	462.8	
70	3	0412	敲石	輝石安山岩	47.0	32.5	26.5	48.3	
71	2	0067	敲石	輝石安山岩	67.0	45.0	40.0	168.2	

図版No.	層位	遺物番号	器種	石材	最大縦長(mm)	最大横長(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
72	2	0175	敲石	輝石安山岩	(68.0)	(66.5)	(59.0)	(230.0)	欠損品
73	2	0184	敲石	角閃石デイサイト	(59.0)	(44.0)	(38.0)	(108.4)	欠損品
74	2	0187	敲石	角閃石デイサイト	(43.0)	(34.0)	(35.0)	(43.0)	欠損品
75	2	0049	敲石	輝石安山岩	128.5	98.0	56.0	1073.5	
76	3	0281	敲石	輝石安山岩	99.5	88.0	38.5	504.0	
77	2	0186	敲石	細粒安山岩	94.0	85.0	46.0	557.2	
78	2	0176	敲石	玄武岩質溶岩	(134.5)	(55.0)	(54.0)	(392.9)	欠損品
79	2	0012	敲石	輝石安山岩	(68.0)	(58.0)	(38.0)	(202.3)	欠損品
80	3	0523	敲石	玄武岩質溶岩	(50.0)	(79.0)	(28.5)	(126.2)	欠損品
81	3	0071	敲石	輝石安山岩	(33.0)	(57.5)	(32.0)	(79.3)	欠損品
82	2	0082	敲石	輝石安山岩	(44.0)	(93.0)	(57.0)	(296.1)	欠損品
83	3	0442	敲石	輝石安山岩	100.0	85.0	38.5	474.8	
84	表採	0003	敲石	閃緑岩	98.0	87.5	42.0	534.1	
85	3	0046	敲石	輝石安山岩	105.0	85.0	45.0	553.7	
86	3	0367	敲石	輝石安山岩	(54.0)	(82.0)	(55.5)	(115.8)	欠損品
87	3	0419	敲石	輝石安山岩	107.5	90.0	52.0	505.8	
88	2	0189	敲石	輝石安山岩	(108.0)	(70.5)	(36.0)	(340.0)	欠損品
89	3	0077	敲石	デイサイト	83.0	73.0	31.0	243.3	
90	3	0454	敲石	玄武岩	(73.0)	(60.0)	(38.0)	(178.8)	欠損品
91	3	0420	敲石	玄武岩	(81.0)	(58.5)	(34.0)	(153.3)	欠損品
92	2	0193	敲石	輝石安山岩	(81.0)	(50.5)	(59.5)	(260.6)	欠損品
93	3	0064	敲石	輝石安山岩	(91.0)	(60.5)	(39.0)	(248.0)	欠損品
94	3	0560	敲石	輝石安山岩	(92.0)	(65.0)	(55.5)	(471.8)	欠損品
95	3	0170	敲石	輝石安山岩	(56.0)	(85.0)	(36.0)	(205.3)	欠損品
96	3	0070	敲石	閃緑岩	(56.5)	(78.5)	(42.5)	(214.5)	欠損品
97	3	0259	敲石	玄武岩	(38.0)	(49.0)	(37.5)	(71.8)	欠損品
98	2	0050	磨石	輝石安山岩	(108.0)	(84.0)	(56.0)	(739.3)	欠損品
99	3	0417	磨石	細粒安山岩	(87.0)	(73.0)	(39.0)	(262.9)	欠損品
100	2	0060	磨石	安山岩質溶岩	(70.5)	(59.0)	(36.0)	(193.7)	欠損品
101	2	0118	磨石	細粒安山岩	(71.5)	(93.5)	(47.0)	(497.3)	欠損品
102	3	0083	敲石・磨石	玄武岩質溶岩	(74.5)	(78.0)	(39.0)	(238.8)	欠損品
103	3	0198	敲石	玄武岩質溶岩	104.5	79.0	52.0	608.4	
104	3	0261	敲石・磨石	玄武岩質溶岩	105.0	78.0	35.0	630.4	
105	2	0165	敲石・磨石	玄武岩	(84,5)	(54,5)	(43.0)	(312.6)	欠損品
106	2	0182	敲石・磨石	輝石安山岩	(65.5)	(67.5)	(46.0)	(249.8)	欠損品、特殊磨石
107	3	0533	敲石・磨石	輝石安山岩	93.0	41.0	44.0	257.6	
108	3	0368	敲石・磨石	玄武岩	(88.5)	(54.5)	(59.0)	(230.6)	欠損品
109	2	0027	敲石・磨石	輝石安山岩	127.5	74.5	48.5	72.12	
110	表採	0005	敲石・磨石	輝石安山岩	(100.5)	(69.0)	(68.0)	(647.2)	欠損品
111	2	0053	敲石・磨石	輝石安山岩	(104.5)	(77.0)	(53.0)	(614.8)	欠損品
112	2	0183	敲石・磨石	輝石安山岩	158.5	82.0	69.0	1428.1	
113	3	0154	敲石・磨石	砂岩	124.0	86.0	40.0	651.5	
114	3	0085	敲石・磨石	輝石安山岩	(51.0)	(88.0)	(39.5)	(218.8)	欠損品
115	2	0004	敲石・磨石	安山岩質溶岩	(66.0)	(79.5)	(47.5)	(321.9)	欠損品
116	2	0001	敲石・磨石	輝石安山岩	(60.0)	(80.0)	(29.0)	(174.7)	欠損品
117	3	0095	敲石・磨石	輝石安山岩	(92.0)	(87.5)	(36.0)	(465.8)	欠損品
118	2	0055	敲石・磨石	輝石安山岩	(87.5)	(62.5)	(51.0)	(367.2)	欠損品
119	3	0055	敲石・磨石	輝石安山岩	92.5	75.0	46.0	440.2	
120	表採	0002	敲石・磨石	輝石安山岩	121.0	72.5	45.0	635.1	
121	3	0305	敲石・磨石	輝石安山岩	104.0	91.0	50.0	455.9	
122	3	0091	敲石・磨石	輝石安山岩	(95.0)	(70.5)	(45.0)	(294.7)	欠損品
123	3	0299	敲石・磨石	玄武岩	149.5	105.0	84.0	1999.2	
124	2	0128	敲石・磨石	石英閃緑岩	(76.5)	(71.5)	(45.0)	(220.5)	欠損品

第Ⅳ章　調査の成果と課題

今回の調査では、縄文時代中期前半の住居跡が４軒検出された。遺物の出土状況からみると、３号住居跡が新道式新段階、１号住居跡、２号住居跡、５号住居跡が藤内Ⅰ式に属するものと考えられる。また５号住居跡の覆土からは多数の土器、石器が検出されている。これらの遺物は１号・２号住居跡から出土している土器と同一個体のものもあり、一見同一時期に存在したように思われる。しかし５号住居跡の炉跡は壊され原型を留めず、遺物も東側に集中し、遺物周辺には炭化物が観察でき、あたかも遺物の廃棄を示すようであった。よって小池遺跡では１号・２号住居跡が営まれていた時にすでに５号住居跡は放棄され、土器、石器等の廃棄場所になっていたのではないかと考えている。これらの住居跡は痩せ尾根の極狭い平坦地に営まれている。小池遺跡周辺では、縄文時代中期前半の住居跡を検出した遺跡がいくつかあるが、いずれも痩せ尾根上の平坦地に２軒から３軒が検出されているのみである。当該期の代表的な集落に長泉町の上山地遺跡がある。この遺跡は両側を谷で囲まれた幅200mほどの平坦地に立地し、２７軒の住居跡を検出しており、当遺跡などとは明らかに性格が異なる。またこのような遺跡は愛鷹山麓、箱根西麓では上山地遺跡のみであり、この意味では特殊な遺跡といえる。縄文時代中期前半のこのような遺跡のあり方は、単に地形的な制約を受けているだけなのか。それとも上山地遺跡のような遺跡をこの地の拠点集落と考えるならば、小池遺跡などは一時的（季節的？）な使用による仮設住居跡と考えられるのであろうか。中部高地の遺跡のあり方とともに今後の検討課題である。

遺物としては、早期後半の条痕文系土器が数の上では当遺跡の中心となる。中でも絡状体圧痕文が施されたものが多い。前期の土器は、黒浜式から十三菩提式土器が出土している。前期の土器の特徴は、接合資料が多いことで、遺跡の中で形式ごとにある程度かたまって出土している。単独で出土したものとしては、ほぼ完形品の磨製石斧がある。胴部には明確な着柄痕が観察され、刃部にも使用によるものと考えられる光沢が観察される。この磨製石斧は、２区の尾根の頂部より出土しており、当初埋納の可能性を考えて周辺を精査したが遺構は検出されなかった。また同じく２区の尾根の頂部より縄文時代晩期の安行Ⅲａ式土器が出土している。これは県東部では検出例がなく注目される。[註1]

当遺跡では山梨県都留文科大学教授　上杉陽氏による火山灰に関しての現地指導を実施している。火山灰の同定は現地において肉眼でおこなわれた。東駿河湾環状道路関係の遺跡では、桧林Ａ遺跡と下原遺跡で同氏による火山灰の同定がおこなわれているが、今回の現地指導ではこれら遺跡間での層位認識の食い違いが指摘された。具体的には第Ⅱスコリア層～第Ⅲ黒色帯間が問題となっている。現地の調査員レベルでは今までニセローム等の鍵層からのスコリア層あるいは黒色帯の枚数で層位を決定していた。しかし、堆積状況の違いでスコリア層の見え方の違いがあり、それが誤認の原因となった。スコリア層と黒色土が互層となり、比較的分層が容易であると考えられてきた当地域であるが、それが裏目にでてしまった例である。これは休場層、栗色土層にも同じことが考えられ、愛鷹山麓や他地域との対比を考える上でもこれからますます火山灰同定（Ｙ番号）は重要になってくると考えられる。

註１　池谷信之氏の御教授による

＜参考文献＞
浦志真孝・池谷信之　1998　「静岡県における勝坂式土器の地域的様相」『縄文時代中期前半の東海系土器群　シンポジウム予稿集』　静岡県考古学会
大川清他編　1996　『日本土器事典』　雄山閣
山村貴輝他　1995　『大越遺跡』　熱海市教育委員会
黒尾和久　1995　「縄文中期集落の基礎的検討」『論集　宇津木台１』宇津木台地区考古学研究会
戸沢充則編　1994　『縄文時代研究事典』東京堂出版
笹原芳郎　1994　『焼場遺跡（Ａ地点）』　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
土　隆一・茨木雅子　1992　『静岡県地学のガイド』　コロナ社
池谷信之他　1991　『広合遺跡（ｅ区）・二ツ洞遺跡（ａ区）』沼津市教育委員会
池谷信之　1990　『広合遺跡（ｂ・ｃ・ｄ区）・広合南遺跡』
谷口康浩　1989　「諸磯式土器様式」『縄文土器大観１』小学館
鮫島輝彦　1971　『箱根火山の地学案内』

謝　辞

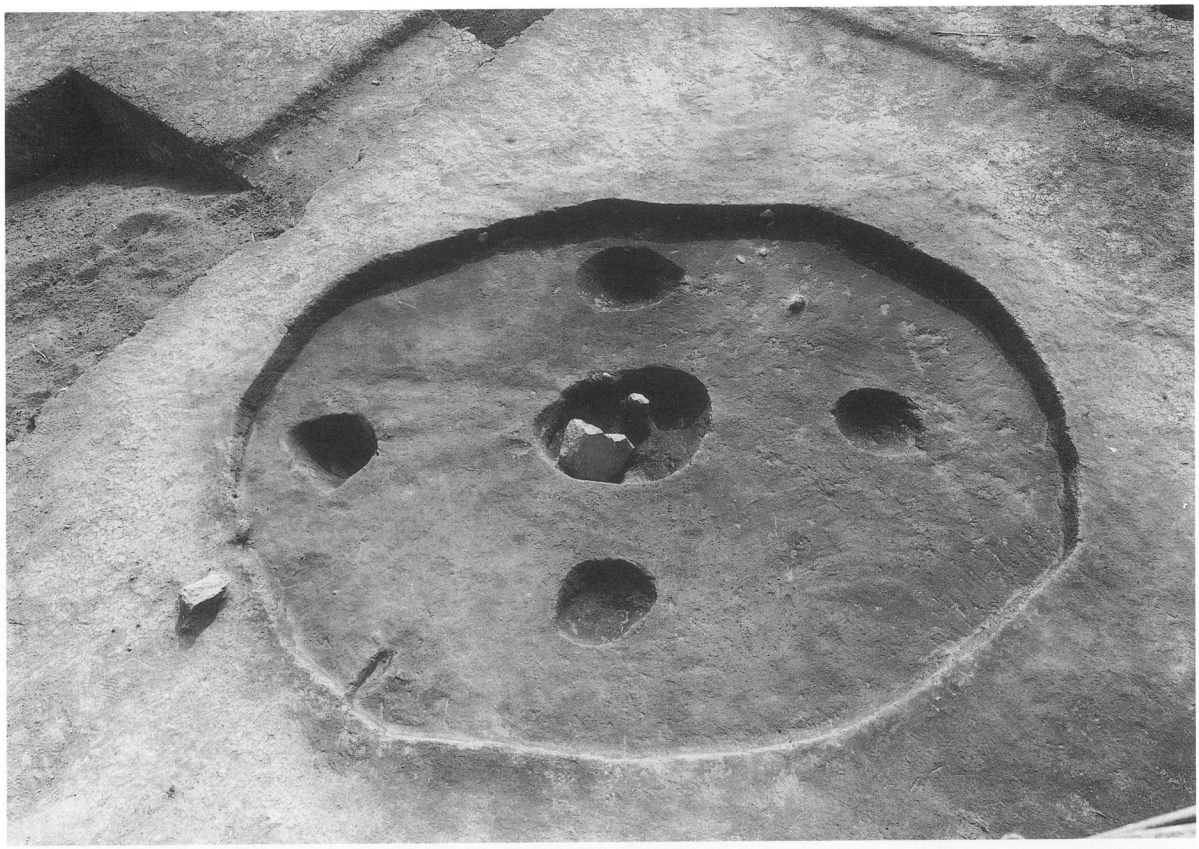
本書をまとめるにあたり、池谷信之氏（沼津市教育委員会）、守屋豊人氏（沼津市教育委員会嘱託職員）には土器について、細かな御助言、御教授を賜った。最後になったが心より感謝申し上げる。

写　真　図　版

遺跡周辺

１区遠景（徳倉Ｂ遺跡より）

図版 2



1号住居跡

1号住居跡炉残存状況

2号・3号住居跡

2号・3号住居跡

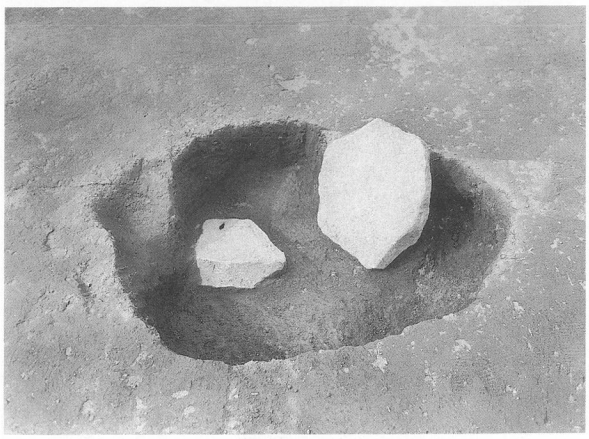
図版 4

２号・３号住居跡完掘状況

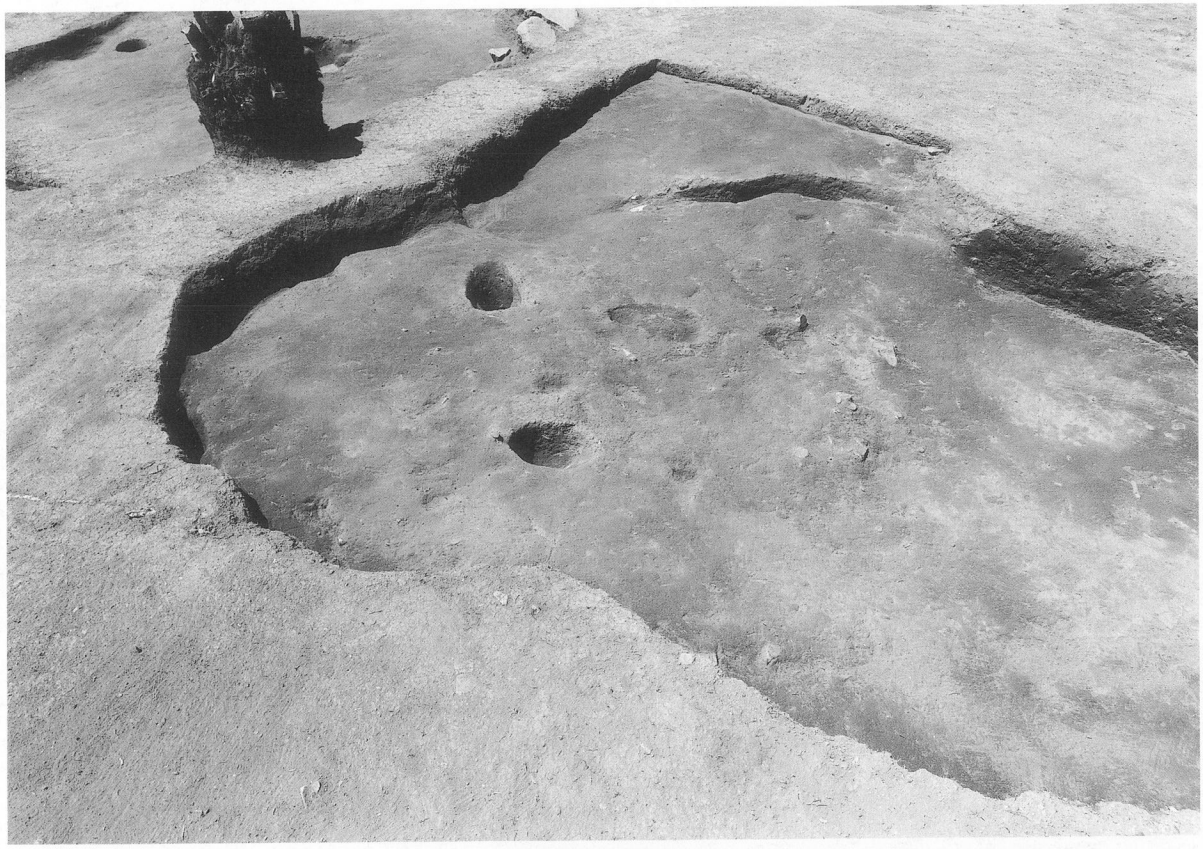
２号住居跡炉検出状況

２号住居跡炉残存状況

遺物出土状況



３号住居跡炉残存状況

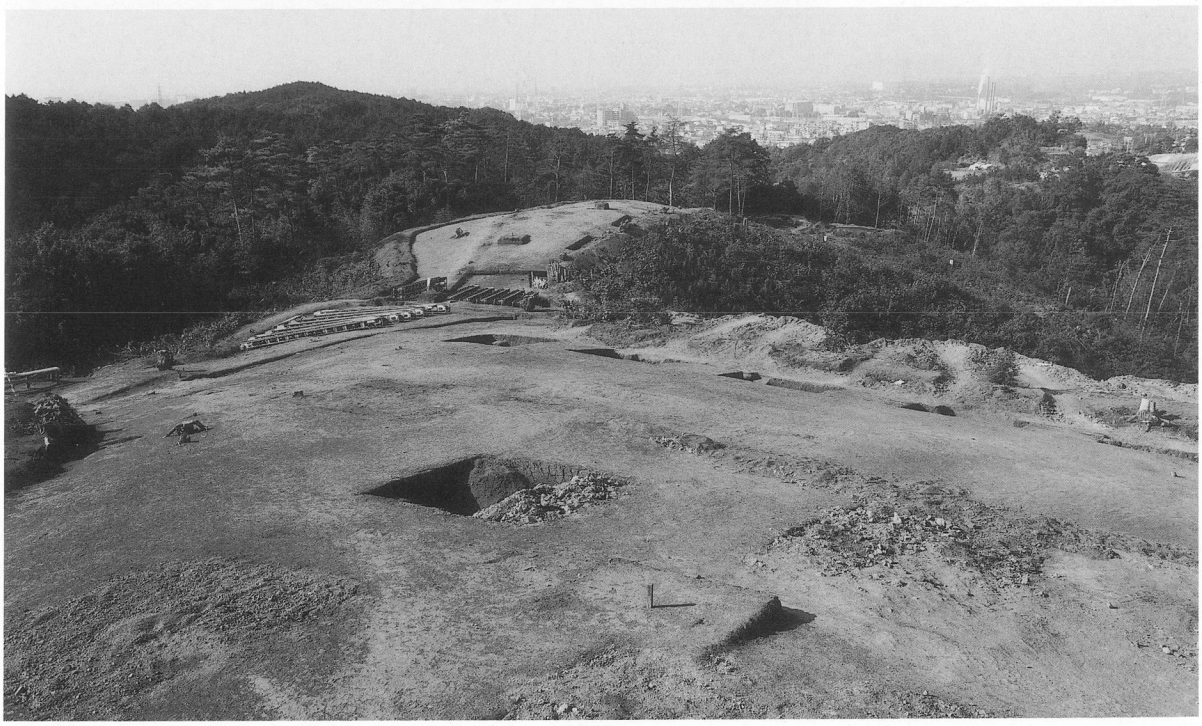


4号住居跡完掘状況

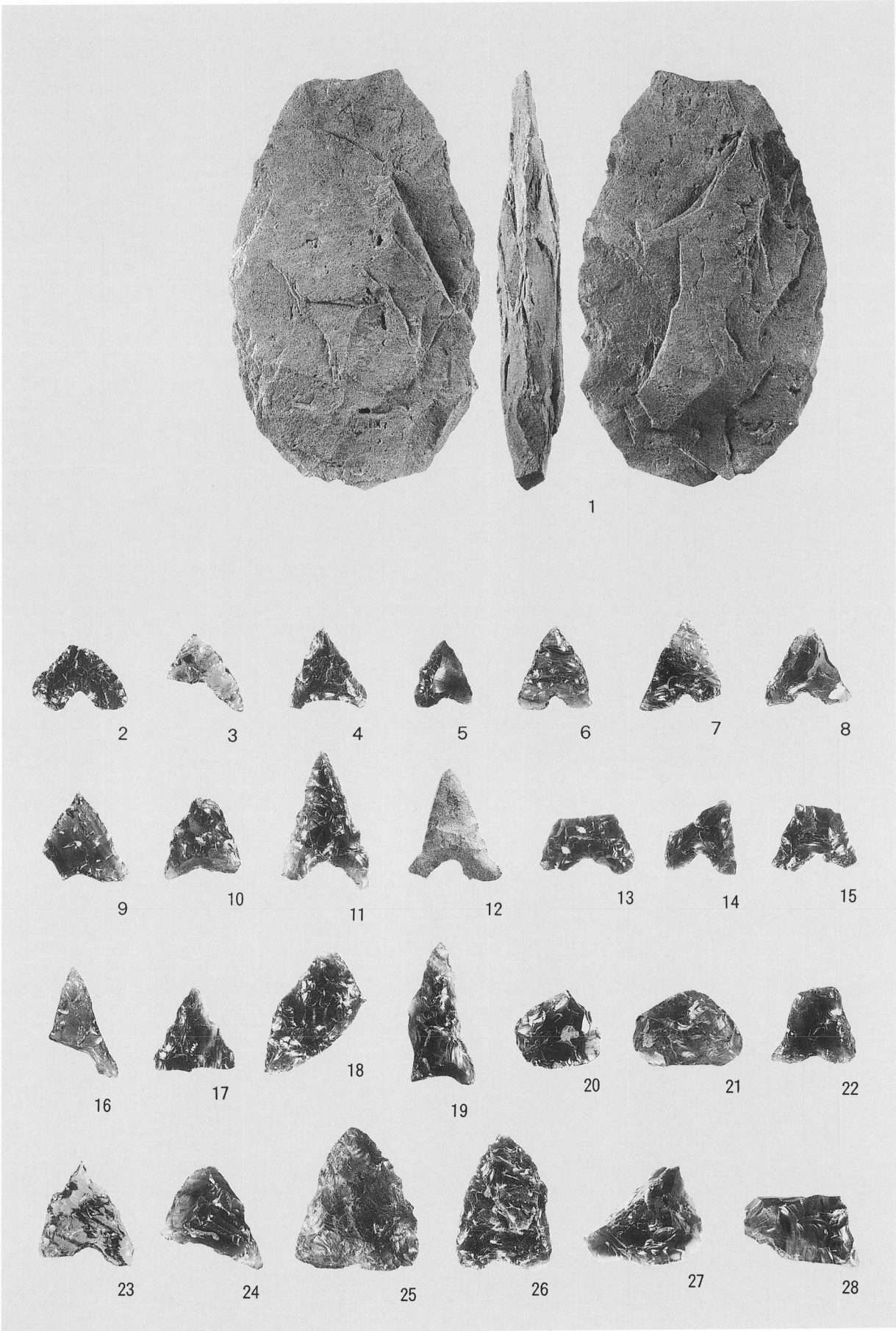
5号住居跡完掘状況

図版 6

土層堆積状況

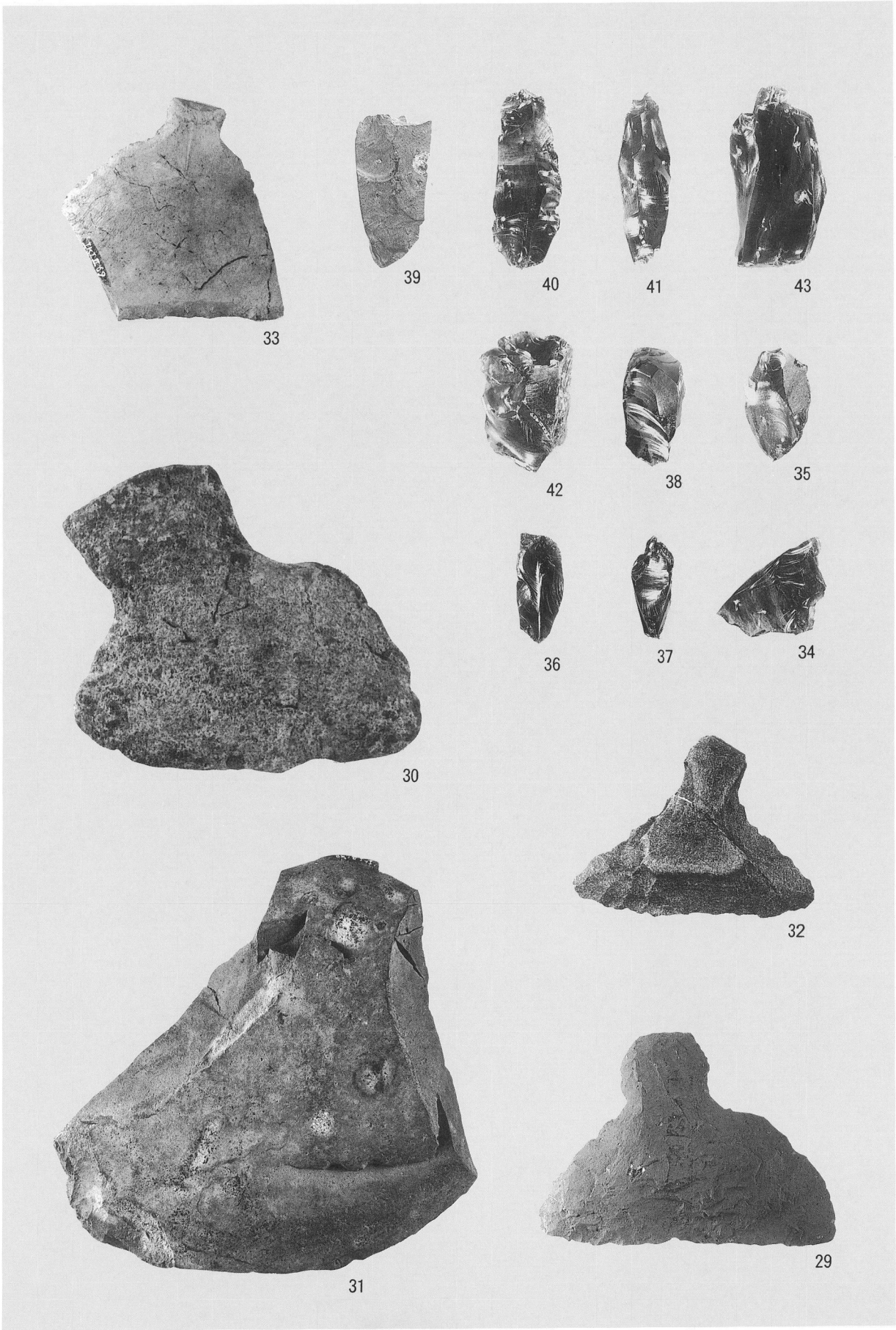


完掘状況

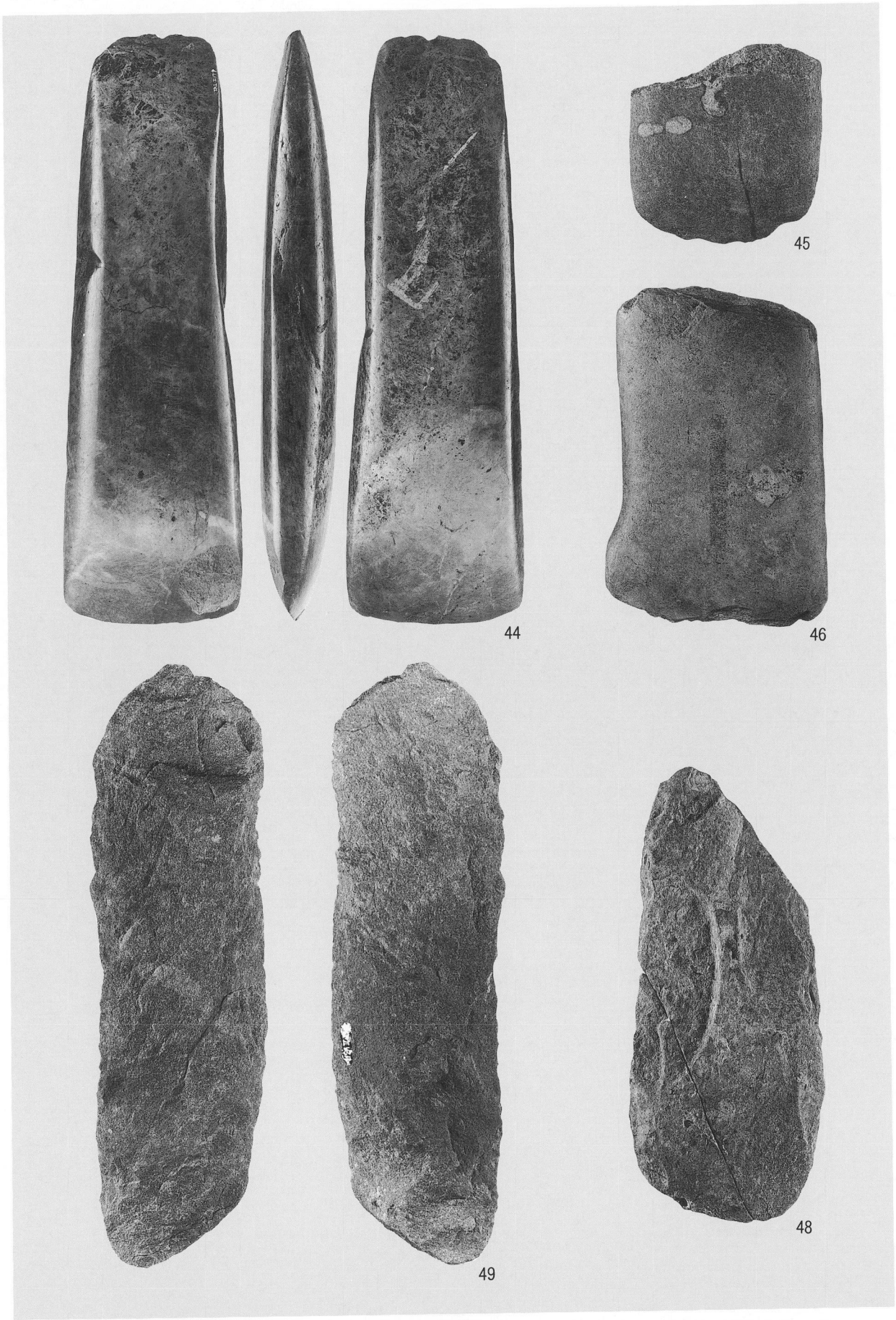


尖頭器・石鏃

図版 8

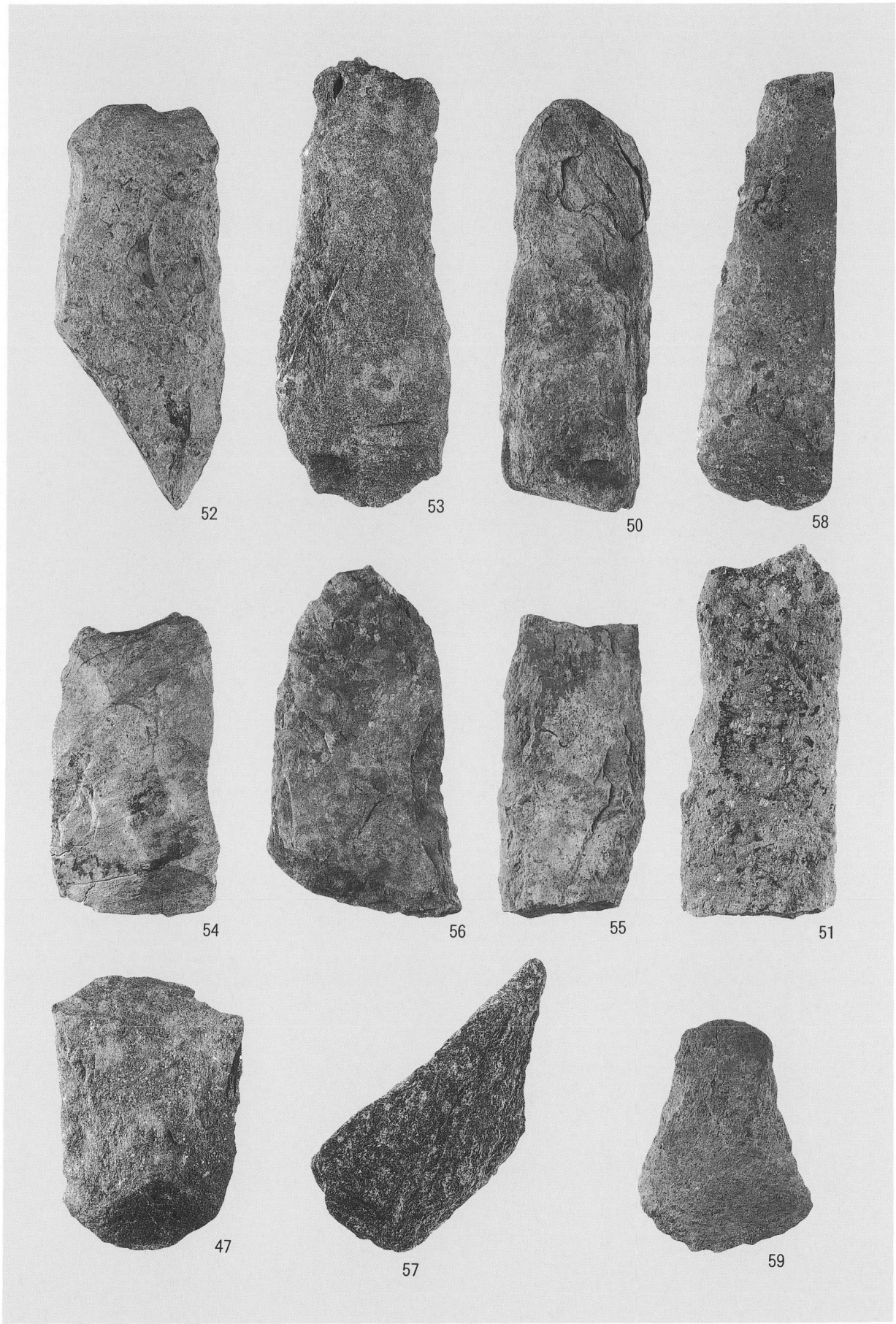


石匕・楔形石器

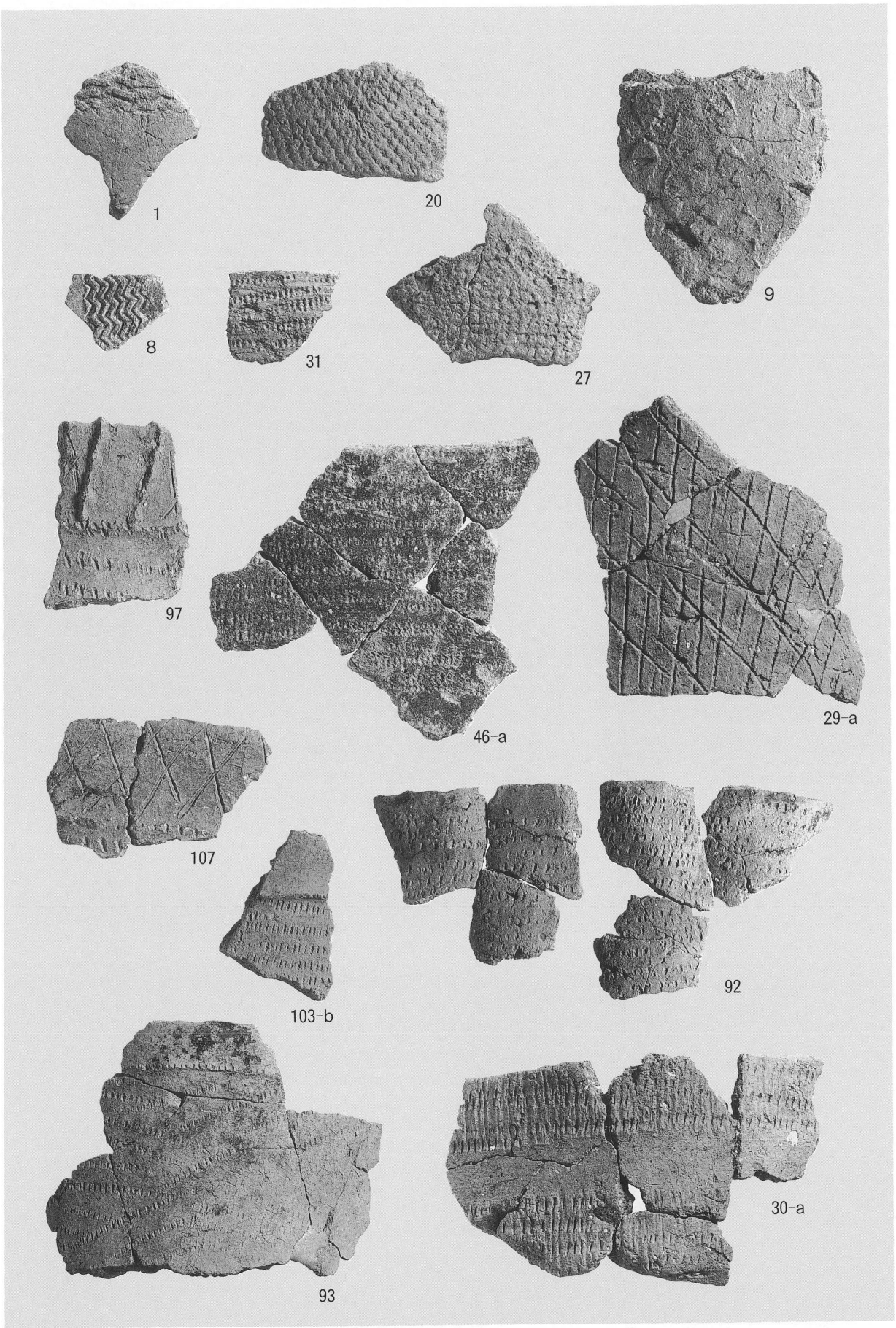


石 斧1

図版 10

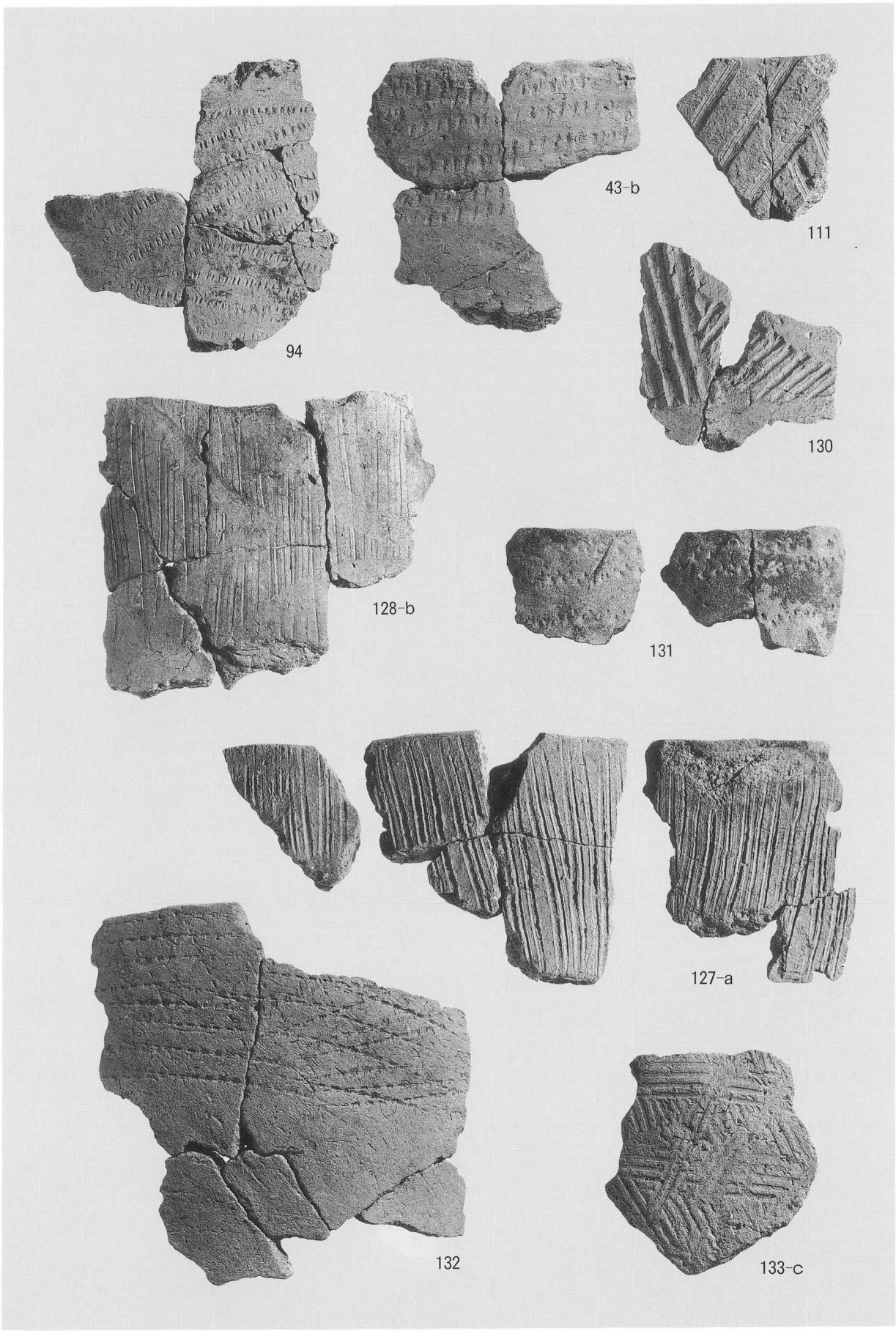


石　斧2

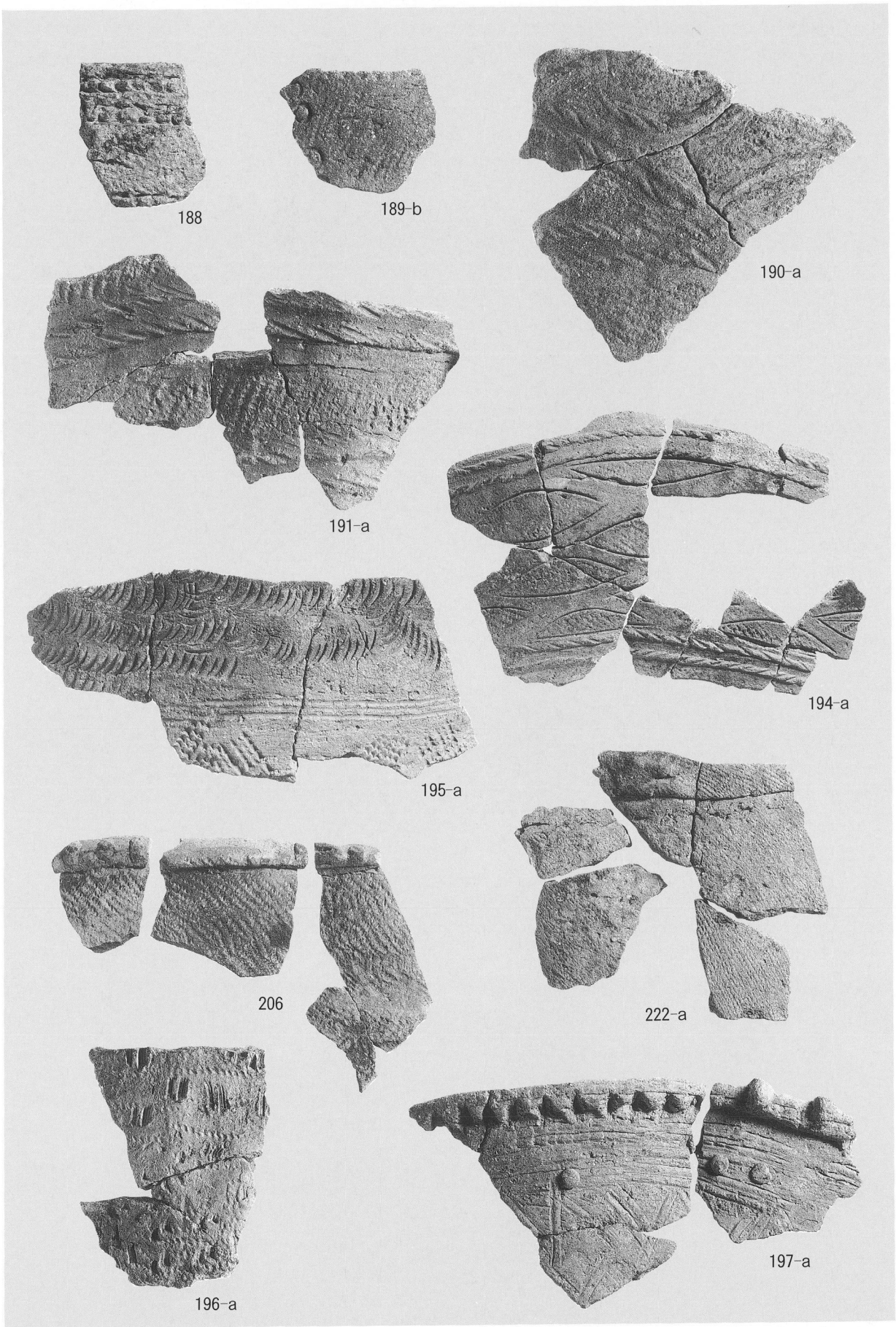


Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器

図版 12

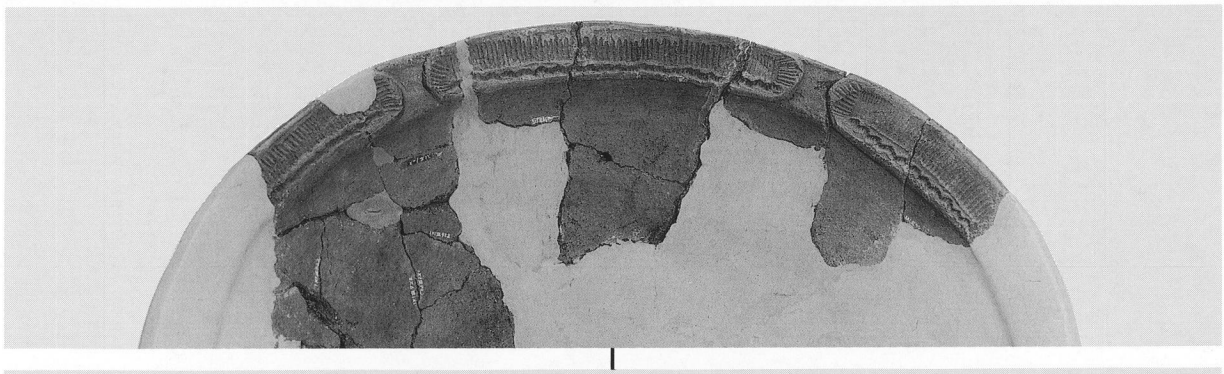


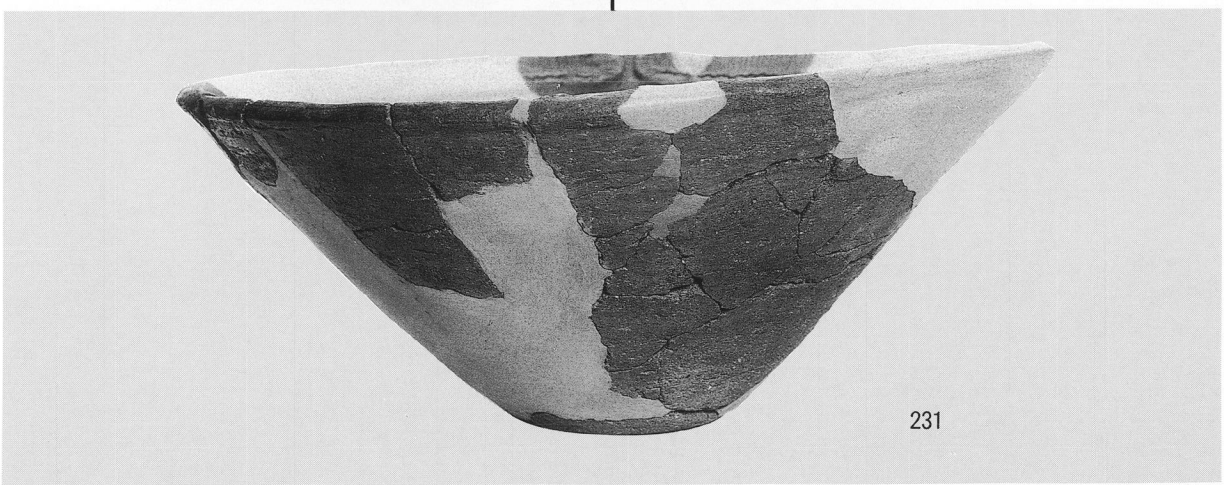
Ⅲ群土器



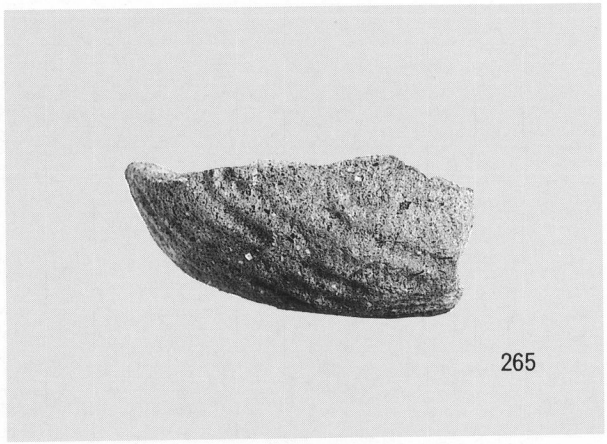
V・VI群土器

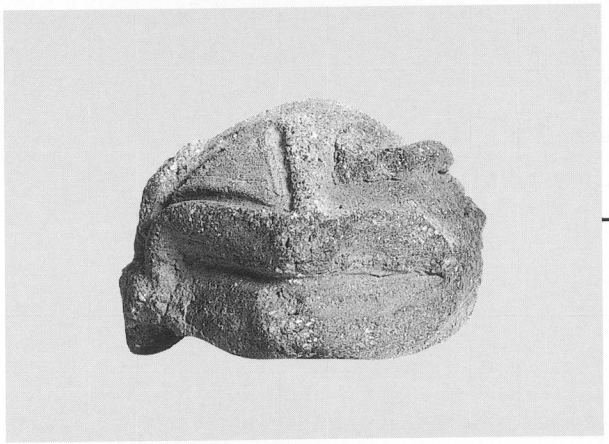
図版 14

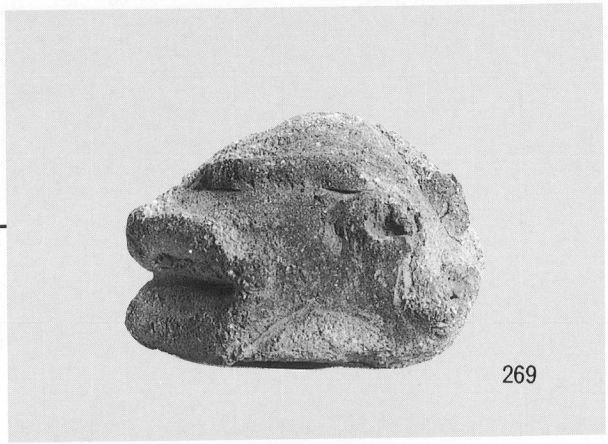


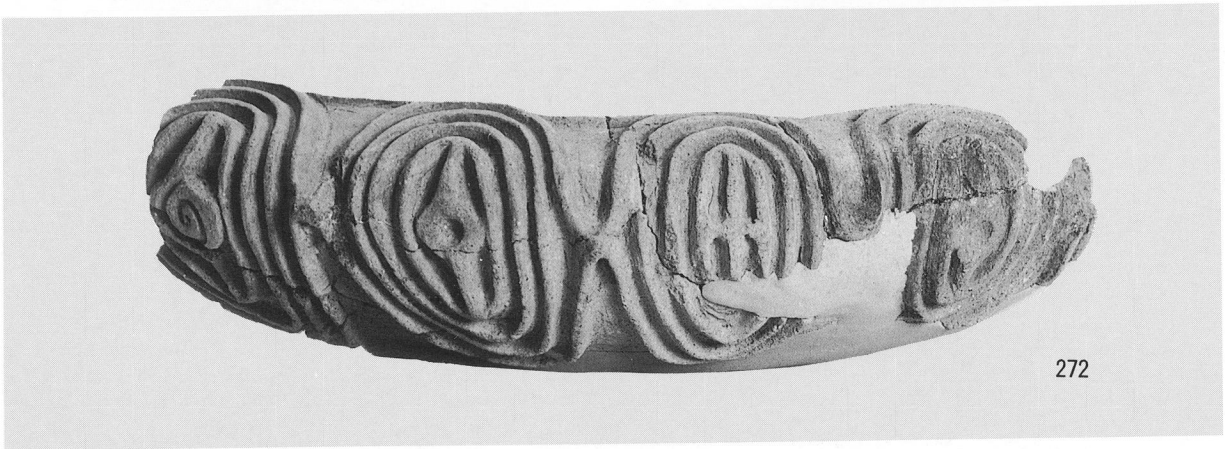


Ⅷ群土器 1



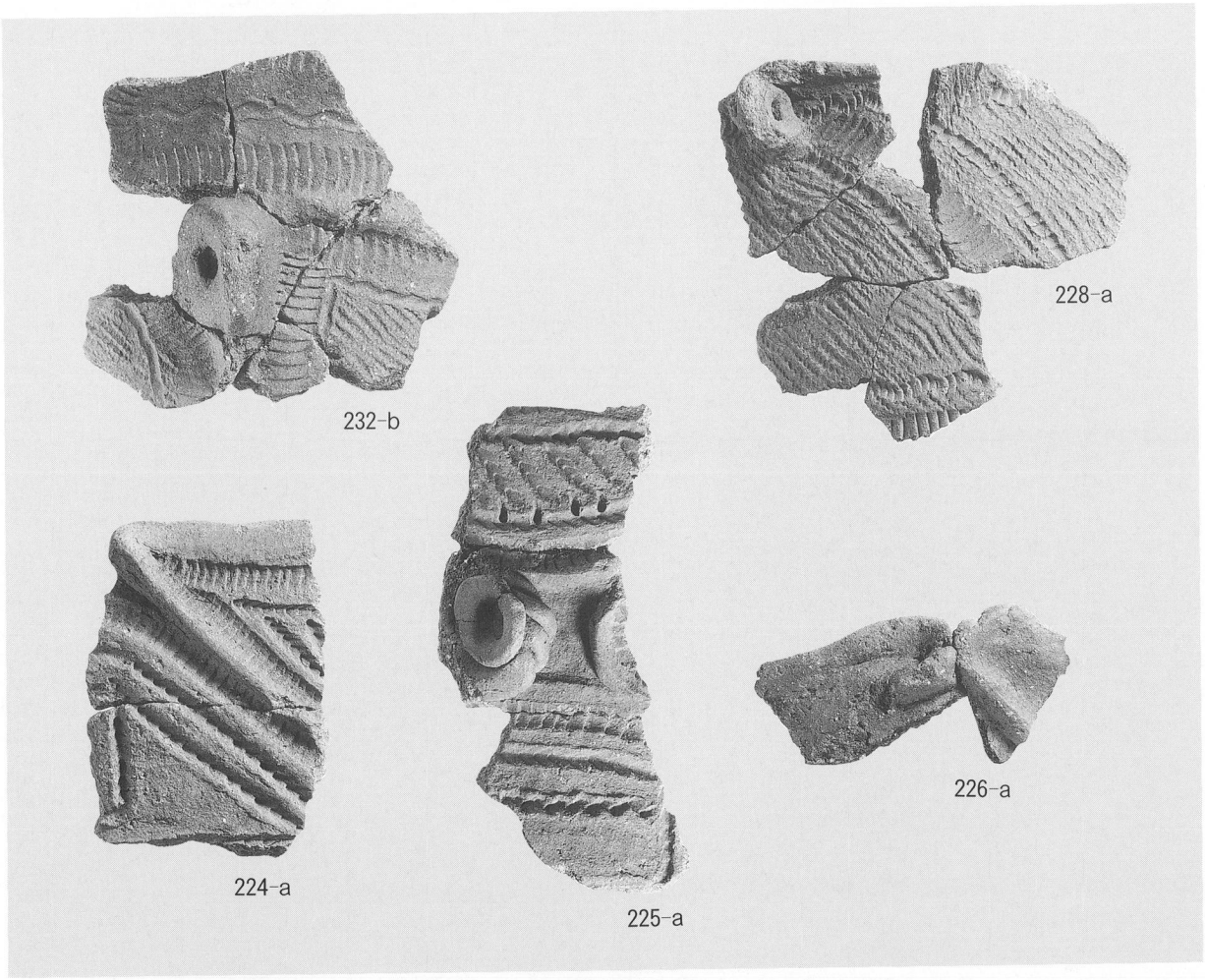




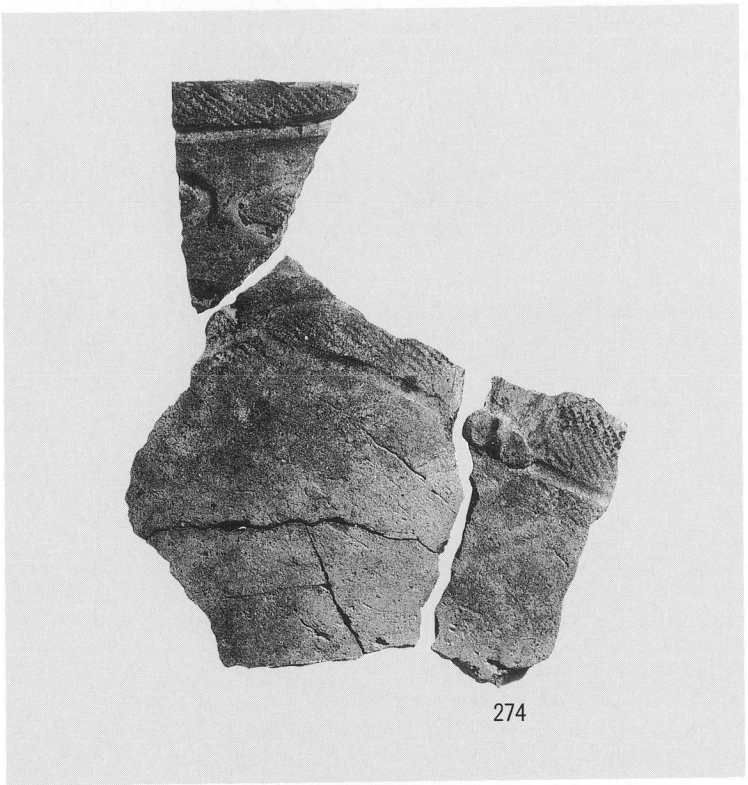


Ⅷ群土器２

図版 16



Ⅷ群土器３



Ⅸ群土器

作業風景

＜発掘調査参加者＞

阿部　正人　太田　光次　岡野　一　小野　孝　勝又　整一　加藤　博正
木内慎一郎　喜多村　清　小出　寛治　後藤　馨　斉藤　憲一　斎藤　晋
鈴木　君法　瀬戸　茂　富永　保　増田　寿樹　松田　稔　宮前　清一
渡辺　敏雄　安達　敦子　遠藤登志子　小林　敏子　杉山よ志子　鈴木亜由美
鈴木とき江　高村　玲子　田中　君子　新島　文子　平光　陽子　藤村　明美
峯松　順子　峰光　マサ　山本　洋子

＜整理作業参加者＞

吉村たまみ　加藤　直美　川口　幸子　村川　裕子　鈴木　洋子　夏目不比等
山本　町子　重信美知子　真野　恵子　越後さつき

＜遺物写真撮影＞

斎藤　晋

＜石材同定＞

森嶋富士夫

石材名については、柴田　徹氏（東京都立青山高等学校教諭）の指導により、従来までの当研究所での石材呼称を改め、関東地方との統一を図った。

報 告 書 抄 録

ふりがな	こ　いけ　い　せき
書　名	小　池　遺　跡
副　書　名	平成９年度東駿河湾環状道路工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第１０５集
編　著　者　名	笹原　千賀子　　井上　隆　　夏目　不比等
編　集　機　関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　在　地	〒422　静岡県静岡市谷田 23-20　TEL 054-262-4261
発行年月日	西暦 1998 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯／東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
こいけ 小　池	みしましとくら 三島市徳倉 1173-1	22206		35°09′/ 138°55′32″	1997 年 4 月 ～ 1997 年 10 月	5130 ㎡	道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小　池	集落跡	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代中期	住居跡	縄文早期～中期の土器 石斧、石鏃、楔形石器、敲石、磨石	縄文時代中期藤内期の住居跡

静岡県埋蔵文化財調査研究報告　第105集

小　池　遺　跡

平成９年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年３月31日

発 行 所　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
TEL　(054) 262-4261(代)

印 刷 所　みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　(0559) 21-1839(代)